

方 向

雙六

投擲

讀

書

附片卷

目次

方 向 社

京都市上京区下長者所通千本西入

昭和31年9月25日發行

尚友

目次

明月珠 中夏至朝詩選譯(六)

原田憲雄

1

補

李長吉をめぐって(六)

"

"

22

歸

李長吉をめぐって(七)

"

"

58

悲懷

從中起 潘岳小傳(中)

"

"

151

雙

六 嗣 隨 想 徒然草試論(六)

中 新

故

101

今西本邦和書院下五番五の印刷

行本百四頁半紙一五五號

明月珠

中夏歷代詩選譯之六

原田憲雄

無名氏

ひむがしに 朝日子おれて

てらすかな 秦氏の樓を

秦氏には よきこのありて

なぐはしの 羅敷 とこそよべ

羅敷 あはれ 露がひたくみに

桑つみぬ むらのみんをみ

しらぎぬを 籠のひもにあみ

けの柄には かつらのさえた

ひきつめしかみ かぐはしく

耳のへに つくよみのたま

もすそには さみどりのきぬ

むらさきは うはぎとなしぬ

いづくひと 羅敷をみいでて

日出東南隅

照我秦氏樓

秦氏有好女

自言名羅敷

羅敷善蠶桑

采桑城南隅

素絲為羅衣

桂枝為籠鉤

頭上休隱鬢

耳中明月珠

綉綺為下裙

紫綺為上襦

行者見羅敷

にをちろし ひげこやなつれ
わかきらは 羅敷をみいでて
かむりとり づきんをつけぬ
はたひとは すきをわすれ
たづくりは くわをわすれつ
かへりきて あひうらむるは
たんに かの羅敷を みしゆゑ

あてひとの みなみよ こしに
いづつこま 一こにたゆたふ
あてひと つかやをやりて
とはすらく たがいへのこぞ

「秦氏に 上きこのありて
なぐはしの 羅敷 とこいよべ
「あはれ 羅敷 としいくやばく
「はたとせに なほいたらねど

明月報
十三年十月廿六日

下榻將野路
少年見羅敷
脱帽背幘頭
耕者忘其犁
鋤者忘其鋤
歸來相怨怒
但坐觀羅敷

使君從南來
五馬立踟躕
使君遣吏往
問是誰家妹
秦氏有好女
自名為羅敷
羅敷年幾何
二十尚不足

景
田
報

とさ あまり いつつ はすぎぬ

あてひとの 羅敷にとふらく

「あはれ きみ ともにかわかむ」

羅敷すすみ こたへいふらく

「あてひとの なにぞ をこなる

あてびとは とうじいますに

羅敷だにも つまはもてるに

ひむがしゆ ちぢのうまきて

あがつまは かしらにきりぬ

なにきもつ まとかもしる

しろきうま くらごまつれて

あまきいと うまのまつなまぎ

くがねして かしらかざりつ

こしにつる 鹿盧のつるぎ

そのあたひ ちよろずあまり

十五頗有餘

使君問羅敷

寧可共載不

羅敷前致詞

使君一何愚

使君自有婦

羅敷自有夫

東方千餘騎

夫婿居上頭

何用識夫婿

白馬從驪駒

青絲繫馬尾

黃金絡馬頭

腰中鹿盧劍

可值千萬餘

かみかかげ つかさにいりて
はたとせに みかどにつかへ
みやちすぎ ちほまへつきみ
よそちには しろのちるじぞ
いろしろく まゆひりて
かみくろく ひげふるはーく
ゆらゆらに つかさにあゆみ
しづしづと 又やぬちをゆき
しろびとのなかに すまへば
ますらきと みな ほむるかもし

あまぐさの
とほきより きたりしひとの
女によせぬ ひとまきのきぬ
あまぐさの そきへにありて
かくまでの あがせのこころ

十五府小吏
二十朝大夫
三十侍中郎
四十寧城居
為人潔白昔
髣髴頗有霜
盈盈公府步
冉冉府中趨
坐中數千人
皆言大塔殊

無名氏

客從遠方來
遺我一端綺
相去萬餘里
故人心尚爾

あやゑびく、めまのさしどり

たちなやむ、ともねのふすま

むらぎもの、こひのわた、つけ

ほどけじの、かかりいとせむ

にかほもて、うるしにあはす

きみとわれ、たれかもしさかむ

末のべは、

王末は平家將軍勤が妻とつぎてはたとせあまりになりぬ。のち

勢は山陽の司馬氏の女にけさうし、末に子なしとて出たしつ。宋、

かへるときの、みちにかたべる 二首

とこのべにまひらめく帳や、

そとばかりて、ひかりおほひき、

なとともにかつてとつぎし

なとともにかまはもかへる

けにこめて、ささめしのちに

文彩雙雀鷲

裁為合歡被

昔以長相思

緣以結不解

以膠投漆中

誰能別離此

王

翩翩牀前帳

張以銀卷輝

昔將爾同卷

今猶在爾輝

織藏屋新經

宋

いつのひか また ひらくべき

たれかいふ さられしつまのこころ うとしと

さられしつまは そのこころ さらにあつきに

さちかたの めだは うやまひ つばせぬに

まして はや ともにありへし 帳をるに...

きみのへの はるけしといふにはあらね

たどたどと いゆきははかる

月讀は

つくよみは たかどのてらし

みづのごと ひかりただよふ

ものおもふ をみなのありて

ひたなげき あはれざまさる

たそや かく なげかふきみの

これはこれ たびびとつま

善優何時故

誰言去婦導

去婦情更重

千里不唾井

况乃昔所奉

遠望不為遠

躊躇不得往

曹

植

明月照高樓

流光正徘徊

上有愁思婦

悲歎有餘哀

借問歎者誰

言是客子妻

世のゆきて すでにととせ

われつねに ひとりすめは

きみや みちのへのちり

あれは みるそのひぢ

うきしづみ わたみにたがひ

いつのひに はたや あふべき

おはれ われ かぜとしなりて

ゆかむかな きみのみむねに

きみのみむね はたひつかすは

おがころろ たまにとるべき

うてなには

うてなには とばりひらめき

とよみきは あけしひのこと

西陵の しげれるききは

なにしがも うたご急きがむ

君行踰十年

孤妾常獨棲

君若清路塵

妾若濁水泥

浮沈各異勢

會合何時諧

願為西南風

長逝入君懷

君懷時不關

妾心當何依

謝

總維飄井幹

罇酒若平生

鬱鬱西陵樹

詎聞歌吹聲

眺

えりやめて なんだはみつれ
むらぎもの ころろはいため
さぶしかし たかみくらはや
まして わがろきみまはや

やまなかに

やまなかに ひとみえず
ただきこゆ ひとのことばの
ゆふひかげ はやしにいりて
またてらす こけのみどりを

たかむらた

たかむらた ひとりゐて
ことかなで はた うたふ
このはやし ひどくうが
つきききたり てらすのみ

たかむらた ひとりゐて

芳襟染涙迹
焯妓空傷情
玉座猶寂寞
况迺妾身輕

王

維

空山不見人
但聞人語響
返景入深林
復照青苔上

王

維

獨坐幽篁裏
彈琴復長嘯
深林人不知
明月來相照

王

香積寺

香積寺 われはしらわね

わけいりぬ やくもたつみね

さきふりて こみちもなきに

ひびかふは いづくのかねぞ

わきみづば いはほにむせび

ひかげさゆ まつのみどりに

ゆふつける ふちのほとりに

みづちふせ います 僧かこ

奉先寺

ここにしてみたらにあそび

さらにまたみたらにやどる

きりぎしにまつかぜせやぎ

はやしべにちらふつきかば

あめのとにほしのせせまり

王

維

不知香積寺

數里入雲峰

古木無人徑

深山何處鐘

泉聲咽危石

日色冷青松

薄暮空潭曲

安禪制毒龍

杜

甫

已從招提遊

更宿招提境

陰壑生虛籟

月林散清影

天關象緯逼

くもにふところもぞひゆれ
あかときのかねにめきめて
うちふかくかへりみらるる

この月がうつて

つきみちて あきの上ながく
はやしべに けらすさやぎぬ
あまのがは いまだおちねど
西南に 北斗かたぶく
きりぎりす ねやはかなしび
とりがねも わたることなし
ゆふされば いたる木枯
ひとりねに こぼしわぎへや
うきしづみ かくはたがひて
さかりすむ ともしとわれかもし
ひとのよは きぐやならぬを

雲臥衣裳冷
欲覺閨裏鐘
今人發殊省

韋應物

月滿秋夜長
驚鳥號北林
天河橫未落
斗柄當西南
寒蛩悲洞房
好鳥無遺音
商飜一夕至
獨宿懷堂食
舊文百千里
隔我與浮沈
人生豈草露

あつさむむに こころうつろふ

ほしくづは

星くづは 天雲の渚べに 冷え

露 濁き 圓うなり 盤の中に

好はしき 花は 木末に生れて

衰意 空き圓に 愁ひぬ

夜のそらは 玉しきの砌のことく

池葉は 極らに 青き錢かも

厭しや 舞衫 あまりに薄き

稍 知ゆ 花簾 子するに寒き

曉の風いたる 何ぞ 拂拂

北つべの星の奎の 闌干しきよ

雀門太守の行

か黒なる雲 城壓へ 城や摧けむ

寒暑移此心

李

賀

星依雲渚冷

露滴盤中圓

好花生木末

衰意愁空圓

夜天如玉砌

池葉極青錢

儻厭舞衫薄

稍知花簾寒

曉風何拂拂

北斗光闌干

(七月 五・30)

黒雲壓城城欲摧

洩れ日うけ きらめく甲 よらい さながらに金の鱗
角ふえの すみとほろ聲 秋小みき空にひびかひ
寒上の燕脂は えんじ 夜の紫と 色うフリゆく
半は搦きたる 紅の旗 易水のかたに臨へり
雷重く 鼓の音の寒うして 聲走たぬかな
黄金を臺に積んで 召したまふ 君の御意に
玉龍の剣いつさけ 死なめ 君がため

御溝の水 (改寫)

御苑に入りて 白々と 波にこれるは
宮つ女う 盤黄に 染むるなるべし
隈遠る 龍骨 冷やかに
岸うちて 鴨頭なす 波
かの館に 夢みるひとを 驚かせ
口ふらむ杯 とどめ流させよかし
あはれあはれ ただよひゆきて

甲光向日金鱗開
角聲滿天秋色裏
寒上燕脂凝夜紫
半搦紅旗臨易水
雷重鼓寒聲不起
報君黃金臺上意
振搖玉龍爲君死

(狂門太守行 王也)

入苑白泱泱
宮人正盤黃
遠隈龍骨冷
拂岸鴨頭香
別館驚殘夢
停杯泛小觴
幸因流浪處

しばしだに 何の君に あひまつらむを

七 夕 (改訂)

別浦 今朝 暗く

さ夜くたち 羅帷に愁れ

月よみに 穿線まつり 鶺鴒は

衣曝す棧に 螢こそとへ

天上に 破れし金鏡し

人間に 玉鈎と見し

錢塘の かの 蘇小小

更だ 一年の 秋のあひかし

惱ましき

宋玉は 悲い 空しく

嬌嬈の 粉 紅に

歌聲は 春草の露

誓得見何郎

(可成勢馬賦得何郎本
工、ワ)

別浦今朝暗

羅帷午夜愁

鶺鴒穿線月

螢入曝衣棧

天上分金鏡

人間玉鈎

錢塘蘇小小

更だ一年秋

1:1

宋玉悲空

嬌嬈粉自紅

歌聲春草露

門掩ひ 杏の叢枝

くちひろは 小さき櫻桃

眉に添ふ 桂葉ぞ濃ゆき

曉の粧 ちえかに

夜の帳 香りは減せぬ

鈿鏡には 孤つ鶉

障子には 江の水鏡 畫く

梳けづる 碧鳳 うねうね

か入さしの 金蟲 ひらめく

杜若 清露 含み

河濱のほな 紫草を聚め

月分けて 破く 鏡葉かもし

花じらは 髻に融す 朱

髪重く 霜かも 盤み

腰軽く 風はや 十倚る

密書は 萱巻とく 題づけ

門掩杏花叢

注口櫻桃小

添眉桂葉濃

曉匣粧秀鬢

夜帳減香尚

鈿鏡孤鶉

江圖畫水鏡

陂陁梳碧鳳

纏髮帶金蟲

杜若含清露

河濱聚紫草

月分破鏡葉

花合雪朱融

髮重凝盤霧

腰輕下倚風

密書題萱卷

隠語 芙蓉を 笑ふ

女鐘くそ 茶更の匣を

はた開けや 翡翠の籠を

珠弄ちて 濃煎 鶯かせ

蜜焼きて 胡蜂を 引ひぬ

醉緞 紅の細 抛し

翠羅 緑き蒙 挂く

蛇女に 錢數へしめ

巴賈に 藥賣はしむ

匂ふ臉に 斜産の べに安け

燈移し 夢熊の ゆめうら

腸攪は 束竹にあらね

脰急くは まさに張子

晚いし樹むらに 新蝶は迷ひ

残蠅の 斷虹 憶へば

古し時に 渤海 填め

隠語笑芙蓉

芙蓉茶更匣

休門翡翠籠

弄珠鶯濃煎

燒蜜引胡蜂

醉緞抛紅細

翠羅挂綠蒙

數錢教蛇女

冒藥問巴賈

匂臉安斜産

移燈想夢熊

腸攪非束竹

脰急是張子

晚樹迷新蝶

殘寬憶斷虹

古時填渤海

今日

今日し した 峻峒を鑿る
 繡沓は 長慢を裏げ
 羅裾に 短封 結け
 舞小鶴の 心は揺き
 飛ぶ龍の 骨 出つれ
 井檻はし 清漆 淋に
 門の鋪 白銅 綴る
 沓に隈く 兔の徑
 壁のへに 狐の跡
 玳瑁は 刺か 簾釘ち
 琉璃の扇 しちて 烘く
 象牙の牀 縁どろ 紫柏
 瑤の席 卷る 香葱
 朝の暁 細管 吟しく
 夜の楓 芳醪のへに落つ
 宜男 楚江に生ひ

今日鑿峻峒
 繡沓裏長慢
 羅裾結短封
 心揺如舞鶴
 骨出似飛龍
 井檻淋清漆
 門鋪綴白銅
 沓隈兔徑
 壁印狐跡
 玳瑁刺簾釘
 琉璃扇扇烘
 象牙牀紫柏
 瑤席卷香葱
 細管吟朝暁
 芳醪落夜楓
 宜男生楚江

梔子 金燭に發く
 龜甲開く 犀は透れ
 鵝の毛に 夢む墨濃し
 衛瑾は 黃庭 留し
 雜馮は 綠樹に養まふ
 雜唱ひ 星は柳に
 鴉啼き 露滴く桐
 黃娥こそ 初づ 座に出づれ
 寵妹の 始し 相從がふ
 蠟淚垂れぬ つきし蘭燈に
 秋蕪 掃ふ 綺籠を
 笠次きて 芭蕉引 翻へ
 酒沽ふと 新豊に 待つ
 短佩に 填る 粟なす愁ひ
 長絃に 削けど 絃なす怨み
 曲池に 乳香 眠り

梔子發金燭
 龜甲開犀透
 鵝毛夢墨濃
 黃庭留衛瑾
 綠樹養雜馮
 雜唱星懸柳
 鴉啼露滴桐
 黃娥初出座
 寵妹始相從
 蠟淚垂蘭燈
 秋蕪掃綺籠
 笠次翻芭蕉
 酒沽新豊待
 短佩填粟愁
 長絃怨削絃
 曲池眠乳香

小閣に 娃僮 睡む
 襜褕には 雙の鈴 簪し
 鈎結に 五綵 綴り
 蜀山の 烟飛ぶ 重錦
 巫峡の 雨濛く 輕容や
 錦屏は 温峯に 羞ぢ
 衣煎し 膏充を 避けぬ
 魚生れぬ 玉の 簞下
 人在ちぬ 石の 蓮葉
 水含み 翠き 城翠かもし
 樓に登り 溪をす 馬駿や
 使君は 曲陌に 居まひ
 園令は 茲印に 在り
 流聲くゆり へや 暖かう
 金爐には 性 細し
 春うらら 王氏の子

小閣睡娃僮
 襜褕雙鈴
 鈎結五綵
 蜀烟飛重錦
 峡雨濛輕容
 錦屏羞温峯
 煎衣膏充
 魚生玉簞下
 人在石蓮中
 含水翠城翠
 登樓溪馬駿
 使君居曲陌
 園令在臨印
 流聲流暖
 金爐性細直
 春暹王子簃

鶯のなよき 謝家の根

三つ星に 曙のつく玉漏

五つ馬に 逢ひし 銅銜

犀株 膽怯 防め

銀液は 心松を鎮む

跳脱もて 年命 看ひ

琵琶ひきて 吉凶を道ふ

玉時は 七夕にして

夫佐すは 三宮かもし

力無きに 重母は 送リ

方多く 繁葉に 帯りぬ

青き鳥もて 符を送り

縁の紗にて 囊は 縫ひつ

漢苑にしり 官柳を 尋ね

河橋のへに 禁鐘 聞めむに

月明に 十尋は 覺め

鶯轉耐感情

玉漏三星曙

銅銜五馬逢

犀株胆怯防

銀液鎮心松

跳脱看年命

琵琶道吉凶

玉時應七夕

夫佐在三宮

無力送雲母

多方帶葉萌

青羽青鳥送

囊縫紗縁

漢苑尋官柳

河橋聞禁鐘

月明中覺

笑ふべし 喜憂しきに

蜀国 終

楓香り 院花静かにて

錦水は 南山こそ影せ

驚し 石に墜露は衣ひ

竹生いし 半巖を雲

涼月の 紋浦に生れて

歎歎と 玉沙光やく

紅の涙を かすは誰か子

あはれ 塵塔ゆき過ぎかてに

惠笑盡空

(楳公 正 107)

楓香院花静

錦水南山影

驚石墜露衣

竹生半岩雲

涼月生愁浦

玉沙光

誰か紅涙

かてに過ぎ

(蜀国 終 I・19)

補

非心

李長吉をめぐつて

原 田 憲 雄

一、 罵臣守逸賤

1

われわれが古い時代の詩を讀むといふことは、いかなる意味があるのか。その詩がわれわれに強く訴えて來るがゆゑに。然り、恐らくそれと他にして、われわれの時代から千年も距つた昔の詩を讀むといふことは意味がないであらう。

それでは何故に、そのように古い時代の詩が、なお、今日のわれわれに強く訴えてくるのか。一言でいへば、われわれのうちにあると同じい心情が、そのうちにも見出されるからである。

ひとつは、あるいは、わたくしのことばに對して、疑いをいれるかもしれない。われわれの心情構造は、原子爆弾・水素爆弾の出現によつて著しく變化した。すでに戦前の人の心情との間にさえ、著しい差異がみられる。まして、千年以前の人の心情と同じさを得るはずがない、と。

まことに、もつともを疑いた、だが、果して、そうか。

原子爆弾や水素爆弾が世界に大ききな變革をもたらした。社會機構や國家構造を動かしてしまつたことは確かである。けれども、人間の心情構造もまた、さほどに變化したとは、思えない。それは、人間の身體構造が社會機構や國家構造ほどたやすく變化しないのと同じである。

人間の心情構造の變化は、おどろくべく緩慢である。その緩慢さの中でこそ、はじめて、文化といふも

のが發生し、醜陋し、生長しえたのだ。

人間の心情構造の變化の過程を説くには、漢の無名氏作「焦仲卿の妻のためには作れる」という詩一首を見ればよいだろう。この作は、焦仲卿の妻と、焦仲卿の母との間の不和から、終に夫妻が死に至る悲劇を描いたものである。この詩にあらわれる姑の心情、これになやむ嫁の心情、仲にたつて追遠に窮する夫の心情、それらは、二千年後の今日になお、依然として見出される、普遍的な心情ではないか。

また、長恨歌を思つてもいい。戀人を失つたひとは、おのれのかなしみが、千年以前に楊貴妃を失つた玄宗帝のそれと、あまりにも似ていることを知つて驚くであらう。

ただし、このようなおおよそな類似のみでは、文學における、なかに詩における、共感共鳴の問題は解きほぐせぬ。われわれは、さきにいった心情を、思ひきつて徹底的に掃蕩し、検討してみなければなるまい。

野狐撒謊

野への粉に撒しき壁は黄ばみて

煙管清涼

秋の夜に銅の鞞こいんとは

臺城舊教人

臺城に皇子にさぶらう歌ささげしに

秋夜夢銅鞮

秋の夜に銅の鞞こいんとは

吳霜路

吳の霜は髪のけにはつはつふりて

身與櫻菊賦

身は瘧のべの瘡のほととせに曉らう

脈脈靜金魚

脈脈くまぐまつつ金魚帯かえしまいらせ

羈臣守史賤

しずのおのつたなきまことひとり守らん

(I・3)

宮城の與深く、壁に椒をぬりこめ、冬のさなかにもなお汗ばむほどの暖かさをたもってかぐわしかつた
皇后の部屋が、半ばくずれてあらわに野の風をうけ、椒壁は土ぼこりをかふつて黄ばんでいる。かつては
一本一草に善美をつくした御苑も、今は鷹草の下にかくれ、樓閣も歌臺も複宮もすべて廢墟。萱ばかりが
冷たい光を寫さつて飛びめぐる。宮中に皇子と詩歌を唱和した身が、今は冷え冷えとした秋の念に、ひと
り太子の夢を悪い夢みるのだ。髪には點々として白髪がまじり、この身は池のべに枯れぬす菊の稜の如く
に衰えてはた。さまざまの感慨が催してきて、心に餘る思いも口にはつくしがたい。今はわが官職を示す
金魚帯もお返し申し上げ、つたない誠をひそかに守つて、残年を終えよう。

この詩には、辭を失つてひとつとなつた鳥の叫びのように悲しい響きがある。老い衰えて初めけおちた
猛禽が檻の中で時折ひくく鳴くに似た落魂たる感情がある。新たに若い鳥が来てその傍に棲おうとも、こ
れともしに鳴き合おうとせぬかたくをなすでの意志が現れる。

それらの響き、感情、意志は、いわば、氷山の頂にすぎず、現れぬるところに、その義骨倍もの重く
るしい體驗が沈んでいようように、讀むものの胸にせまってくるものがあつてはなないか。

この詩には、長言が自ら附した、次のような序(ことばかき)がある。

交肩吾は、梁の時に、常に宮體の諶・引を作りてして皇子に應和まつりき。國の勢の倫敗うるに及び、肩吾は、先ず難を會楮に潛け、後、始めて家に還りぬ。僕そのとき、必ず遺せる文ありしならんと思ふに、今は得ることなし。故に「會楮より還る歌を作つて、以て、其の悲しみに補うえぬ。」

齊の代の時吾には充分だったこの存し、今日では、なお説明を加える必要があるであろう。

交肩吾は、杜甫が李白をたゞえる句に「清新瘦賸存」とうたったその閑行なる交信には父にあたり、南朝派の人である。字を子慎（南史には慎之とする）といい、八歳にして詩をよくしたといわれる。初め梁の武帝の第三子晉安王國の常侍となつた。王は後の太宗簡文帝である。普通四年（五二三）王が都督揚州刺史に遷つたとき、隨つて推州に至り、中大通三年（五三一）王の長兄昭明太子が薨じ、王が皇太子に冊立されたとき、肩吾は東宮通事舍人を兼ね、後、安帝湘東王中錄事諮議參軍・太子率更令中庶子に累遷した。太清三年（五四九）太子が武帝の後を嗣いで帝位についたとき、肩吾は度支尚書となつた。度支尚書は、今の大藏大臣に當る官職である。

これだけを記せば、肩吾の行路は極めて順調であつたように見える。だが、事實はすこぶる暗澹としていた。

肩吾の仰ぐ太宗は名は帝であつても、まこととは丞相侯景の監視下に全く自由を奪われたカイライにすぎなかつた。

侯景は朔方の人。後魏の肅宗のとき、六州の大都督で秦谷の酋長である爾朱榮の幕下におり、懷朔鎮函

使の高欽と親しかった。魏の政柄は帝の母胡太后が握っていた。高欽は禁に帝側を滑めることをすゝめた。太后が帝を毒殺すると、禁は兵を擧げて太后を討ち、長樂王子攸を立て、帝とした。禁には不臣の志があり、攸はこれを知って、自ら剣をとってこれを刺殺した。禁の従弟爾朱世隆は、長廣王暉を立て、洛陽に入り、攸を弑し、更に暉を廢して、瀋陽王恭を立てた。

成行を看望して来た高欽は、突然、兵を起して、同友の從弟爾朱世隆を誅戮の名のもとに討った。

このとき、侯景は、高欽に怏恚して、象を率いてこれに降つたのである。高欽は洛陽に入って恭を廢し、平陽王攸を立て、自ら大丞相となつた。攸は帝となつたもの、高欽をおそれてこれを伐とうとし、高欽が事前を知つたため長安に奔つた。欽は清河王の世子善鬼を立て、都を鄴に遷した。これが東魏である。

侯景は高欽の下にあつて、五四年には司徒河南大將軍大行臺であつた。欽が大人物であつたため、敢てその謁使に甘んじていたが、野心満々たるものであつた。かつて高欽にこういつたことがある。

「もし三萬の兵を與えて下さるなら、天下に横行して、江を濟り、蕭衍老公を縛り取つて、太平寺の坊主にしてやりますかぬ。蕭衍老公とは梁の武帝のことであり、太平寺とは、晉治通鑑の胡三省の注によれば東魏の鄴郡の地にあつたものようである。

ところで高欽には心服していた侯景が、欽の子澄には、冷たい眼をしかくれなかつた。

高欽がいう、しやるかきり、おれは敢て何もせめが、なくなられたら、鮮卑の小僧なんかと、どうして一語に、やれるものか。澄は、欽が鮮卑族の女に生ませた子だから、こうおつたのである。

五四六年、高澄が死ぬと、澄はその死を秘した。侯景の次官の陳元康がこれを知った。景は、おのれの東魏朝廷に石ける位置を不安に思つて、河帝に據つて欲き、魏に歸屬し、まもなく、函谷以東、岷山以西の十三州を擧げて、梁に附かんことを求めた。

梁の武帝はこれを群臣にはかた。群臣は、侯景を容れることによつて、現に保たれてゐる魏との間の和が破れること、景が魏帝を討つて交對した、武帝もまた、これを慮りはしたが、景のもち出した十三州と、彼の實力に魅力があつた。右衛將軍朱异が帝意を迎合して、つとめて景を納れることをすすめた。帝は遂に帝に従つて景を納れ河南王に封じた。

東魏は五四七年冬、侯景を撃たせた。翌二年正月景は揚陽に敗れて、かろうじて逃げ、梁に救いを求めた。武帝はこれを南豫州の牧とせしめた。二月、東魏の高澄が梁に旧交を復せんことを申入れて來た。その言論には「梁主と東魏の先帝とは共に佛教篤信者で、利好して來た。現在の兩國の狀態は決して梁主の御本意ではあるまい云々」とあつた。武帝はこれを見て流涕し、朝議にはかた。この和議には及對論が多かつた。高澄は食えない男であること、この和議から當然排魏せられる侯景の動きが案ぜられること、などが、その理由であつた。ところが、このときもまた余景が象議をおさえて通好を主張し、戦亂を好まぬ武帝はこれを容れた。

秋八月、侯景は壽陽で、朱异などの帝側の者を誅するとの名目で叛亂軍をおこし、ただちに建康にせまつて臺城をかこみ、以後、五カ月にわたる死闘が續けられる。湘東王暉らが援軍をおこして、侯景軍

を圍んだが、中々城中との通信がつかない。城中では、皇太子以下モッコをもつて土をはこび、土壘をきずいて防禦にあたる。尚書省の建物を壊して薪とし、しきものをきざんで飼馬とし、鼠をやし、菴をとらえ、軍馬を休し、戦死者の肉を交えて食らうに至った。

倭景の軍とても似たような状態であった。さらに荊州から援軍至るの報も入る。景は気が氣でなかつた。そこで部下の王偉の策をとって、太清三年二月、いつわつて和議を城中に申入れた。皇太子は城中の人々の窟窟はなほだし、ことをあわれんで、和議を許さんことを帝に獻議した。帝は怒つて「憐れむる位なうたんだ方がまだだ」とまでいう。太子はなや「援軍も互に他に憑依するのみで、積極的に戦おうと致しませぬ。今しばらく、和議を容れて後圖をはかった方がよろしうございませう」と固く請うた。帝は長い間ためらうまいながら、ついにううちやうやうにいつた。「まあ、お前の考え通りにするがいい。だが、後で物笑ひになるようなことはするな」。

かくて和議が成立し、帝は倭景を大丞相、都督江西四州諸軍事、豫州牧に任じ、盟約を交した。だが倭景は、そのまゝ圍みを解かず、三月遂に臺城を陥じられた。景が入つて見ると帝は顔色一つかえすにいった。「卿は軍中に在りて日久しい。つかれの出ぬようにするがいいな。景は帝を仰ぎ見ることができません。顔面に行が流れてやまなかつた」。

景はまた表福香に行つて太子に慰めた。太子もまた自若として、口さしかぬおそれの色も見せぬ。景が舞をなすと、太子からことばをのけてきたが、景はついにこたえることができなかった。こゝろを激戦も恐

くいと思つたことのおいおれが、太子をみたとときには、そつとしたね。あれが天威というものであろうか。もうあの人に鞭を合すことは、ごめんだ。景は退いて、腹心の部下にこつこついたものだった。

以後、武帝、皇太子、及びその側近の者はすべて、殺されるものも軟禁され、食糧さえ極度の制限をうけた。武帝は憂僧の餘、病を發した。五月丙辰の日、口中に苦味を覺え、蜜を求めたが、それさえ與えずれぬ。「あ、あ、」武帝は、怒りとも、なげきともつかぬ聲を吐いたまゝ、息絶した。辛巳の日、皇太子が帝位に即いた。

夏、有吾が度支尚書になつたのはこのような情勢下においてであつた。何らの職權があつたわけではない、凡そ持といふ力と名づくべきものは、すべて大丞相の侯景とその一黨の手にあり、新帝の傍らにある人々はみな壇上の官僚に他ならなかつた。

3

侯景が臺城を陥れたと聞くと、梁の諸藩鎮は、それやれの州によつて侯景討伐に立つた。

上甲侯瑒は臺城を出奔して江陵に至り、武帝の密詔を受けたと稱して兵を徵集してゐた。永安侯瑒は、その身武を侯景に愛されてゐたが、共に瀕に出かけ、鳥を射るふりをして景をわらうたが、弦が切れたため果すかして殺された。湘東王繹は、景が臺城を圍んだとき、いちばやくその背後をついた人、景にとつては最も恐るべき敵であつた。江州刺史尋陽王大心立ち、邵陵王綸起り、始興の太守陳顯先が義軍を結

んでいた。

侯景は帝の詔といつわつて、肩吾を江州の人心のしとに遣わし、その反抗を中止さすべく、ヤとさせた。肩吾は逃れて逆に東方に向い、會稽に至つて潜伏していた。侯景の腹心の將軍宋子仙の軍隊が會稽を破り、首を懸けて索めたあげく、ついに肩吾を捕縛したのである。

宋子仙は肩吾を殺さうとしたが、その高い文名を知っていたため、こんなことをせし出した。

「元前は、詩かたぐみだということだ。おれの目の前でうまく作つてみせれば、命をとるのだけは、待つてやろう。」

子仙は侯景が最も重用した武將の一人である。だが高敏に重用された景が、敵の死後たゞちにその子の邊に殺されたように、子仙もまた、いつまでも景の隨使に甘むるような男ではなかつた。ヤきに臺教を隠れた直後、景が子仙を司空に陞進させようとして武帝にこれを求めたところ、帝は「三公というのは陰陽を變理調和すべき職だ。子仙のような男を、どうして、そこにつけることができるかね」と拒んだものである。景に對する懐疑を子仙に托してぶちまけたにすぎないともいえようが、このことは、子仙の中に侯景の性格の存することを指摘し得ているのである。

ところで、いかに強大な兵権を持つものも、それだけでは、天下はおろか、一國をも思ふまゝになしうるものではない。彼等は、つねに文筆の士を必要とした。子仙も、あるいは、この文豪を幕下に加えて、おのれの聲望を高からしめようと考へたのかも知れない。

肩吾は立ちどころに筆をとって書き上げた、甚だすぐれた出来はえてあつた。子仙は肩吾をゆるして、建昌の今に任命した。肩吾は聞道をとつたのがれ、備に苦勞をなめ、數年を経て、やつと江陵に歸るを得たのであつた。このときには、肩吾の主とする南文帝はすでに僑京のために殺せられ、帝の弟の湘東王暉が即位した後で、江陵は、護するわち元帝が、建康より移して梁都と定めた地であつた。

4

『還自會稽歌』は、江陵で元帝に見えた後、舊都建康に還つて、瘞瘞を目的あたりにした肩吾の心境を歌つたものであろう。

わたくしは、この歌に長吉の補うえた肩吾の悲しみの、背景となる時代の動きを、『梁書』、『南史』、『資治通鑑』の三史によつて説明して来たが、肩吾が度支尚書となつて以後、江陵に還るまでの動きについて、三史の語るところにはばざがあるように思ふけられる。

『梁書』卷四十九交肩吾傳にいう。

太宗即位し、肩吾を以て度支尚書と爲す。時に上流の諸藩、並びに州に據つて景を拒みき。景、詔を繼つて、肩吾をして江州に使し、當陽侯大心を諭さくむ。大心尋いで州を擧げて賊に降る。肩吾因つて逃れて建昌の東に入り、之を久しくして方に江陵に赴くことを得たり。未だ幾ばくもなくして卒す。『南史』卷五十交肩吾傳にいう。

願文即位するに及び肩吾を以て度支尚書と爲す。時に上流の舊鎮並びに州に據つて侯景を拒む。景、詔を繕^つて肩吾をして江州に遣し、當陽公大心を諭さしむ。大心乃ち賊に降る。肩吾困つて逃れて東に入る。後、賊宋子仙、會稽を破る。肩吾を購得し、之を殺さんと欲す。先ず謂いて曰く、「吾れ汝の能く詩を作ることを聞けり、今即ちに作るべし。若く能くせば汝の命を貸さん」と。肩吾筆を操つて便ち成る。辭采甚だ美なり。子仙乃ち釋し、以て建昌の令と爲しぬ。勿つて、關道より江陵に奔る。江州の刺史を登て、義陽の太守に領し、武康縣公に封ぜられ、卒して散騎常侍中書令を贈らる。

夜肩吾が大心を訪ぬべく、建康を出でての後の行動について、通鑑は全くこれに觸れない。梁・南二史も本紀中には一字も書けぬ。ただ列傳中に記すのみだが、梁書は極めて簡單であつて、宋子仙との出会いの場面の如きは、たゞ南史がこれを詳にするのみである。

宋の王褒の因學記聞には「李仲信、南北史、世説を爲りき。宋文公請えらく、南北史の凡そ通鑑に取らざるところの者は皆小説なり」といふ。宋文公とはいふまでもなく朱子のこと、その語は、翁元圻の注によれば「朱子語類」に見える。「南北史は、通鑑に取らざるところのものを除けば、其餘は只だこれ一部の好笑的小説なるのみ」をさすものであるといふ。

ヤすれば、夜肩吾・宋子仙をめぐむ挿話は、信賴しうる歴史的事実ではなく、多分にフィクションを含む。好笑的小説々に過ぎないのであるか。

肩吾が使した宏の大心は、「二史いすれも、當陽公（侯景）」とする。わたくしが「當陽五大心」と記した

のは、^四梁書卷四本紀に「太清三年（中略）六月（中略）壬辰、當陽公大心を封じて尋陽郡王と爲す。」^{南史}
卷八梁本紀下第八に「太清三年（中略）六月（中略）壬辰、當陽王大心を立てて尋陽王と爲す。」^{通鑑}卷一
百六十二梁紀第十八、太清三年六月條下に「壬辰、皇子大心を封じて尋陽王と爲す。」侯景、趙威方を以て
豫章の太守と爲す。江州刺史尋陽王大心、軍を遣わして之を拒ぐ。等とあるに據り、侯景が肩吾を江州に
遣わしたのはそれ以後と見たためである。梁南二史は、この以前に、すなわち大心が未だ當陽公であつ
たとき、すでに侯景が肩吾を派遣したとするのであろうか。

もうとも、^四梁書第四十四卷列傳三十八尋陽王大心傳には「大寶元年尋陽王に封ず」とあり、^{南史}卷
五十五尋陽王大心傳には「大寶元年尋陽王に封ず」と記して、大心の尋陽王になった身を、太清三年の次
の年にかけている。これらうは「當陽公」と記するのは當然である。それにしても、梁、南二史の、本紀と
列傳と、その記事がすてに撞着し、^{通鑑}とも相違するのは、何に由來するのであろうか。

大心が州をあげて賊に降つたのは、大寶元年^{七月}戊辰のことで、三史とも一致するが、宋子仙が會稽を襲つ
てこれを破つたのは、^{梁書}卷五十八列傳五十侯景傳には、その前年の太清三年十二月とし、^{通鑑}には、
太清三年冬十一月のこととする。^{南史}には月を詠^やぬが、いずれにしても、大心降伏以前のことである。
ところで、^{通鑑}によると宋子仙は大寶元年には、夏四月侯景に召されて京口に還り、冬十月徐文盛の
軍と戦つて苦しむ任約を助けに具磯に赴いた以後、大寶三年夏六月、湘東王暉の部下王僧辯と戦つて敗れ、
捕えられて、江陵で殺されるまで、いずれも西方の戦線にあつて、東方の會稽に轉戦したことはないよう

である。わたくしの通鑑の読み方がおやまわっていないならば、梁・南二史が、肩吾の會稽にのかれた時を、大心降伏後のこととする記事は、矛盾するわけである。これらの齟齬は、一体、何に因るものであろうか。わたくしは、この持着をながめなから、一つの想像にいざなわれる。

侯景は、肩吾を大心のもとに遣わすとき、いずれば己の腹心の部下を肩吾につけて監視させたに違いない。けれども、肩吾は、そのすきそみて、大心のもとに至る以前に逃れ、その跡をくぐりますために、大心の所往とは反対の東方に走り、會稽に潜伏したのではないか。そうして、宋子仙にとらえられたのは、大心降伏の前年ではないか。長吉が果してこれらの事情に明らかだったかどうかと、わたくしは詳にしえないが、『還自會稽歌』の序の「肩吾先潛難會稽」という「先」の一字に、わたくしの想像を肯うような氣息が感ぜられるが、いかゞであらうか。

次に、『南史』は、「江陵に奔る」の後に「江州刺史を聖、義陽の太守を帥し、武陵縣侯に封せらる」とつづけて、ついで「卒す」とするに對し、『梁書』は「江陵に赴き、未だ幾ばくも無くして卒す」とする。『南史』の記事は、肩吾が江陵に還つてのち、すなわち、長吉の「序」に即していえば、「始めて家に還りし」後、江州刺史となり、義陽太守となり、武陵侯に封せられた」ということになるのであろうか。

『梁書』の「未だ幾」ということは「赴江陵」と「卒」との間、ほとんど多くの時間を容れない書き方である。そうして、この方が、長吉の「還自會稽歌」の「脈脈辭金紱、鸞臣守邊戍」に即していうならば、妥當をように考えられる。

また、應の世には、梁書は秘庫中に藏せられ、一般の人々が梁の歴史をよむことは、早ら南北史によつたといふことを、史家の説に聞いた記憶がある。もしやうだとすれば、長吉の序のこの言は、何と根拠としてなしたものであろうか。

これらさまざまの疑いについて、わたくしは既に史家の教を尋ねたいと願っている。

5

南史にいう「江州刺史を歴て、襄陽太守を領し、武陵縣侯に封せられたのが、江陵に至って後のこととすれば、金鑑より選つて」のちも、肩吾の社会的地位は、長吉のうたつた「追賤を守る」の語とは相當しないものである。

梁書にいうごとく「未だ幾ばくりなくして卒した」とすれば、長吉の歌とは相應わしいものであるが、しかも「金魚を辭す」についていへば、梁書が記さぬところであつた。

杜牧は「李長吉歌詩序」に「金銅仙人辭漢歌、補梁虜肩吾宮體謠は、情狀の離絶して遠く玄り、筆墨の畦徑にも亦殊にこれを知る能わざるものを求め取りき」という。さすがわたくしが先に掲げた種々の鉄語は、長吉の死後十五年に、すでに、正文はもとより、稗史・卷談のたぐいにも見出しがたい。好笑的小説、虚無荒誕の語に過ぎないとされたのであろうか。

世人は、或いはその割斷したかもしれぬ。けれども、長吉が正文に記さぬ肩吾の心情を補つたところは、

架空のところに一篇の小説を虚構しようとしたものではあるまい。

史書に重んずる事實は行為の外界である。史書もまた心理を描くに吝かではないが、史書のとりあける心理は、行為として表現せられるか、さなくとも、明らかを結果と呼ぶべきものに限られる。

人間を洞察するには、行為はもとより、行為として表現せられず、また明らかを結果をよばない心理に親察と判断の能力を缺いてはならないか、しかも歴史家は、かく親察したものを、社會の大勢を示すに必要なもの以外は、削り去るべき決断を、その親察と同意、もしくは以上の、能力として、持たねばならぬ。歴史の書は、その目ざすところが、社會の動きにある。中夏の正史は多く列傳をたてて、個人を描くに熱心であるように見うけられる。しかしながら「古書には凡そ事を記し、論を立て、及び經を解する者皆これを傳と謂う、寧ろ一人の事蹟を記すに非ざるなり。其の寧ろ一人を記して一傳と爲す者は、則ち選より始まる」と清の大批評家趙翼が『二十二史劄記』卷一にのべる。つまり、列傳は單に一人の事蹟をのべることが目的ではなく、社會の大きな動きを描くための注釋である。列傳にとりあけられる個人、その行状、心理等、すべてその時代、その社會を描くに必要を部分として選ばれるのである。個々の史書について検討すれば、もとより、個人の個々の心情、行為を描いて詳細に過ぐるものもあるではあるうが、多少くとも史書に列傳を設ける本來の意圖は、そこにあったとみななければならぬ。

ところで、史家の捨て去つた個人の行状、心情を、なお固く保つべきひとがある。それが文學者のため

ある。文學の場合とくらえられる傳記には、史家のとらぬ行爲はもとより、行爲とならぬ心理、明らかでない結果をよばぬ心理もまたとりあはせられるであらう。何故かなら、些々たる心理もまた、それ自體が人間を形成するところの要素であり、人間の運命を動かしてゆく契機だからである。

佛家には「一念三千」ということがある。刹那の念にすら、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天・聲聞・緣覺・菩薩・佛の十界を具し、十界が互に十界を具し、その百界の一行に、相・性・體・力・作・因・緣・果・報、本末究竟の十如があり、その千如の一行が衆生・國土・五陰の三世間にわたると説く。平凡無奇な人間のはかまぬ思いも、宇宙の運命と微妙にかゝわりあつてゐることのへたものであらう。文學者の仕事は、そのような世界と人間とのかゝわりを、人間の側に即して描き出すことにあるのである。すなはち、行われなかつた思いもまた、行われた思いと同じ比重でとらえられねばならぬであらう。

6

文學作品と讀んで、最初にはわれわれのうちによひさまされるものは牽引が反撥があるのである。この牽引は作品の魅力とよばれ、反撥は作品の抵抗とよばれてもよいであらう。たゞ、最初の一瞥に生じた魅力または抵抗と同じ程度で常に讀者の心裡に保たれるわけのものではない。だが、魅力や抵抗の大きい作品は、われわれをそのまゝ他に立ち去らせないのであらう。我々をこれにひかへたり、反撥したりしつつ、親昵し、反復するであらう。また一作品ではおこなふことができずに、同じ作者のすべての作品を讀破しなければやま

文學の歴史と批評の歴史

ない衝動を覺えしめるであらう。幾度か、一人の作者の全作品をよみかえすうちに、われわれの胸には、作者の人間像の形成されていることに氣付くであらう。すべてに形成されたこの人間像は過去に死せるものではなく、たまたまに、われわれに、生きたものとして、その作者が生前に書きのこした作品群の中にはない別の世帯についても、新たに歌いかけ、語りかけてくる。その歌いかけ、語りかけは、おほろなもの、かすかなもの、抽象的なものではなく、明瞭なもの、確實なもの、具體的なものとして、例えはある一個の比喩として、象徴として、リズムとして、韻として、ことばの組合せとして……つまり一個の全く新しい作品として、われわれに迫ってくるのである。それは、かつて彼が作ったといわれなかつ、すべてにほらいて今に見えない作品のかたちとしてあることもあり、彼がそのようなものを作つたかどうかはわからなないが、ある一つの條件からは、どうしても生れねばならないと考へられるかたちをとることもある。こゝうした語りかけは、たゞのそよのかしに終らすに、わがて、語られたわれわれの手をかりて、明らかなる作品となる。かくして生れた作品は、実は、もはや元の作者の作品ではなく、われわれの創作なのだ。われわれの胸のうちでは、これをあのれの創作とみることは肯じがたいものが残るであらう。敢てしよの作者の作品としないまでも、作者の心情になぞらえたものとし、或いは作者の心情を主調とする一編曲と考へることに安らさを覺えるであらう。

長吉の「補志」は、まさにこのようなものであつた。

中夏の詩には、偲和、雜擬、追和、和韻、用韻、依韻、次韻等の作が少なくない。これらはいずれも

その發生において「補悲的要素を包むものではあるまいか。

陸游は「古の詩に偈あり、和あり。雜擬遠和の類あり。しかれども、和韻なる者なし。唐に始めて用韻あり。同じく此の韻を用うるを謂う。後に依韻あり。然れども次を以てせず。最後に次韻あり。元白より皮陸に至って其の體するわち成る」といつているやうである。(王隱蔚卷十入)

偈和はスロットを補うもの、いわば骨格をなぞらせるものであるに對し、和韻は、ひびき、にのみ、つやを補って肉付けするもの、といつてよいであらう。「補」う方法としては和韻は偈和よりも更に進み、さうに深まったものであらう。古の詩に「偈あり和あり、和韻なし」とするのは自然であり、「唐にはいふてこれを見よ」ことは、すこぶる興味ふかい。

もつとも、翁元圻の注によれば、六朝にすでに次韻の詩が見られるやうである。けれども、それは例外的な存在で、大勢においては偈和の說を女富とするのであらう。假りに、翁元圻の擧げた二三の他に和韻の詩が少なからず見出されるにしても、偈和の詩が、これに先立つことは動かせまい。和韻は偈和よりも詩法としては徹視的である。徹視的なるものが、巨視的なるものよりも、自然發生的に先行するといふことは、まずありえないことだからである。

それほとしかく、長言が、その悲しみを補おうとした肩音を、他ならぬ唱和の詩人であつたこと、いな、選自會播歌が、唱和の詩人としての面で肩音を捉えていることに、われわれの眼を注がねばならぬ。長言はその存で「當に宮體の謠、引を作りてもて皇子に應和えまつりき」といふ、更に詩中で「臺城想教人

と云うたっているのである。

肩吾の仕えた簡文帝は、名は皇帝でし、全く僕景の傀儡にすぎなかつた。しかし、暗愚無能だ、たといふのではない。

南史「卷八梁本紀下第八」によれば、帝は幼にして聰睿であつた。六歳にしてすでに文をつくり、これを信せぬ武帝の面前でたらどころに一篇の文章をつくらせて宏嘆させたのである。長ずるに及んで器宇寛弘、未だ嘉愷の包をあらわせず、尊嚴神のごときものがあつた。

帝は天監二年（五〇三）にまれ、同五年晉安王に討せられ、普通四年（五二三）都督揚州刺史にうつつてゐるから肩吾がはじめて仕えたのは帝が救之年四歳か二十歳までの間である。

自ら六七歳にして詩評あり、長じて優ます」といふ帝は、すでに晉安王時代に文學者を手もとに、あつ

めていた。東海の徐摛、吳郡の陸泉、彭城の劉暉、儀の弟の孝威らがそれで、肩吾は晉安王サロンの、最高ブレンドであつた。皇太子時代、文德勳をひらいて學士をいいた。肩吾の子の信、摛、摛の子の陵、吳郡の張長公、北地の傅弘、東海の鮑至等であつたが、こゝでも肩吾が學士の長者であつた。これら學士の仕事は、宮中の圖書の整理をはいぬ、さまさまであつたが、詩文の創作活動に多くの時とエネルギーが費されたといつてもよいであらう。

然れども帝の文は雍雍に優めり。時に宮體と號す」と南史にいふ。「太宗は天才縱逸、古今に冠たり。文は別を時に輕華を以て罪となす。君子の取らざるところなり」と梁書にいう。

簡文帝がその子の當陽公大心に與えた手紙の中に帝の文學觀を吐露するところがある。

「身の立つるの道と文章とは異なり。身を立つるには先ずすべからく謹重なるべきも、文章は且くすべからく放蕩なるべし。」(體教錄)

文は載道の器、すなわち、モラルの表現手段にすぎないとする中夏文學の傳統的な考え方からすれば、帝の文學觀は異端であり、士君子の取らざるところとなるのである。侯景が臺城を陥れてのち武帝にまみえたとき朱异等帝側の姦臣を除くためにこの譽をなしたとのべた辯疏中に「太子もまた浮華の文に外けりや」とある。武帝はこれに對して言葉がなかつたといわれる。逆賊の士君子ナリも皮肉だが、これに對して言を發し得なかつた武帝の胸には「載道の器的正統思想がなほ強い權威をもっていたのでもあらうか」ともあれ、こうした簡文帝を中心とする宮廷サロンから生れた詩文の華麗でスマートなスタイルを「宮體」といつたのである。(なお、魏晉以後、人臣が詩文をもって天子の作に和することを應詔といひ、皇子に對するときは應命、諸王に對するときは應教といつた。)

このサロンは一つのシムフォニーをかたてたのである。そこに屬する詩人の作品は他の一人の作品とわかちがたいまでに密着していた。簡文帝と肩吾とは中にも殊に共鳴度が強かつた。肩吾は簡文帝に和するものとしての自覺に立つて常に詩作してきたのであつた。

彼が會稽から歸つたとき、帝はすでになく、帝のサロンに属した詩人たちも、あるものは死に、あるものは流離していた。「まり帝のサロンは亡人だのである。もはや肩吾は和すべき向ものをも持たなくなつたのである。いわば振動数と同じくする二つの音又の一方が喪失したのであつた。これは見方によつては、伯牙が鍾子期を失つたよりもなお悲劇的な事件といえるであらう。「秋食夢銅鞮」には他の音又をうしなつた一つの音又としての肩吾の寂寥感が痛切である。「身與蟻滿梳」はもはや音又としての生命の終つたことさ知らされた肩吾の悲愴な心情が肉體的なかげりをもつてあらわされ「脈脈辭金魚、羈臣守逆賤」には、たとえおのれに共鳴を求めぬ新たな音又が出現しようとし、おのれは共鳴すまいとする純情があらわれているのではないか。

長吉の「補遺」は、單に歴史的な事件の空疎を補うというふうなものではない。葦蕪における共感共鳴の秘義を語っているのである。

美わしい藝術上の指和が生れるのは、実に偶然といつてもいいほどの稀有なる條件がみたされ、それにあつかる人々のたえまない努力によらねばならぬ。しかも、そのようにして生れた指和も、野蠻な暴力によつて忽ち亡び去ることであらう。

「これら、さまざまのことと、一言でいえば、葦蕪の中に内在する一種の悲劇性の指和といふ意味と「還自會稽歌」は、もっているのではないだろうか。

二、柳惲乘馬歸

歴史の書は、本質的にその記述を全體に即して巨視的ならんと意圖するが、文學は個に即して微視的ならんことをその本質とする。

しかしながら、このような兩者の本質の差が中夏の文學史の上で自覺的になつたのは、いつごろのことであらうか。わたくしは不敢にしてこれを明らかにはしえないが、少くとも長吉は、文學と歴史とはつきりと區別して、文學の場て人間をとらえようと凝視してゐた人であることは強く言うことができようである。

『蘇小公墓』(I. 20) 『李夫人』(I. 43) 『金銅仙人辭漢歌』(II. 59) 『公莫舞歌』(II. 102) 『漢宮姬飲酒歌』(IV. 27) などは、いずれもそのような凝視の作品化したものであり、これらの作品をつくらざるを得ない長吉の心情の動きこそ「補悲」とよばるべきものであつた。

これら「補悲」的作群の中にあつて、『還自會稽歌』は、殊に注目すべき作品であるように、わたくしには考をうれる。それは、この詩が、史書の記述の終つたと、うから始まる點にかゝつてゐる。

『梁書』、『南史』共に、肩吾の傳は、肩吾が會稽からのがれて江陵に至つたところで終る。そののちに續く若干の記述『梁書』の「未幾卒」も『南史』の「歴江州刺史……卒贈散騎常侍中書令」も、いわばつけたりであつて、肩吾の行爲・心情の世界にとつて、ほとんど價値のないことがらである。

長吉がとらえたものは、正に兩史が拋棄したところを端緒としているのである。

だが、きつしたことが、長吉において、何故に注意せられねばならぬか。仔細でもない、これが、長吉に見のかすことのできない詩法の一つだからである。

2

汀洲白蘋草

柳惲乘馬歸

江頭燈樹香

岸上蝴蝶飛

酒盃蒼葦露

玉軫蜀桐虛

朱樓通水陌

沙暖一雙魚

みぎわなるむつじぐさ

柳惲はうまにてかえり

江のほとりしどみほかあり

さしのえに蝴蝶ひらあく

さかすきにししたたるさけも

たまの小琴もなべてものうし

あけの模みなとにのぞみ

すなあたたくよる女男の魚

「直和柳惲」(下)と題する詩で、その意は平明である。春景を描いて、や、鬱悒の氣をたゞよわせては

いるが、温藉であり、長吉にしては珍らしくあつたかゝり作品である。柳惲は六朝の齊、梁間の文、字と文暢といひ、河東の解の出身で、早くより令名があり、詩篇を作曲にたくんであつた。祭に仕えて吳興の大

守に至った。傳は載せて梁音にある。長吉の作は、惺の作に追和してなしたものである。注家吳正子曰。
「億嘗て江南曲を作る、云く、汀洲採白蘋、日落江南春、洞庭有歸客、瀟湘逢故人、故人何不返、春
華復應晚、不道新知樂、只言行路遠」と。長吉の追和せらるは必ず此の篇をらん。故に首に「汀洲白
蘋の句あり。

と云ふが、こゝに一ア問題がある。注家王琦が、吳正子のこのノートに異義を挿んでいるのである。

今、細やかにこれを校ぶるに、二詩の意、相類せず。恐らく、追和せし者は、是の一篇とは別つべ
きたらん。

確かに、兩篇の詩意は同じくない。けれども、だから、長吉の追和したものは、この江南曲ではないだ
ろう」といふ王琦の推測は、残念ながら當らない。王琦は注家として実に勤勉を、やうしてまた、すぐれ
たノートの數々を書いた人である。王琦のノートがなければ、恐らく私などは長吉の門をうかがい得なかつ
たであらう。だが、一たび李賀集中にふみ入つて、數年ないし十數年、迷路のごとき拘束中をさまよつ
た後、ふとふりかえつてみると、おのれの眼中にのみ、こんな景観と、王琦のさし示したそれとの間に、か
なり異つたもののあることに氣付くのである。こゝうした思ひは、わたくしのみにあることなのであらうか。
さて、王琦のこの注は「追和」なることばが含む詩法上の概念を傳統的に捉えてゐる點では、恐らく正
しいであらう。そつて、「追和」とは、古人の詩意を取り來つて、これにいさざかの己の意を雜え、異つ
た表現を興えることを指すのであらう。さすれば、吳正子のかつた柳惺の「江南曲」と、長吉の「追和柳

憚とは「追和」なる語によつては結びつきがたいこと、王琦の指摘する通りである。
だが長吉が、ことさらに「追和柳憚」と措いたこの題は、果して王琦の考えたように素直に傳統に従つたものであろうか

3

わたくしは、長吉がつねに傳統を無視し、或いは、傳統に抗つていたというものではない。そういうことは、いかなる多々者といえども能う、ヘキことではない。現に長吉には「追和何謝銅雀枝」(四附)なる作がある。

佳人一壺酒

たおやめどひとフきのさけ

秋空滿千里

地はなべて秋のけわいぞ

石馬臥新煙

新煙たちて石の馬臥し

夏家何所似

このうれい何にかも似る

歌聲且潛弄

うたごえはくもりながれ

陵樹風自起

陵の樹に原はおこりぬ

長裾履高臺

裾ながくうてるにひきて

淚眼看花机

涙ぐみ花机をぞみつゝる

詩題に見ても何は何題、謝は謝朓で、いずれも六朝の詩人、それぞれに銅雀妓をうたった作品がある。

何の詩は「秋風木葉落、蕭瑟苦絲清、望陵故對酒、向帳舞空城、寂寂暮宇曠、飄飄帷幔輕、曲終相顧起、

日暮松栢聲、謝の詩は「綈帷飄井幹、樽酒若平生、鬱鬱西陵樹、詎聞歌吹聲、芳襟染泫迹、媼媼空傷情、

玉座猶寂寞、沉了妾身輕。」

この二つの詩のめでたさに感じて、長吉はこれに和したのであった。ここにいう「追和」は明らかに傳統的な使用法に従ったものである。

4

「追和柳惲」においては事情はことなる。長吉はここでは「追和」の概念を變形して、斬新な詩法を導き出したのである。

長吉のこの詩における追和法を味得するには、柳惲の江南曲をクォーテーション・マークでくくると、そのあとに「追和柳惲を續けてみる」といふ。

ひつじぐさ、みぎやにとろに

江南の春を、くるる日

洞庭よかえる、たびんと

瀟湘に、あが夫にあうと

あが夫はや なにぞかえらぬ

はるのはな はたたけな人を

みぞのづま えしとほいわね

なげこうやのみちのとみきを

そう歌われたあのみづぐきは

歌ったひと抑憚は馬に乗って

江のほとりには 榎樹が 香りをはなつて

岸の上には 蝴蝶が ひらひらと 舞いもつれて

わたしはひとり さかすきをとって 若葉露の澄んだ

目の前の 玉の小琴も ひくいとなく

私のいるこの糸の標は たがひに

そのあたり 沙は日に照らされて

まのあたりに見る白鬚から 抑憚の

江頭の榎樹の香り 岸上の蝴蝶の

いがたいうれは はてどうしたと

は一つがいの魚を見出たとき

この詩などにも、長吉の生涯にまつわりついた悲しみの、諸事件とは別なる根拠を、想像することでも
きよだが、こゝではそれにはかゝるまい。

それより「柳輝の『江南曲』から、おのれの田に水をひきこむ長吉の手ぎわの、何というあまやかなさで
あろう。わざわざ『江南曲』の作者を登場させ、しかもさうと退場させて、そのあとを道ひかけるよう
に舞台を一替す。この詩の中での柳輝は、まるであの、シニエツラトの原作を映画化した「輪舞」の
中の舞台まわりのように機智に富み、しかもどことなく飄々としてゐるではないか。
更に心にくいのには『江南曲』が、夫を遠くにやつた女の悲しみをうたつたに對し、こゝでは妻（あるい
は恋人）を失つた、もしくは離ればなれに住んでゐる男のうれいを、違つたオクターブで歌つてみせて、
これでも『追和詩』とはいへませんかと澄してゐることである。

5

「還自會稽歌」と「追和柳輝」とは、全く違つた感情を、全く違つたトーンで歌つてゐる。別個の作品だ
が、「終つたところが始まる」点においては、同一手法になるものといつてもよいであらう。

とこゝで「追和」とは、過去に一つの典型を見出して、これに追いつせまうとする古典主義的手法であ
る。「補正」もまた、過去の一典型に當然具備すべくして今に存せぬ要素を再現しようとする試みで、詩
經に序のみ存して亡びた六篇を補う東哲の補亡詩の流れを汲む古典主義的手法ととつてよいであらう。

東哲の補亡詩の流

ただ長吉においては、こうした古典主義的手法も、古典なるものもつ規範性に合致してゆくこととするためにとりあけられるのではなく、古典なるものをそこにおいて、そこからそれだけ遠ざかりうるか、あるいは、どれだけのりこころか、を測定するために用いているように見える。

歴史は、中夏の人にあつては單に過去の社會を客観的にうつすだけでなく、というよりも、客観的にうつすことによつて、社會生活における規範を示さうとする意志が働いているといつてよいであらう。長吉の詩は、そのような規範性から溢れこぼれたところに、具體的な個々の人間のかをくみと凝視しようとする。

中夏の人々にとつての規範の根源は天にある。その根源の天を否定して、個々の人間のカを認めようとするのが、長吉藝術のメタフィジクであることは、さきに指摘したところである。今わたたくしがのべてきた「補註」や「追記」にみられる「終つたところが始まる」特異な手法は、彼の天のメタフィジクとか、わりをもたないであらうか。

三、君魂夜寂寂

御服沾霜露

つゆでもに おんぎぬれ

天衢長綵

てんじょうはく あうくさきたけぬ

金隠秋塵姿

無人為帶飾

玉堂歌聲寂

芳林煙樹隔

雲陽臺上歌

鬼哭復何益

鐵劍常光

光威塵骨通

強最嗟母心

齒厲索人魄

相看兩相泣

淚下如波激

寧用清酒為

欲作黃泉客

不說玉山頹

且無飲中色

ちりひじに くがねもかくれ

みにつけて かざるひとなし

たかどのに うたごえやみ

はなぞのま きりへだてたり

雲陽の ひとやのうた

なにもせん むせひなくとも

まがつみの まがねのつるぎ

しはしばし あたせまのり

しこどり ははのむねはみ

もののけ いのちまじとむ

あひみまは ふたりあひなき

なみだはも たぎつせなしめ

いらすめる このみきもちて

まかりじに われはたゆかん

やまのごと きみくずれんは

いわねども さぶしつたげや

勉從天帝詔

よしをやし うつたえのらせ

天上慕沈厄

あまつえは まがはなしとも

無虞飛總惟

たままつる とぱりもなきに

如何望松柏

おくつきの こはたあらんや

妾身畫團圓

たえたえに わがみ ひわもす

君魂夜寂寂

しくしくに きみや よすがら

蛾眉自覺長

まよひきル おのずとたゆく

頭粉誰憐白

しろきうなし たれかあわれむ

矜持昭陽意

さあわれわれ 昭陽のみやぞ

不肯看南陌

やちまたの ひとにむかわし

この詩は「漢の唐姬、酒を飲む歌」と題し、外集（ニニニ）に收め、やはり補悲的性格をもつ作品である。

御服 霜露に濡れ、

天衢に慕棘長けたり。

金は墜る 秋塵の姿、

人として 襟飾となすしの無し。

御服すなわち天子の御衣は、つねに九重の深きによって、野におく霜露に濡るべきものではないし

かも、これが治れるのは、天衢すなわち天子のいますあたりに慕棘おとろがおいしげるかためである。天

衢に生ずる慕棘とは何が、

衢に生ずる慕棘とは何が、

後漢の中平六年（一八九）四月、靈帝が崩殂し、その子の辯が即位した。少帝である。少帝は何皇后の腹であった。いまひとり、靈帝が殊に愛した王美人にも子があつて名を協と云つた。王美人の早逝は、靈帝の協に對する憐憫を世のつねならぬものとした。さきに羣臣が太子を立てんことを請うたとき、靈帝は辯が輕佻で威儀がないとの理由で、協を立てようと思つたが、さすがにためらわれた。崩殂はこのことゝ決する前であつた。少帝は即位したが、年いまだ十七、母の何太后が朝に臨み、國事はすべて太后の意見で決せられた。太后の兄の何進は、この勢に乗じて、宦官の勢力を削ろうとしたが、かえつて害された。并州の牧である董卓が徴され、將兵をひきいて洛陽に入った。この徵召は、餓虎に羊を與ふるにひとしかった。董卓は、朝廷を凌虐し、遂に少帝を廢して私胤王とし、協を立てた。これが獻帝である。詩にうたう御服は少帝、天衢はその朝廷を、霜露、藜棘は董卓を指すのである。

玉堂に歌聲寤み、
夢林 煙樹 高たる。

五をちりはめた堂、
それは王音が坐し、つねに王道をたゞえら歌かわき起るところである。しうもいまその教諭は全くやんだ。四時 花のたえたこともない御苑、そこは王音が政のいとまに心を休らうべきところである。いまそこには霧が流れて、花々はそのあなただへたてられ、王者は王者ならざるものとして寂寞のうちにあかれてゐる。

雲陽臺に歌おこし
鬼哭すとも 復た何の益あらん

雲陽は秦の始皇帝が獄を聞いた地、そこにはけささまのすぐれた人かへらえられ、命を奪われた悲劇が

くりかえされた。この臺上におこる歌は悲劇の主人公の悲歎とし、首斬役人の血なまぐさい歌とも聞えろ。少帝が即位した翌初平元年、山東に董卓討伐の義軍が起つた。董卓はこれを知ると、弘農王の策するところと疑つたのであろう。王を閣上に置き、郎中令の李儒に酖を遣めさせた。

「この藥をお召しになりますれば、わづわいをさけることかできる由にございます」と李儒。

「わたしは病氣ではない。そんなことをいって、わたしを殺そうというのだらう。王は飲もうとしない。だが……」

鐵劍は常に光光として、光威は曇々脅かし通り。

強き氣の、その母の心を呑み、奔馬の人の魄を索むるがごとし。

梟は成長すると、ふのれをはくくんだ母を殺して、その心臓をついはんで去る。奔馬は人の魂魄を食う悪鬼であらう。弘農に迫る董卓らはまさに梟や奔馬の如き輩、王にむかつて、強いて酖を飲みと請う。王はやむなく、妻の唐姫や宮人たちと、最後の酒宴を行った。

相看て雨なかり、相泣き、涙下ること、波激の如し。

宴を清酒を用うることを為して、黄泉の客と作ることを欲せんや。

王と唐姫と、眼おえは、悲しむせまって、たきつせの如く決まふれる。李儒が藥酒と稱して遣めるものは、毒であらう。毒を敢て「清酒」というはけしい諷意をみるがいい。この色澄んで、はげしい毒をよくむ酒を、なせのまねばならないか、そうして、ようやく人生の初途についたばかりの身が、なにゆえに黄泉

の文となくねばならぬ。

玉山の顔ろるは説かされどし

且た、飲の中なる色なし。

やがて、玉の身は、玉山の顔ろるごとく倒れるであらう。だが、今、この壺にあつては、口にいたして、いふべきことではない。口にいたさずとも、すべてひとに知られてゐる。そのよふな人々の宴に、どうして世のつねのうたげの陽氣の、わくことかあらう。酒がひとわたりめぐると、王は悲歌していう。

天道易令我何嫌

天の道は易きに、我のみ何とて嫌めら

驚馬乘令還守藩

驚の乘を乘て、退きて藩を守らに

逆臣見迫令命不延

逆臣に迫られ、命延びず

逆將去汝令適幽玄

逆いて將に汝を去り、幽玄に適かん

王は、唐姫にも、起つて舞うようにうながした。姫は袖をあげ、歌つていう。

望天崩令后土棟

望天、崩れ、后土棟る。

身為帝令命天摧

身は帝と為りしに、命天くして摧かる。

死生路異令從此乖

死と生と、路異なれり、此れよりして乖りなん。

奈我梵獨令心中哀

我が梵獨なるを、奈にせん、心中、哀し。

歌いつつ涙流れ、嗚咽し、聲たえた。壺中の者も又々、すすりなした。王は姫にいう。唐姫の身下も、そなたは、王者の妃、執えられても、また、下さまの者の妻となるな。くれぐれも身をいたわらばよ。

い。これで、もう、おわかれじゃ。

さうして、王は、遂に醜をあふつて、死んだ。時に年十八。

忽ち天帝に従きて、訴えたまへ。天上には、沈厄の寡なからんも。

夫の王にとつては、決して安らかに樂しいものではなかつたこの世、毒を飲んで命を絶つ方が、なやみは少のうごいさしより、まして、天上には、わざわいや苦しみはないと聞いています。けれども、なぜはこの世はなやみみちなものてなければなりませんか。天はおのれが地上に生み出した愛子たるべき人を、なぜに、その生において、樂しませようとはせることができないのですか。何のともなかるべきわたくしたちが、相愛して、たからに夫とよひ妻とよひあい、いまだその愛の、青い木の實のように熟さぬうちに、早くもその一つをむぎとつて、何となさいます。いかにわざわいがなからうとし、わたくしのいない天上に、夫は心安らかに住めようはずがございませぬ。いかに苦しみに満ちたこの世であらうとし、なせに二人を共に地上にお留まになりませぬか。天帝よ、なぜにあなたは、わたくしたちに、このように苛酷な運命をお與えになつたのですか。

夫よ、あなたは天に上つてはな、たら、せひとし、天帝について訴えなさいませ。天上が、いかにたのしかろうとし、地にあつてうけたこの物やわいのむごたらしさを、ひとりのこされたわたくしのこのかなしみを、

處として醜帷を張るべきなし、如何にもつかぬ松栢を望む人や。

王者の王者としての壽を終えることのできぬこの地上には、その靈を祭るべき處のあらうはずはない。總帷、祭壇にあぐらす暮を、どこに張ることかてきよう。まして、陵をさすき、松柏を植えることが、どうしてできようか。たとえ、形ばかりのおくつき、かきすかれようと、わたしは、それをぞん見るべしは、堪えぬ。

妻の身は、晝、團圓。君が魂は、夜、寂寂。

この世にのこされたわたくしの身は、草上におかれた霜露のように團々としてはなくなり、君の魂はうらみをとんで、なおこの世を去りかてに寂々として夜をさまよう。

蛾眉自ら、長きを覺ゆ。頸粉、誰か、白きを憐れまん。

愁いに洗んでうなれた婦人の細い眉は、面を上げたときよりも、なお長く覺えるものであり、その眉の長さか、さながら起いのたけを語るように悲しい。うなれたときに見せる襟すいのかげを帯ひた白さは、更にあわれをそよるものである。だが、そのようなあわれむを、まことと知るものは、姫自らのほかにはない。

鈴りに持つ、昭陽の意、南陌を見るを、肯なわし。

唐姫は潁川の人で、會稽の太守唐瑁の女である。弘農正の裴俊、家に歸つた唐姫を、父の増は、再婚させようとしたけれど、姫はどうしてしきかなかった。のち兵亂によつて李儼なるものにとらえられ、その妻となることを迫られたか固くゆるさず、またその少帝の姫たることを言わなかった。尙書の賈誼がこれ

を知つて、その状を獻帝に奏した。帝はこれを知りて感徳し、詔を下して姫を迎え、園中に住ませ、弘農王の妃として待遇した。(『後漢書』卷十 下 何皇后紀)

詩にいう「矜持昭陽意」はこのことを指すのである。

この詩は、『李賀教詩編』の外集に收められる。外集は、さきにも述べたように、李賀の作品として疑點の存するものが多いのである。この作品は、テキストとして、不安定な部分を含む。例えば、わたくしが引いたもので、「鐵劍常光者 兎威靈霄通」とする部分を、北宋本(四部叢刊本 外集)は「鐵劍常光者 至兎威靈通」とし、元刊本(梅花草堂影印本)は「伏劍明秋水 兎威靈霄通」とするが如き。それである。たか、それにもかゝらわず、この詩は長吉の手になるものに違いないと、わたくしは信ずる。唐姫をめぐるアネクドオトのとり上げ方に、明らかに長吉のメタフィジックと信すべきものが見出され、また「妾身畫圖圖 吾魂夜寂寂」の聲語の使用法に長吉の言語選擇の傾向があらわであるからである。

それでは、この詩は、何を詩えようとするのか。

人間は天の生み出したものである、しかしながら、天もまた、おのれが生み出した人間が地上に構える悪を、如何ともしかたいたこと。人間の悪の前には、天の道もほろびるであろうこと。天上は、さすがに人間の悪が到達しがたいところであり、人間の悪からの避難所たりうるであろうが、同じく天の生み出した人間が地上において出会う人間の悪に對して天が手をつかねざるをえないこと。これらさまざまの不合理に對する抗議を、この詩は、憂むものではないであろうか。そうして、そのように無力な天の力の及ばぬ

惡に對して、かよわい婦人が、けなげにも抵抗しぬく愛のひとすじな姿を描こうとしたのではないであらうか。

(第10・10・11)

歸

郷

一、 矯士常慍慍

元和六年から足かけ三年の下級官吏の生活は、長吉に焦燥をもたらしたただけであつた。讀書人の仲間に入り、すでにかなりの歳月を閲しながら、職にはついてし、一向に先の開けて來そうもない奉礼郎。その仕事は極めて地味である、虹霓を吐くような前途を望み見た身には、おのれを苦しめるためにあてがわれたものとし、感ぜられない。

元和八年、ハ一三春、長吉はおのれの病にかこつけて、遂に奉礼郎の職を辞して故郷の昌谷に歸るのである。このとき、「春、昌谷に歸る」と題する詩がある。五十二行のこの詩を作るとき、長吉には、あの「歸去來の辭」が意識されていたに違いない。だが出來上つた作品からは、かえつて、長吉と瀧明との違いの方が、著しく感ぜられる。まず時代が違い、算質が違い、年齢が違ふ。が、何より決定的なことは、長吉が瀧明の境涯になかつたということであらう。

束髪方讀書

髪を束ねては 方に書を読むべきに

謀身苦不早

身を謀りて 早かならざるに苦む

終軍未乘傳

終軍のとしすぎて 未お 傳に乘せざるに

顏子鬢先老

顏子のごとく 鬢のみ 先ず老いぬる

漢の時代に、終軍という少年が、十八歳で上書して武帝に認められ、謁者給事中、即ち外務次官となり、

更に諫議大夫、皇帝への御意見役に擢んでられ、南越征討の事に従って、二十歳をこえたばかりで世を去

りなからう、その名は歴史の書にしろされて輝かしい。

長吉にとつても、その人生の門出は極めて光榮に満ちていた。世の人は、彼を早熟の神童としてしては

やし、同族の李益、小説の主人公として描かれるまでに有名だ、た風流の詩人と肩を並べるものと見なし

たではないか。世人のこの賞讃は、文豪韓退之の推薦によって確乎たるものとなった。

このとき、長吉にとつては、終軍は、物語にのみあらわれる英雄ではなく、おのれの同輩のようを近し

せてなめられたであらう。だが、輝く門出についでた運命は、終軍とは似ても似つかぬものであった。

そうして、二十九歳で白髪だ、たと傳える孔子の高弟の顏回の年に、まだ間のある身が、碌々として、鬢

の毛ばかり老い衰えさせている。

天網信崇大 天のはりたもう網は 信に 崇く大いならんに
矯士常怪怪 矯士常怪怪の 常に 怪み怪る

皇帝が天下の後傑を遺すところなく求めようとして、網はりたもう御心の崇く大いなるにかかわらず、剛直の士は、その網のほとりに近づくこともかなわず、つねに、心をいため、身を疲らすばかりである。

逸目騎甘華 目を逸てば 騎られるは 甘しく華やげるいろをれども

驚心如茶琴 驚にあう心には 如うにかき茶からき琴

おのれの不遇にかかわりなく、冬が去り春が到れば、水草は鮮かを緑をつらね、花々は震わしい紅をばなつ。世の人には甘美なるべきこの色彩が、ふるごとをばなれ他人の中に心傷ついて住む身には、かえって、にかなを嗜みたてを嗜めるようにしか感ぜられぬ。

早雲二三月 早の雲は 二月 三月

岑岫相顛倒 やまの岑と 岫あなと 相みに 顛倒える

誰掲頼玉盤 誰か掲げし 頼き玉の盤

東方發紅暎 東の方に 紅の照やきと 發ちそむろは

春のなかばの二月から、早がつゞき、桃も櫻も杏も、あわたたしく開き、あわたたしく散って、三月の
聲をきくと、もう夏の空を思わせる早雲が湧き上り、山のみねと巖穴とをひくくりかえしてさかさまにし
たような怪奇な姿を描いてみせる。誰が、何のために掲げるのか、きらきらと頼り玉盤が、東方の空に紅
に火照り輝く。

象子雲が大空に湧き上り、ぶきみな草形にひろがり、やがてくすれてゆくのを見るような、そくてそく、
に陽の光が銅色に射すような、焦燥と不安にみちた早雲。

春熱張鶴蓋 春なから熱ささけんと 鶴のかたせら蓋を 張り

兔目官槐小 兔の目ほどに 官の槐の実は 小やし

春ながら、むんむんとてりつける熱さに、どの家も、鶴か羽をひろげたような形をした日霧を張り出し、
街路樹の槐が、早や兔の目ほどの丸い葉をつけばはじめている。

思焦面如病 思い焦ちて 面病めろがごとく

嘗臆腸似絞

臆嘗めて 腸絞るにし似る

世を思い捨てた仙骨ならば、むしろさばさばと安んじたであらうが、身辛うじて養うほどの閑職は、おのれより劣ると見下げた青年達が次々にへ上つてつくのを傍看するには、あたかも拷問の場に近かつた。思ひはいろいろ、面青さめて、苦汁をなめながら、はらわた絞る日々であつた。

京國心爛漫

京國みやこにありては、心は爛たれ漫まけ

夜夢歸家少

夜の夢ぬちにも 家に歸ること少まなりき

大都會といふものは、そこに住む人の長態衰樂にはかゝわりなしに、強烈な刺戟を發散させる。外部の騒音と、色彩と、それだけでも人間の中の否應をなしに侵入して、人間をスポイルする。さうでたに感受性の強い長吉にとつては、長安の大都會に住むだけのことか、心を爛らせ、ほゞけさせることであつた。おのれの最も強く思うところのものが、夢に現れないのは、肉体的にも精神的にも、衰弱してゐるためだとする感じ方が、中夏の人の間にある。孔子が「夢に周公を見ず」と歎いたのがそれである。長吉の、最も強く思うもの、それは、ふるまゝの家であつた。

長安に風雨はげしき夜

長安風雨夜

書客は、昌谷を夢に見き

書客夢昌谷

怡怡として 中堂に「どい」笑い

怡怡中堂笑

小ナキ弟は 淵よりとりこし茶を裁えぬ

小弟我淵茶

家門らの 厚く重なる意に

家門厚重意

我が飢えたる腹を飽かしめんと 望いぬ

望我飽飢腹

勞すき勞れし 一寸心

勞勞一寸心

燈花は 魚のごとをみだぐみたる わが目と 照すよ

燈火照魚目

(題歸夢・四・21)

長安に出て来た苗室は毎夜のように夢にみた、そのふるさとの家もおほろとなつて、いまでは油のようになつて、左ねむりがつづけば、もうこれ以上、長安に居ることは、意味がない。歸りなん、いざ。

さて、しかし、思い捨てたつもりで長安にも、いざ去ろうとすると、別れがたい友もいる。その友の、張又新と李漢とが、城外まで送つてくれる。張又新は工部侍郎をもち今の建設省の次官にあたる張薦の子であり、李漢は韓退之のむすめむこで前の年に進士に登第したばかり。贈りかけなど徹座もないようなこの二人が不思議に、私は好意を示したが、今日も、ことに李漢は、しみじみとした別れの詩を贈つてくれた。私は、その詩を読みながら、いつもは随分苦吟する方なのに、このときはすらすらと次のような詩ができた。即興の詩、だから、部分的には氣にいらないと、るもないではないが、書きつけて、李漢に與え

た。... 命を命に...

... 命を命に...

李子 上國を別れんとするに...

南山は煙岫も 春なり...

今夕のとさつぐる鼓 聞かてあらん...

... 趙堂のごと 賦命 博く...

馬卿のごとく 家業 貧しき...

郷よりきたれる書に 報するは 何

紫の嶽の 石めぐる言のへに 生いいてしとよ

長安は 玉と柱と 竹たけき國

城と帯と とき候の門々は ばためきて

惨陰かみ地だに 自ら 光ありて

覆しき馬の 曉となく昏となく 踏ろまゆきぬ

臘春に 草しえいある花に 戯れ

玉の腕の 鞞鞞と鳴かひマ

李子別上國

南山煙岫春

不聞今夕鼓

趙堂賦命博

馬卿家業貧

郷書何所報

紫嶽生石壑

長安玉柱國

城帶板侯門

惨陰地自光

寶馬踏曉昏

臘春戲草花

玉腕鳴鞞鞞

けしのとる緑の細に 金鈴をひきむすひ

霞 巻く 清らなる池の滑

あるはまた せに賣しを聞きて 妖母の血 瀉キ

氷を買いて 夏たけき蟻を防ぎぬ

時めけういとまわくには 大被を裂き

劍客をもてなすに 車盤の齒

小人は ひえ死れし灰のごとく

心切に 秋様 生いゝす

皇圖は 四海に跨こり

百姓は 長き紳つくへきに

みいすの光明 露われて 發くことなく

腹につけたる龜のしろし 後に 銀を雙ぶのみ

吾將に 礼樂と 譯えて

聲の調を 清新にせんと 摩の

十千歳ののちまで

皇の道を 飛する神のごとあらて人と 欲いしに

絲綢金鈴

霞卷清池滑

聞賣妖母

買氷防夏蟻

時宜裂大被

劍客車盤齒

小人如死灰

心切生秋様

皇圖跨四海

百姓施長紳

光明露不發

腹龜徒雙銀

吾將譯礼樂

聲調寧清新

欲使十千歳

帝道如飛神

華実自ら 蒼老

流采 長を乞に 盒を傾く

没没として 暗に 舌を齧み

血を涙して 敢て 論ぜず

今 將に 東道に 下らんとして

くなどのかみに 酒祭り 秦を別るに

六郡に 對兒 をくねは

長刀の塵 たれが 絨わん

地理に 正一さのなけれは

快馬馬して わが乗る車と はしらしめん

二子は 美き年々のいと

たたしき道を 調り 清らなると 渾れるとと としに 識い

譏れ笑いて 冬の夜を 断れ

家庭に 疎き 篠むらに きみらの かよう道 穿きて

語りあかして 曙の風 四方に 起るに おどろき

語りくらしして 秋の月 東のそらに 懸るも 見しか

華実自蒼老

流采長傾盒

没没暗齧舌

洋血不敢論

今將下東道

祭酒而別秦

六郡無對兒

長刀誰拭塵

地理陽氣正

快馬逐服鞍

二子美年少

調道調清渾

譏笑斷冬夜

家庭疎篠穿

曙風起四方

秋月當東懸

詩を賦しゆきて 面投す擲す

賦詩面投擲

悲しきかもしよ 不遇のわれの

悲哉不遇人

此の別れ 定す 臆と泣ぐ人に

此別定沾臆

趣の布 先ず 裁ちて 中とすべし

趣布先裁中

(出城別後又新酬李漢・四・219)

會えば、譏笑——こきおろしあう——そんな親しい間柄だけに、趣布先裁中——まずはハンケチをつくつてかう、などと、冗談めかしはしたものの、本当のところ、この別れは、私には、決の溢れそつを思ひだつた。いっそのこと、思いかえして、もうしばらく長安の生活を続けてみようか、そんな氣さえ、ふとおこる位たつたが……

發轍東門外 車を東門の外に發せば

發轍東門外

天地皆浩浩 天も地も皆浩浩し

天地皆浩浩

長安の東門から、馬にひかせた車を出發する。郊外を出はされると、さきほどの別れのかきすか、うそだつたかと思つた位、天も地も、何とひろびろと、自由に、すがすがしいことだろう。

東へすこしゆくと、沙苑である。

野の水は 長瀬を 泛わぜ

野水泛長瀬

宮牙は 小き雀の 花をひらく

宮牙開小雀

人かげ無きに 柳は自から 春めき

無人柳自春

草しげる渚に 鴛鴦 暖かし

草渚鴛鴦暖

晴れわかき 嘶く 沙に臥す馬のむねに

晴嘶臥沙馬

老いたるが ありて 悲く啼く鶯 展し

老去悲啼展

今春 還た 歸らす

今春還不歸

鶯のほとりに 嚶くは 翅折めし雁

鶯嚶折翅雁

(理沙苑)

沙苑は代々政府の直轄牧場のあつたところである。安史の亂で荒れたまゝ、元和の中ごろにも、さまたで
恢復していつかつたのであろう。自然は、春に在ればせい一杯に、生命の開花を見せるが、人間のいとな
みには、とことなく荒敗のいろか見える。

道はやかて、驪山にかかる。玄宗皇帝が、楊貴妃と共に、暑や寒さを避けた温泉宮のある山である。

青樹驪山頭 青き樹々しげる 驪山の頭

花風漸秦道 花ゆする風 秦道に満てり

宮臺光錯落 宮と臺と 光り 錯落めき

装臺掃峰嶠 装臺ながら 峰嶠に徧わ

細緑及團紅 か細き緑と 團がれる紅と

當路輕啼笑 路のべに 雜るるに 啼き笑う

皇帝や眞妃はなくとも、樹々は青々と茂り、長安に通ずる道々には、花をゆすつて吹きまぎる風が満ち、
華清宮・集靈臺など、山上・山下の宮殿・臺榭は、日の光をうけ、木々の緑に映えて、あちらの峯、こちら
らの屋根に、さうきらとかがやき、さながら一幅の繪巻をひろげたようである。わが歩みゆく道には、織
細な草々の緑が露を帯びて啼き、化粧の紅は笑みかたまける。ここに紫えた人をたたえ、ここに滅んだ人
を泣くのか、あるいは、私の不運に同情し、私を慰めようとて、悲喜するのか。

香氣下高齋 香氣之なるめ香氣 高齋より 下より來たる
鞍馬正華耀 鞍馬に裝せしひとひとの 正に 華やぎ 耀らえるなり

獨乘雜犍車 獨り 雜の犍のごとき車に 乗りて
自覺少風調 自分から 風調少き うしろめたさや

ふと、文をうめ香鼠の山上よりたゞよ、てくるよと見れば、金鞍白馬、装束きらびかに、胸うちせらせて来る公達。何の俗物めかと行き過ぎさせはしたもの、その供の昔の中にし、乗り手のない、籠の巢のいたおのれの車

むかし、杜甫先生が、やはり長安から、こゝを通つて、蘇先縣に行くとき、やはり今の私と同じように、金銀の化物のようなよ、いう連中が、あたりに人をげな態度でゆくのを、齒がみながら見たのであろう。

浴を賜うは、みな、長観、宴に與るは、短褐に非ず、とうたひ、

中堂に、神仙のごときひとあり、炬燵のごときかろききぬ、玉の簪に夢いぬ、

暖めくとせる客ら、貂鼠の裘つけ、悲しげの管のね、清らなる麝の匂を逐う、

客に勤むるは、駝の跡のにくもてつくれる夢、霜をへし燈の、香はしき糖を盛するまでにつまわれたる

朱の門のうちには、酒肉あまりて奥き、路には、うえ寒えて死せる骨あり

祭ゆると 枯えたるも 原へたたるのみは かく裏えり

惆悵いて、再び述べんこと 難し

そう、いきとみとありをこめて、吟んだではないか。今日大郎代は、あの時代より、よくなつてまいはす、いや、よくなつていなければならぬはずだが……

夢のいい公憤は公憤としてあいて、さて若い長吉の心にうき寒くかすめるものは、金鞍白馬の豊かさに對する豈徒車の貧しきである。冷えて結れたワビ、サビ、などというしろものは、島國日本の末世、ケチな俳諧師のやむをえずひねり出した毒で、ねつとりと脂っこい濃厚華麗を好んだ大唐の詩人には、やせ我憤にも、ホ口車にうち架る青さめ衰えたおのれの姿と、風潮多しとは、かえりみ難かつた。

心曲語形影 心の曲を 形と影とに 語らん

祇身馬足寮 松の身 馬んぞ 樂しびに足らわん

豈能脱負擔 豈によく 負擔を 脱かれんや

刻鶴曾無兆 鶴を刻まんとはせんかども 曾て よき兆 無かりき

心のうちを、身体と影とに、語りかける……陶淵明の詩に、心と、からだと、影とが、互に自今の立

場から、意見とのへあう、と、趣向のものがあつた。なぞうえて、あのれの心に語らせるなら、さしす

め次のようなことになるだろう。

この身体、享樂家のこの身体は、あくことなど知らぬ。どうして、樂しみにあき足りた。などということがある。ところで、世の中はまななるぬ。そこに生き、そこで名を上げようなどと考えると、むやみやたらに仕事がかたなり、義理や人情ともあつき合ひせねばならぬ。本意をらすも、世間様の氣に入らうせめても、漢の高擧將軍が兄の子をいましめたる寺娘の時の文句のようには、アセル位にはなれるまいと、一所懸命、鶴のまねをしてみたが、敦厚謙約の龍伯厚とのほとりものこと、いまだかつて、よいこと、兆ほどのこともしあ、たためしがないではないか。

幽幽太華側

幽幽たる太華のやまの側には

老柏如建轟

老りたる柏 建てなめし轟のごと

龍皮相排豪

龍のせににたる木皮は相に排ち豪きて

翠羽更揚掉

翠羽の羽をす葉むら 更に 揚掉う

驅趨委憔悴

うま驅趨せて委く身の憔悴るれど

眺騎發笑貌

眺騎ゆくま、強に 笑貌せうらうら

花菱関行輯

花つけく曇くこの 行輯に関み

穀烟暖深穠

穀のことき烟 深き穠を 暖くしゆくに

ふかふかとして晝なお暗い太華山には、軍旗をうちたてたように、老いた柏樹がつらなり、諸の背に似て解つた木立がおしひしめき、鳥のつばさのような翠の葉むらはゆさゆさどゆらめく。日光參道の杉木立を更に雄大にして、野趣を加えたこの道々、やせ馬にひかせてホロ車かける心はつかれおとろえながら、目に入るさまさまの自然の景致は、いつの間にか開いた思ひをひらけ、長い間笑うこともなかったおのれの頼り、われにしなくほくろはせる。

「ぼ」と、明るいものが眼光におどつたかと思うと、花をつけた蔓くさが「行っちゃあ、嫌」と嬉ひるよ
うに、車のながえにまといつき、ふと、暗くなったと見ると、うすぢめのような霧が、ぞんなに覓をいで
とはじらうように、深い山道をたちこめまく。

動きやまぬかに見える人間の世衆が、まことば、不合理な因襲の夜に停滞し、不動とみえる自然の世衆
が、それを凝視する者には、時の間も静止せず、夢幻さあまりないすかたをくりひろげてみせるのが、お
れしろい。

少健無所託、少く健やけきに、誠る所なく、
入門愧家老、入門に入りては、家をうろたひびとに愧す。

飛誅依大樹、請を聴く下は、大樹に依りて、
二 観書屈曲沼、書を繞るには、曲沼に臨む。

二十三、あるいは四歳の青年が、世を思ひすて帰るといふことは、当人にとつてはやむをえないことではあつても、人の目には奇異にうつらう。その人の目をはばかりながら、疲れて歸つた息子を迎えよつと、いそいそ出てくる母親の姿を見ると、さすがに、愧かしかつた。

しかし、家に歸れば、そゝには、おのちからおのれの座があつて、まず静安の境におちつくことができ、久しぶりに、むかし讀み書きを教つた老先生をたずねてみる。先生は、孔子が魯を去つて宋にゆき、弟子とともに大樹の下で礼を習つた故事に因んで、雨雪の日のそいてはつねに塾の前の老樹の下で講義をなされたが、いまもやつぱり、やうだつた。あまりのなつかしさで、小さな生徒といつたことに、そのお話を伺つたことだ。それからまた、後漢の張芝がやつたように、池のほとりに凡をすえて、書きものをしたり本を讀んだりする。ここにこそ本當の人生がある。私は、そう信じた。

知非出柙虎 柙を出する虎にあらざるを知り
 甘作藏露豹 露に藏るる豹とくらんことに甘んず
 韃靼處縉緣 韃の鳥は 縉緣に處ち
 湘條在籠翠 湘の條は 籠翠に在れり
 狹行無窮落 狹行するひとの前には 窮落すもくなくけん
 壯士徒輕躁 壯士は 徒らに 輕躁しきや

私は、おのれが、檻を破って出る虎のように豪勇の人でないことは、よく自覚している。けれど、こ
うして、世を捨てたかに見えよう行動も、必ずしも敗殘者のそれとは同じくないことを、人は果して誇み
とるであらうか。南山に住むという黒豹は、雷雨が七日も続いて餌物をえられなくとも、人里に下りてゆ
かないのはなぜか。そのような雷雨の中でこそ、その毛に光澤と美しい紋が、完成するのみであり、人里に
近付かないことによつて、危害を避けられることができるから、たといわれる。私は、その豹の道とこそ、よ
とりたいのだ。

霧の鳥はその軽やかな姿と美しい聲を人に示して、いくるみのうちにとらえられ、湘水のはえは、その
すばしこさと、匂やかさを、水面にあらわすゆえに、びくの中に住まねばならぬ。近道に大道はない。昔
の人にも君子は小道せず、といっているではないか。およそ心たけき男子たるものが、何ゆえに、そうか
るがらしく、あわたたしく、世路に右往左往することがあろうか。

長吉のこの詩は、はじめにいつたように、後にのべようとする「昌谷の詩」と共に、陶淵明の「歸去來の
辭」を念頭にあきつゝ作つたものであろう。最後の一段の如きは、ことに「歸去來の辭」の

已んぬるかな、形を宇内に寓するくと復た、な鳥んぞ心を委ねて玄留に任せざる、な胡蝶れを
追として何に之か人と欲するや

と、その意向において酷似するかに見える。けれども二詩の韻律がわれわれに傳えるものは、ほとんど別個の両在であるように思われる。朱子のことばを借りていうなら、陶辭は夷曠蕭散であるに對して、李詩は尤怨切蹙である。淵明が「夫の天命を樂んで、復た憂をか疑わん」と結ぶとき、われわれは、その天命を奪ふ意志を疑ふうとはしないが、長吉が「壯士徒輕騷」と結ぶとき、われわれは、かえつて、彼の心かをふ、徒らに輕躁なるかを疑わざるを得ない。その信疑をわかつものは、われわれのうちにあるのはなく、兩詩の韻律のうちにあるのである。そうして、兩韻律の相違は、また淵明と長吉との境涯の相違に因るのであろう。淵明が自ら棄てた道を、長吉も亦、おのれの意志をもって捨てたかに見える。かまるとは、そうではない。これが兩者の境涯の相違の最も著しいものである。淵明の退隱は、それを實行したのちに、必しも要如たるのみでなかつたことは、吉川幸次郎博士が指摘せられる如くである。淵明の詩が一見單純澄明に似て、しかも極めて複雜幽微な諸調を持つのは、彼が、孔子を嗤笑した隱者たちのようにモノトナスな心情の持主でなかつたことを證するものであろう。けれども、というより、それゆゑに、彼の世路の味い方も極めて能く、歸去來吟と歌つた後は、外的生活を單純化して、政治的を場面にしようとはしなかつたのである。

長吉の境涯は、雖棲車を風調にせんとつたところ、端的に暴露している。政治の場面が彼を捨てたのであつて、彼がそれを捨てたというのは、負けおしみにすぎないのである。もし政治の場面が、彼を拒まなかつたならば、彼は彼々としてそこに赴いたであらう。彼の困窮が、やがてはそれといひ、それに

堪えぬと自覺するにしてし。

長吉が、奉礼部の職を捨てたのは、勿論、病弱であつたことにしろあうが、恐らく、その最も大きな原因は、奉礼部を職が、雜糅事であつた、といふところにあるのであろう。彼の桑門の音楽家の類する人に與へた詩中の

歌を請わんとならば 直ちに卿相の歌を請え

奉礼の官は 卑し。復た何の益かある

の句は、出家の人でありながら伎人の道に沉湎し、かつ名流の序を請うてまわる。その俗物性に対する皮肉ではあるが、そこにも彼のインフエリオリテイ・コムプレックスを見とることが出来るであらう。

彼は、常に憤懣たる矯士であつて、ついに洞明の如き靖節の人ではなかつたのである。さればこそ、その「歸去來の辭」たる「春歸昌谷」をうたつた後に、再び職を求めて放浪するのである。

たゞしかし、彼の「偽畫」は、世の役人か人民をしほつてしたま斯えた後、圍筵を築いて菊を植へ、南山を看るとうそよく空の「偽畫」とはほろかに様を異にする。そういふいやらしさを持ちえなるところに長吉の藝術が成立しうるのである。そういふいやらしさをきびしく拒否するところに、彼の「歸郷」が生れるのである。

二、好學鴟表子

1

「春歸昌谷」について、前節でいささか述べたことは、実は、最も表面的なテーマについての解説にすぎない。このような表面的なテーマならば中葉の最も凡庸な詩人の作品集の中にも、これを見出すことは、さほど困難としないであろう。

「春歸昌谷」が「歸去來辭」の「偽畫」でありながら、ついに偽畫ではなく、長吉の詩才たる創作たりえているものは、彼が淵明のテーマを襲用しながら、その上に更に多数のテーマを展開しているからに他ならない。つまり、何を描くかについては淵明によりながら、如何に描くかについては、長吉は自らのテーマを提出し、それを解いているのである。その点では、次にのへようとする「昌谷の詩」もまた、同じであらう。たゞし、「昌谷の詩」にあつては、方法的には「春歸昌谷」よりも一層複雑である。ここでは、何を描くかという点においてたけてはなく、如何に描くか、にフツても、ある特定の詩を原型として述べている。

その原型は、韓愈と孟郊との聯句である。更に限定を加えらるならば「城南聯句」である。

わたくしは夙に兩者の間に著しい類似に氣つき、多くの注家、評家が、この點に筆を觸れようとせぬことをいぶかり、或いは創見とすべきかと、ひそかに楽しんで来たが、近ごろ清の陳本礼の「協律鈞元」を目睹し得て、そこに引かれた方扶南の次の一條を知り、管見の陋を羞じた。

此の篇（昌谷詩）と、續・孟が「城南聯句」と、孰れが後先たるかを知らざれども、何ぞ造車の轍を合するや。

扶南は清の桐城の人、誼を世譽といふ、一字を息翁といった、乾隆の朝に鴻博科に擧げられて諸かす、力を學に辭にし、書において窺わざるところがなかつたといふ。

ついでなかう、陳本礼の「協律鉤元」は、諸家の注をひきつつ、おのれの李賀詩に對する見解とのべたのみだが、その列言中に

拙註は、意義理を發明するにあつて、訓詁、考據を作るを欲せず。若し、必ず徴引繁多なうんことを欲せば、連篇に贅累いとたからん。これを察するに、詩において毫も干渉なし。

というように、極めて創見に富み、援引するところの諸家の注も、精核なものが注意ぶかく且簡潔に送はれて、李賀詩注の中でも群をめぐを覺える。

2

この章を進めるにあつて、わたくしはまず一つの假定を提出しておこう。

昌谷詩は李吉の「城南聯句」である、と。

それでは「城南聯句」は、韓・孟の昌谷詩ではないか、との疑問が、早速、方扶南の一條から導き出されるであろう。この疑問は、しかし、兩詩の製作の前後を検することによつて直ちに解決する。

昌谷詩が元和八年五月二十七日の作たることは、朱自清の『李賀年譜』等に考證するところであらうから改めて説くことをしない。この年は西暦八一三年で、長言は、二十四または五歳であった。

城南聯句は、その題に明らかを通り、退之と東野が長安城南に會しての作である。

退之は元和元年六月、江陵法曹參軍から權知國子博士に轉じて長安に歸つて來た。東野もこの前後に常州から長安に上つて來ていて、退之と舊交を温め、張籍、張徹などの退之の弟子たちを交えた會合にも出ている。兩詩人の間でかわされたたのしみは詩句を問ひせらるゝことで、この後から數年の間に「城南聯句」「會合聯句」「題籍聯句」「納涼聯句」「秋雨聯句」「征蜀聯句」「同宿聯句」「莎柵聯句」「兩十寄荆郭裴道聯句」「遊遊聯句」「有所思聯句」「遠興聯句」「贈劍客李園聯句」など、長短さまざまの聯句を生んでいる。

元和元年、退之は三十九歳、孟郊は五十六歳であつた。

翌二年夏の末、退之が分司東都として洛陽に赴くと、東野も亦洛陽に住み、三年東野が深陽の尉として江南に赴くまで二人の互いに訪れることは梭の如きものがあつたであらう。

ところで前にかゝげた諸聯句中「莎柵」が昌谷の上流の洛陽の一巖谷をうたつたものであり、「遠遊」が孟郊の江南に赴くを前にしての作であるのは、いずれも長安での作と推測される。「城南聯句」もまた、いふまでもなく元和元年または二年の作品であることは疑いを入れない。すなわち「城南聯句」のみならず、韓孟の聯句はすべて「昌谷詩」に先立つのである。

長吉が始めて退之にまみえたのは拙稿「筆補造化天無功」(オオモト)にのべたように、元和四年(八一九)

くは五年)で、十九歳か二十歳だったとするのが恐らく動かめどころであろう。そのころには東野は、瀧陽の令に愛憎をつかされ、東野の方でも杓子定規なこの上役に愛憎をつかして浴場に歸つて來ていた。(拙稿「福公」不詳卷号を見よ)

長吉は辭の退之に陸して東野に關していたであろうか。惜むらくは、退之・東野・長吉はもとより、退之のサロンにつどつた人々の文集にその間の消息を傳えるものが見えない。

以下はわたくしの想像にすぎないが、恐らく長吉は奉礼郎となる以前に東野に相見することはなかったろう。たとえ席を同じくすることがあつたとしても、おのれの才に傲り、世の賞讃に酔つていた長吉は、すでに老練してしかもなお寒酸なこの文人の悲痛な心事を凝視するに至らなかつたであろうし、東野もまたギラギラと傍若無人なこの少年に好意のまなすしを投げかけることはなかつたであろう。

長吉が師の退之の作品に誘われて、韓・孟の聯句に到達し、その奇古幽深なるに驚愕し魅了せられ、やがて東野を凝視するに至るのは、長安三年の無聊と自卑とを俵たねはならぬ。

わたくしは、長吉の本質は短篇作家であらうと思ふ。しかも「福公」の五十韻、「昌谷詩」の四十九韻の如き長篇のあるのは、韓・孟の聯句に觸發されたためだと考へるのである。この二詩の如きは、その手法において全く聯句的、いな、むしろこれに長吉の獨逸聯句と見ることができるとはなからぬ。「福公」は長安滞留の初期、大部の筆震致を、おのれの無聊の長さに充たせて成つたものであろうが、こゝでは、思ひ切つて長吉的に語法を變形させてあるために、韓孟聯句の影はさぐりにくいかもしれぬ、これに及して

「昌谷詩」が後に備前に説くように、その用語まで踏襲聯句に得ているのは、元和八年春、心傷ついで歸つた長吉が、はじめて東野に相見の礼をとり、その人への共感からその作への尊敬となり、「城南」を中心とする再検討評價が燃焼しやかつて「昌谷詩」に結局したのだ、と、わたくしは想像するのだが、如何であるうか。

3

- 7 逢岑出寸碧 K
- 32 玉帶墮階餘 K
- 9 龍綬紛埜地 M
- 51 嶺然萃報響 M 嶺峯
- 22 恨竹淡空幽 K 遠遊
- 12 草球競聯晴 M
- 104 椒苔並暉喧 K

- 1 昌谷五月稻
- 2 細青滿平水
- 3 逢密相懸疊
- 4 顏綠愁鹽地
- 5 光潔無秋思
- 6 涼暖吹浮媚
- 7 竹香滿渾菽
- 8 粉飾塗生翠
- 9 草髮垂根鬢
- 10 光露泣幽淚

昌谷の五月の稻は
 か細く さ青に 平らなる水のしに 満ち
 逢けき密は かたみに 懸し登をわり
 顔き緑の 地に墮ちんかと愁う
 光 潔らにして 秋の思いなく
 涼かぜ 暖らに 吹きゆくに 浮きたち媚し
 竹の香 は 遠き寂けさのうちに 満ち
 粉ふきし節を 生みすし翠に 塗き
 草の髪より 恨たげの鬢のけは垂れ
 光めく露は 幽かなる涙と泣きぬ

- 156 象曲 若櫻 聆 M
- 10 化蟲 枯梅 莖 K
- 40 錦若 指玉 珠 K 錦珠
- 27 蟬 振 轉 鳴 鳴 K 結 冰
- 22 蟬 枝 掃 鳴 嘯 M 秋 雨
- 151 菊 首 發 大 溪 K

42 沙 篆 印 廻 平 K

- 265 雙 環 關 榜 鶴 M
- 266 蛇 垣 亂 蟬 蝦 K

102 滿 瀾 木 腸 聲 M

- 87 白 蟻 飛 無 地 K
- 133 夢 華 露 袖 扣 M

11 昏 圓 欄 洞 曲

12 芳 徑 老 紅 醉

13 檀 蓋 銀 古 柳

14 蟬 子 鳴 高 遠

15 大 帶 垂 黃 葛

16 紫 蒲 交 狹 淡

17 石 鏡 差 復 籍

18 葦 葉 皆 蟠 膩

19 冰 沙 好 乎 白

20 立 馬 印 青 字

21 晚 鷺 自 遠 遊

22 瘦 蟬 腹 單 蹄

23 啞 啞 淫 蛙 聲

24 咽 涼 驚 淚 起

25 紆 緩 玉 眞 路

26 神 娥 蕙 花 裏

昏^か圓^ま欄^{らん}洞^{どう}曲^{きょく} 洞^{ほら}に やまの曲^{まが}に 欄^{らん}ようは

芳^{はな}さく徑^{みち}に 老^{おきな}えし紅^{べに}の醉^{よめ}えろなり

檀^{たん}えろ蓋^{かき}は 古^{ふる}き柳^{やなぎ}を銀^{ぎん}ぢ

蟬^{せみ}子は 高^{たか}き遠^{とほ}みに鳴^なけり

大^{おほ}き帯^{おび}なし 黃^{わう}はめる葛^{くわ}は 交^まれ

紫^{むらさ}の蒲^{わづら}のほは 淡^{たん}も依^よに 交^まういしげろ

石^{いし}のへに鏡^{かがみ}のかたせろこけは 差^さみに 復^{かへ}い籍^{せき}かり

葦^{あし}の葉^は 皆^{みな} 蟠^{ひら}れ膩^ねえぬ

冰^{こおり}がれし沙^{すな}はらは 好^こに 平^へに 白^{しろ}く

立^たためる いし馬^{うま}にこけむして 青^{あお}き字^じ 印^{いん}せしごとし

晚^ふいし鷺^{さぎ}は 糸^{いと}のすから 遠^{とほ}らに遊^{あそ}き

瘦^{うす}せたら蹄^{ひづり}の 眼^{まなこ}を 單^{ひと}のふ 蹄^{ひづり}つ

啞^お啞^おと 淫^{いん}蛙^かの聲^{こゑ}して

咽^{のど}ひなく涼^{すず}に 驚^{おど}ろ 起^{おこ}ち

紆^{ゆる}り緩^{ゆる}る 玉^{たま}眞^まの路^ぢ

神^{かみ}娥^めいます 蕙^{わい}文^{ぶん}を花^{はな}むらの裏^{うら}

- 17 鹿実自開坊 H
- 18 李柔道鏡策 K
- 11 木葛茂重耳 K
- 12 並珠鏡晴晴 H
- 58 刈兼持肩紋 K
- 255 畦肥前並蓮 K
- 116 洲唱殿餘品 H
- 9 乾變鈴柱地 M
- 265 牽頭開鴉鏡 H
- 216 血路逆狐賣 M
- 122 駢鮮互探嬰 K
- 33 運騎如相策 H
- 34 振幽尼交榜 K
- 83 版船疑閃燈 K
- 31 單騎厭日鏡 K 物滋

- 27 苔繁榮潤珠
- 28 山實垂極紫
- 29 小拍儼重翁
- 30 肥松空丹麗
- 31 鳴流走響韻
- 32 攏秋抱光優
- 33 鶯唱閨女歌
- 34 瀑懸鼓練帳
- 35 風露滿笑眼
- 36 駢驀藉釘墜
- 37 亂篠逆石嶺
- 38 細頭喧鳥感
- 39 日胸掃昏騎
- 40 新雲啓華閣
- 41 證證厭夏光
- 42 商風道清氣

苔の繁は 潤の珠に 紫い
 山のこの實は 頰らめる紫を 垂り
 小拍は 儼しく 翁を 重ね
 肥えたる松は 丹き麗を 突きいたせり
 鳴く流は 響きう調と 走らせ
 壘への樹は 光る極 抱けり
 鶯は 閨のちの女の歌を 唱い
 瀑は 其のちの練の帳を 懸けめ
 風は そよぐ露は 笑う眼さしに 満ち
 駢へる鞍は 藉に 釘き 墜き
 乱るる篠は 石嶺に 逆り
 細き頭のとりに 鳥への感に 喧ぐ
 日胸は 昏き騎と 掃い
 新なる雲の 華やかに 開く 啓きたく
 證證きけわいは 夏の光を 厭さけ
 商風は 清なる氣 道く

- 67 里儒拳足拜 K
- 128 瓊蘆郁天京 M
- 88 幽露塔善棚 M
- 87 白蛾飛舞地 K
- 240 參差存香夢 M
- 177 割錦不酬價 M
- 81 曹唾拾未盡 M
- 239 嘉塘奠鴻璧 K
- 246 龍駕開敲磬 K
- 245 靈燭望高阿 M
- 71 篆堂端蝠沸 K

- 43 高眠復玉容
- 44 煖柱祀天几
- 45 霧衣夜披拂
- 46 眠壇夢真粹
- 47 待駕接鸞老
- 48 故宮椒壁圯
- 49 鴻璫數鈴響
- 50 靈臣發涼思
- 51 陰簾束朱鏡
- 52 龍帳著魑魅
- 53 碧錦帖花檉
- 54 香衾事奏嶺
- 55 破窓臺木在
- 56 舞綠長雲似
- 57 玲瓏刺綉段
- 58 里俗祖風義

高きに眠りますかみの玉の容復し
 柱燵きて 天の几を 祀らん
 霧の衣を 夜に 披拂ふり
 眠りの壇に 眞粹をこそ 夢みしか
 駕を待ちて 棲まえる鸞は 老い
 故宮の椒壁を 壊れたり
 鴻璫として 数多の 風鈴 響かえは
 宮にやう臣のむねに 涼ろなら思いは 發きぬ
 陰の簾のつろ 朱の鏡なして 束し
 龍のえかける帳 魑魅の 著きいるごとく
 碧の錦に 花檉は 帖り
 香しき衾には 發き買たき 事ふりぬ
 舞ごえはたちし臺に 雲はみし木に 在まり
 舞緑 長雲に似て ずてられぬ
 玲瓏なれば 綉段のごとく 割られ
 里の俗は 風義しきを 祖とし

23 壽茶見文徳 K 會合
 284 紀盛播琴 M
 179 通波初鑑介 K

47 嶺林我遠睫 K
 48 縹氣我空情 M
 124 樽我浪登丁 M

59 鄰凶不相許
 60 羨帝無邪祀
 61 鮪皮誠に惠
 62 非角知福取
 63 縣君可刑官
 64 戸之詣祖交
 65 竹枝活壺類
 66 石磯引釣簡
 67 溪灣轉水帶
 68 芭蕉佃蜀紙
 69 岑光亮戲襟
 70 孤雲林繁事
 71 泉樽陶宰酒
 72 月眉謝郎妓
 73 丁丁幽鏡遠
 74 縞筒單乘至

鄰に凶よれば 相いまして許さう つかず
 羨うらやまむるときし 邪よこしまなるがぬ祀りするこゝと なし
 鮪いわし皮は 仁にやり恵むことを 誅つとり
 非角ひかくは 磯いそ取ることと 和なれり
 縣ごほは 刑さだまり司つかさどるとる官を 首かみきり
 戸かどいえには 祖おやいたせと 祖おやふ吏つと 乏すくし
 竹枝たけえだには 隨したがりて簡かんとすべきだけ 添そく
 石磯いしいそには 釣つりつけし簡かんを あまた 引ひけり
 溪灣たには 水みづの帶おびをいろけ
 芭蕉ばせうは 蜀しやくの紙かみのこときはと 傾かたけぬ
 岑せみの光ひかりは 戲あそぶの襟えりに 晃きらえ
 孤こ雲のみ さらみそらみにふる雲くもは 繁かたらわしき事を 拂はらう
 泉いづみのことき樽たるには 陶宰たうさいの酒
 月つきの眉まゆせらば 謝郎せうらうの妓
 丁丁ていと 幽おけき鏡かがみのおと 遠とほく
 縞しろ筒つつみと 單ひとつとふ鳥とりかぬ 至いたる

75 露漱般城城

76 老溜聲爭次

237 旗掃流日月H

77 淡嫩流平碧

78 薄月射陸悴

79 涼光入湖岸

80 布蓋山中意

81 漁蓋下宵網

82 露禽疎煙初

83 潭鏡滑蛟涎

84 浮珠啗魚戲

85 風桐瑤匣瑟

86 管笙絲軟使

87 柳絮長垂帶

88 篋竹短笛吹

89 石根綠線絳

90 蘆筍抽丹漬

霞はえせる嶽は殿く 嵯峨としてそひえ

危どき溜は 聲よけて 次を争い

淡き蛾は 平やかに碧なるひかりを流し

薄月は 射けき雲に 悴れぬ

涼しき光は 湖の岸へに入り

布やかに 山の中なる意を 蓋さして

漁の童らは 宵の網を 下し

霜のごと白き禽は 煙のごとき翅を疎ませ

潭の鏡をすみへんに 蛟の涎は 滑らにて

浮べりみすの珠に 喰ふ魚は戯る

風うけし桐は 瑤の匣なる瑟ひくごとく

管のごとき笙とは 絲成の使なるか

柳は綴る 長き線の帯

篋持らいて 短き笛の吹こしよ

石根は 緑の線に 絳とられ

蘆の筍は 丹き漬のなかり 抽きいす

291 驚蟻見蛇脚 K
5 流滑髓反歩 H
157 魚口星浮浪 H

278 金星隨連理 K

76 折蘆啼遠雀 H

59 遊旋皮卷鬪 K

80 獸材尚琴極 M

253 薩度森橋檢 M

259 振雲破曉峰 K

260 採月遊物坂 M

64 飄爾買米航 M 會合

77 歸我孟夫子 K 道左

78 歸去無夷猶 K

91 瀑旋香天影

92 古檜學雲霄

93 慈月蔽帳紅

94 買雲香蓋刺

95 芒麥平百井

96 閑牽到千峰

97 刺低成紀人

98 好學臨夫子

深い旋るたみれば 天の影に 弄れ

古りたる檜は 雲の臂と 穿らんとす

慈うる月に 蔽の帳は 紅く

買なせる雲に 香しき雲こそ 刺せれ

芒ひいてし夢は 百ひらの井に 平ち

閑の衆には 千まわりの峰を列ねつ

刺低てる 成紀の人も

好く かの臨夫子を 學ぶべし

「昌谷五月稻」に始まる四十九韻九十八句が、長吉作の「昌谷詩」で、詩の各行の頭にかえた数字は句の序数、下にかえたものはその直譯である。「昌谷詩」の各句の序数の上に数字を空けて附したものが、その句に影響を與えたものと、私の指定する、韓・孟の聯句中の句で、「城南聯句」以外のものには、會合・遠遊・等と脚注した。K、Mは、その句の作者 韓愈(K) 孟郊(M)を示し、句の上の数字は、これまた、それぞれ別の詩中におけるその句の序数と示す。

わたくしの掲げた韓・孟聯句中の諸句が、『昌谷詩』に與文を影響ほ、しかしながら、その重合が各一
様だといふのでは、勿論ない。あるものはたゞ一字のみ、その形が、あるいは音が影響し、あるものは文
字の排列が、あるものは句の意味が、影響する。

さきに掲げた例で言えば、遙(3)と谷詩句の字數、以下同じ、塵(4)、粉(8)、波(10)、印(42)、垂(可)
病(28)、愁(32)、餅(36)、逆(37)、闊(40)、厭(41)等は、韓・孟聯句中に用いられた文字と同じもので
ある。

これらの文字は、しかし、多くの詩人によって多くの場合に用いられたもので、必ずしも韓孟聯句と昌
谷詩とを結びつける證據としがたいとの反論も予想されるではない。

けれども、さきに掲げた文字のうち、類なる文字は、李賀集中でたゞ一度見出さるる文字であり、この
外、やはり李賀集中でたゞ一度しか見出されない胃(94)という文字が韓・孟聯句中に見出されるといふこ
とは、單なる暗合といふきれないものがあるのではないか。なお、胃という文字が他の詩人たちにもあま
り多く用いられていないだろことは、例えば、『佩文韻府』のこの文字の條下に、たゞ九語例を掲げ、し
かも詩作品としては、長吉以前の詩人のものでは、杜甫詩「滎陽復發寢冥罪罟已橫胃」杜甫茅屋爲秋風所破
歌「高者樹胃長林梢下者飄飄沉塘坳」といふことでも推察できようである。(『佩文韻府』のあける語例
出典は歷朝のすべての作品から見れば九牛の一毛にすぎないし、掲載語例の比率も、必ずしも科學的を嚴
密さを持つものではなからうが、これで一往の回安をたてることはできるだろ)。なお「胃」なるこ

とはは『佩文韻府』の雲の條下には見えない。多分、長吉の造語か、それに近いものであるらう。
光露泣幽淡(10)、立馬印青字(20)、亂緒逆石積(37)、盤纏厭夏光(41)、淡蛾流平碧(77)のように、五言詩の句中では、韻字について突出した効果をもちやすい位置にすえられたものが、韓孟聯句の中でも、同じく句中の第三字目に見出されるという事は、長吉が韓孟の句に學んだと考えない方が不思議な位の偶合ではないか。

ことに「立馬印青字」の句をとけ、「草髮重恨鬢」「沙好平白」「愁月微帳紅」「買雲香曼刺」と共に、聯語僻隱たるものと評される(橋本徳「李長吉を論ず」支那學報十七年七月)が、「城南聯句」中の韓の句、「沙羨印迴平」を分つて、「沙好平白」「立馬印青字」を造成したことがわかれば、その知的晦澁に共むことなく感覺的鮮明を樂しんで味わい得るのではないか。「遠道聯句」の韓の句「恨竹淡空幽」と分ち、これに「納涼聯句」の孟句「微然草振響」の音韻、「城南聯句」の孟句「草珠競駢暗」と韓句「椒蕃泣喧嘩」との字面・擬人法を加味すれば、「草髮重恨鬢、光露泣幽淡」の一聯、長吉ほどの手たれならば、さほど勞せずして吟じ出したであらうし、讀み手は、さういう樂屋の仔細に通せずとも、西方の詩の擬人法になじみのある人ならば、そのまゝでうけとれるのではないかと思われる。

この外、桂と隨(4)、澤と塗(8)、關と暝(22)、鶯と突(30)、機と走(31)、紛と拖(32)、鼓と替(83)、望と夢(46)、聞と棲(47)、親と著(52)、物と引(66)、戰と寤(69)、突と掛(70)、浪と幽(73)といった風に、或いは反對の、或いは似よりの、或いはかなりずらした語を、似た句、反對の句、相さうた句の、そ

れそれ対照的に、響きの強まる位置にはめこんで用いているのは、やはり韓孟聯句を意識してのこととい
えろであらう。

詩人と詩人との間にふける影響というものは頗るデリケートな問題である。その微妙を解こうとして、
兩詩人の作品中の用語に、同じいものを見えろかごときは、最も原始的な、むしろ、盲人の象を知らうと
してその尻尾と撫でるに似た方法とすべくてゐるかも知れぬ。

にもかかわらず、「昌谷詩」と韓・孟聯句との關係を察するにあたって、先ず採らるべきたる語句の異同
を以てして、兩詩の理想、精神、結構等に及ぼすのは、詩人か他の詩人の作品から最初にうけと
る快樂か、その詩を構成する一つ一つのことば、それらのことばの組合せの微妙にあり、詩人か他の詩人
の作品から最後にうけとる快樂もまた、正に、そこに、あるからである。長吉のようには、ことに字面に鏡
感を詩人にとって、この點こそ、その陥穽たるたといつていい。

ただし、陥穽におらいつて身動きがとれなくなるようなものは語るに足りぬ。自ら進んで陥穽に入り、
虎兇を奪つて慈心とおのれの家宅に立ち歸るほどの豪の者でなくては詩人の名に値すまい。長吉がそのい
ふれてあるかは、韓孟聯句の各所から、凡そ、きらめき、匂い、響くほどの語と句とをことごとく利きと
つた「昌谷詩」の仕立上りの姿から、その身許を指摘する者が方扶南以前に現れなかつたことに明らかで

あらう。

「昌谷詩」に對するひとひとの評價は、彼のすべての詩に對するやわと相似て、殆ど相反する二つに分れる。吳正子はいふ。

本傳に言う「長吉、旦に出するに乘馬し、奚奴は古ひたる錦の囊を背にして自ら隨う。作る所あらば囊中に投入す。その未だ成らざるものは、夜歸りて、足して之を成しき」と。今此の篇も各詩を觀るに驗すべし。蓋し、其の景に觸れ物に遇い、得る所の句に隨つて、比べ次で章を成し、研しきと豈きと雜うい味へ、爛斑と目に滿つ。これ所謂、天吳と紫鳳と、顛倒して雜糅に在かるるなり。

陳本礼はいふ。

凡そ長篇を作らに、鋪き排べ敘て述ぶること、平板になり易く、險峻波峭なるは得難し。此の詩は、句句與く、字字練られ、總て人として易くは誇まらず、之を元、白等に轉ぶるに、此の體は自ら是れ大元の語なり。此の詩は乃ち長吉集中にて一篇の意を經せし大文字にして、夏の鼎・商の壺の土中に沉埋せしを、特に爲に之を洗ひ、之を剔りて、其の義を疏き明せしが如し。故に寶光燦發し、古色斑爛として、將に復び世に重んぜられどするなり。

吳正子が昌谷詩の詩法を解くに本傳の語をもつたことは卓見としてよい。其の景に觸れ物に遇い、得る所の句に隨つて比べ次で章を成す」というところは本傳の語を敷衍して、「昌谷詩」の聯句的秀態に

説き及ばんとする勢を見せている。

ところで、本傳の語なるものは、いうまでもなく、李長吉の「李長吉小傳」に得たものである。義山の小傳は、かいつての史筆が、かく傳ではない。「白玉樓中の人」なる數語の文字によつて、長吉藝術の秘奥を闡明するまでに、傾倒し盡したとては、いかゞ。彼の物した傳中の語に一字の無駄もあらうはずがない。騎驢銘もまた長吉の日常を描いてみせたというような生易しいものではありえない。吳正子の數語をまつまでもなく、長吉の詩法ことにその聯句的發想を十二分に腹にたゞき込念上で、さりげなく、これを騎驢の人に描いてみせたのてはないか。

藤念の文集に注した蔣之勅は、「聯句の詩は唐虞の唐款より始まり、下つて漢武の柏梁、即ち魏愷之、桓玄、殷仲堪、陶澍明も亦皆作あり、或は曰く、聯句は古この法なく、退之より始ると、非なり」といひ、徐師曾は「文體明辨」に「聯句の詩は柏梁より起る、人ごとに各一句、集めて以て篇を成す。その後、宋の孝武の華林曲水、梁の武帝の清暑殿、唐の中宗の内殿詩、皆漢と同じ、唯、魏の魏愷方丈、竹堂燕饗は人各二句、稍前の體を變ず。これより以て、體は遂に一ならず。人各四句なるものあり、陶靖節集に載するところの如き是れなり。人各一聯のものあり、杜甫と李之芳及び其の甥宇文藻と作るところの如き是れなり。先ず一句を出して、次を乞ふ者、之に對し就いて一句を出し、前人復た之に對するものあり、韓昌黎集に載する柳南の詩の如き是れなり。然れども、必ず其人意氣相投じ、筆力相稱つて、然る後、能く之を爲す、しからざれば、狗尾續貂、後世の議を免れ難し」といふ。

聯句の詩が想像の層に始るかどうかはともかく、詩歌が古代においてほ、かけ合いの形で進歩して行つたことは、洋の東西とどわす相通するところであらう。ことばとことばのあらそいが心と心とを結ぶのてあり、結ぶ心と心とが更にことばとことばをたたかわせる。後の唱歌の詩の如きは、いわば聯句的發想の一形式にすぎないといへばいえるであらう。それほとしかく、聯句は蔣、徐兩氏ののべるように各時代にその作を見よといへ、唐以前にはその數は寡々たるものだが、唐に入つてにわかに盛になる。全唐詩に載せるところすては百廿首をこえる。逸したものはおそろくこれに數倍するであらう。

全唐詩に載せる聯句は六卷で、李白、杜甫らに始まり、韋應物の聯句は第四卷全部を占め、しかもこの卷は他の卷に比して紙幅がほゞ倍する。韋應物に次いで多のは白居易を中心とする人たちの聯句であつて、中唐の代にいかん文人の間に聯句熱が盛んであつたかと察することかてきよう。

現存する唐代聯句が、李白、杜甫などの盛唐諸家に始まり、中晚唐に盛んであることは、注意せらるべきことだと、わは考へる。

聯句は詩句を問はずものである。詩句を問はずには必ず語の奇巧なるんことを求めらるであらう。語の奇巧は、腹筋の宏富を多くよつてその一半を達しうらであらうが、一半は視覚の精緻に俟たねはならない。いわば聯句は徹視的凝視の問ひであつて、相手の凝視の死角をわらうて肉迫することによつてはじめて功を奏するのであらう。奇功は意義を衝くことによつて收めうらものであるが、語の奇巧も亦同様である。今日に存するに耐える聯句は必ずすぐれた徹視的凝視の持主でなければかなわぬことである。唐の聯句の

今回に存するものに初稿の作を見ず、杜甫の如き徹底的蔑視の詩人を生む時代まで得たわけならぬことは、意味なしとしないであらう。

聯句は意表に出でんことをつとめるものだが、意表に出でんと努めるときには作者自身思ひもかけない。彷徨、道草、停滞、疾駆を全休なくされる。鉄略・重獲もこれを厭うている暇がない。否むしろ偶然がもたらす、たまふまの不刊と敵が我に投げかける困苦とを逆手にとりて敵に返すことによりて聯想の暴風をまき起し、あうかじめ引いた圖によつて小舟裏に仕立てる金銭などには思ひも及ばぬ、深山幽谷、荒漠平原、大河涇海の無敵を生成せしめるものか聯句であらう。

社會というものは一人では成り立たない。二人以上が集れば必ずそこには相及する意思が働き合つてゐる。そのような社會におかれた人間の生命をなすものはつねに他に對する抵抗順應・及發安協のくりかえしであらう。そこには自ら思ひもかけぬ、彷徨、道草、停滞、疾駆がある。つねに問ひかけあつて、これに答えをわけるもの。このような社會的動物たる人間は、孤獨のうちにあつても、自らあつた問ひかけ、答え、せすには生きていることができないであらう。かくの如き人生にはいたるところに重複・鉄略が存するであらう。さすれば、聯句をなすものは、吟人消閑の遊戯に發するとしても、人生如實の相を寫す藝術形式として頗る相かなつた形式といふことができるのではないか。

朱竹垞が「淮南聯句」を評して「一味排空生造、牽強凌泊の失なくんばあらず」と駁するのには、聯句形式の詩めしつ振蕩的な性格に對する理解の淺さを自ら語るものであり、駁しなからしかる「然れども」

辭搜巧鍊・人を驚かすの句、層出して掲きず、學五車に富み、才八斗を靠めるものに非れば、安んぞ能く此に幾からんや」といつているのは、城南聯句が人世を寫してその根源に達するに近いことを感じていたためであろう。

わたくしはヤキは、「昌谷詩」の語、句の「城南聯句」に共通することの多きをのべたが、「昌谷詩」の措詞も亦「城南聯句」に極めて相似している。

吳正子の「昌谷詩」評は、「城南聯句」と相似た「昌谷詩」の藝術的意義に内迫しをから「天吳と紫鳳と顛倒して短褐に在るもの」と貶していつるのは、遂に聯句的手法の持つ重大な意義を悟らなかつたためである。

ジエイルス・ジョイスの「ユリントズ」という小説は一人の男の晝間一日の意識をくまなく述べて描いたものだが、正に「その景に觸れ物に觸り、得る所の句に隨つて、比べ次で章を成し、研しきと豈々と詩うえ陳べ、爛斑と目に満つる」もので、この小説が始めて現れた当時「天吳と紫鳳と、顛倒して短褐に在り」式の評を浴せられたものである。

6

聯句はもと一種相和の詩である。「必ずその人意氣相投じ、筆力相稱うて、然る後、能く之を為す」とは、いうまでもない。

韓愈と孟郊とが意氣相投したことは趙翼が「昌黎、本好んで奇崛瀟灑を爲す。而して、東野は懸空の破詩、妥帖排妥、趣尙略、同じく、才力又相等し。一旦相遇して遂に膠の漆に推するを覺えず、相得て間なし」といふ通りである。かく相得て間なきに至つたのは、趣尙略、同じく才力又相等しいことであつたのは勿論だが、一半は、兩者の性格が相及していたところにある。人は無意識に己に缺けたところと友に求めるものである。退之の性格は極極明快であつた。東野は消極暗鬱であつた。退之は極めて男性的であるが、東野は女性的であつた。退之は開放的で包容性に富むが、東野は閉鎖的で進んで他を容れることとしなかつた。兩者の交遊も、退之から進んで求めなかつたならば、東野の方から退之に向ふことはなかつたであらう。退之は開放的包容的であるから、その知友門人にはさまざまの性格の人を容むけれども、盧仝、骨島、孟郊のように消極暗鬱の人、張籍、王建のように平明秀麗な詩風の人と愛重したのは、己に乏しいところを彼らに求めたものといふやうであらう。

韓愈の聯句は、前にも觸れたように元和初年、退之が陽山江陵から歸つた直後になる。この時退之は三十九歳、孟郊は五十六歳であつた。退之はよろこびのうちにおのれの尖銳をゆるべた時期にあたり、東野もまた爽散な生涯にシヤ、光輝の及びけぬいた時期にあたり、その消極暗鬱をいらしたのであつた。

相反する性格の兩者が互に謙退することによつて共に相手の上におとすれた幸運をよろこび、しかもこの頃のちうやうにおいて互に他を假借しなかつたという交友唱和にとつて至上の要約にないてなされたものが、韓孟の聯句であつた。彼らの作が古今の聯句に卓絶するゆえ人は、この至上の要約を抜きにして考へ

ることとはできない。今、諸の聯句の詩を觀るに、凡そ、昌黎、東野と聯句すれば、必ず字字勝を争うて、肯て稍、譲らず。他人と聯句すれば、平易人に近し。知るべし、昌黎の東野に於ける、實に資けて其れ相長ずるの功あるを。宋人疑う、聯句の詩、多くは韓の孟を改むるの係と。黄山谷はすなわち謂う、韓、何ぞ能く孟を改めん、乃ち孟の韓と改むるのみと。この語未だ過當を免れずと謂し、これを要するに、二人エカ悉く敵し、實に未だ優劣易からず。昌黎、雙鳥詩を作り、己と東野と一鳴し、しりも萬物皆敵て、聲を出さざるに喩う。東野の詩も亦之う。詩骨、東野嘗て、詩清、退之湧くと。居然として被敵相當り復た謙讓せず、今に至るまで、果して韓孟並稱す。蓋し、二人各、自らこの才力の至るところを付て、頑め聲價を定むるのみ」と、趙翼が、陔北詩話にいうのは、この間の消息を語り得えて妙である。

さて、長言が「城南聯句」に學びながら、何故「昌谷聯句」ではなく、「昌谷詩」を爲したのか。

筆力相当り、資けて相長ずること韓における孟、孟における韓の如き友を持たなかつたからである。

長言に友か之しかつたわけではなにか、句をたゝかわせて數十韻乃至は數百韻に及ひうる友はなかつたのである。

長言と、韓・孟いづれに近いかといへば、その性格に於ては孟により近く、詩法、趣向において韓に
より近い。長言は、韓とも孟とも違つた特異な性格・詩風をもつたものではあるが、少くとも聯句をたゞか
わせるといふ面では、韓・孟が相資けたものを一身に具していたともいえるであらう。すなわち、友に唱
和すべき才をもたなかつたといふだけでなく、そもしも長言のうちに、他に唱和を求めるところとを拒む自己

充足性があつたのだ。

長吉の蒲思的精神は、必ず聯句的発想におのれの詩注を遺せざるをえない。しかも彼の蒲思は他と共に聯句を作るを拒むものがあり、更に、彼の蒲思に謙退せしめておきてこれをなすべき好敵手をもたなかつたこと、これが、彼の昌谷詩における獨性性の由来だと、私は信ずる。抜道のない彼の孤獨の深さが露せられる。「昌谷詩」の長大は、元來が短篇作家であるこの詩人の、孤獨の深さと、倦怠の長さを語るものであらう。

義山の「李長吉小傳」にえかいた騎驢の像は、一箇の古びた錦の囊より外に吟友をもたぬ聯句作家、李賀の孤獨の藝術的意義を、すべての注家よりも明らかに釋き、すべての評家よりも鮮かに評したものとはいえないか。

その後、永い時日が過ぎてから、每晚、あつ角になつてゐる窓に、遠くまで黙つてゐたランアが、何であつたかを僕は知つた。それは、ロジンの秘書ルケのランアだつたのだ。當時僕は、非常に多くを知つてゐるものと自惚れて、實は、生意氣な若さの甚しい無智の中に生きてゐた。成功が僕を欺いた。當時まだ僕は失敗よりもなほ悪い成功があり、人と人を成功にもさせる失敗がある事を知らなかつた。僕はまた知らなかつた。やがて一日、お互に遠く離れ離れになつてから生れたルケとの友情が、飛んで來て望を壊けよと僕を呼び招いてゐるとし知らず、嘗て彼のランアの光りを眺めたそのことを。

魁々とするに到らうとは、

...

ランア以外に語る人をもしたなかつたパリのルルケを回想するジャン・コクトオの感懐 (Pictorial Souvenir)

1700-1710 頃ロ大空語に似たものを、恐らくは東野の姿をおもしろいかへながら書きとめたであろう。刺促成

紀人「好學鶴表子」の鳥谷宗聯に、更には「燈青爛膏軟・落照飛蛾舞」(後ハ行)などを口ずかふるが、筆

を進めたであろう義山の「李長吉小傳」に感ずるのは、わたくしの感傷に過ぎないであらう。

(昭三一・七・五)

...

...

...

...

...

...

...

...

雙岡隨想
中新敬

徒然草試論 (六)

女為羊女信 (女)

雙岡翹慧女裝裝

雙岡隨想

五

—— 徒然草 試論 ——

謝る事なき盛をばなる親

「太衝の太の字、點うつゝうたず、といふこと、陰陽のともがら相論の事ありけり。もしちか入道申侍
言ひしは、「吉平が自筆の白文の裏に書かれたる御記、近衛關白殿にあり、點うちたるを書たり」と申し
申す事なき。百六十三段」

「僅少の文字ながら、中世という時代における官吏人の性格が明瞭に投影されているのを看取できよう。
「陰陽遠ならずとし、こつこつ自家の術語とせうべき文字の一息一画は勿論軽卒に取扱わらざるべきではな
い。それ故、一毫疑念がさしはさまれると、やかましい論議の埃濁をまき起しても不思議ではないのであ
る。そして確固不動の幹椽があげられない限り、論議は何時果てるともなく、波みに浮ぶ沓沫のようを甲
論乙駁の無意味な怪鳴燥氣が繰り返されるに過ぎない。そこへ、もしちか入道なる人物が登場して、「吉平
が白筆の白文の裏に書かれたる御記近衛關白殿にあり、點うちたるを書きたり」と千鈞の一語を放ったの
で今までの沓沫論議も遂にピリオドになり、太衝の太の字は點を打たねばならないことに結着したとすう

のである。

話はただそれまでで、今日の我々から見れば随分他愛のない話と考えられようが、兼好がこういう茶話を書きとめておく爲には、話にやはりそれ相應の重要さを認めていたことも考えてみないわけにはいかぬだろう。

この話も亦、故実的世衆の出来事であり、陰陽道の占術が絶対視された中世という時代を端的に描破していると思えば今日の我々にも單なる好事家の茶話とのみは看過すべきではなく、中世的人間像の探求には好個の資料として興味をいられる次第である。

陰陽寮という池に小さな石が投ぜられ、池の蛙がガヤガヤ鳴き出した。そこへ一羽の鶴が飛んで来て一声放つと、ガヤガヤが一度に鳴りを鎮めてしまふ。何だかイソップの世衆のような話である。事実、故実的世衆というものも、寓話的世衆にも、そのモラルにおいて劃一された形式主義が徹底している。この点でも現代の吾々の興味ととらえるのに充分ではなからうか。

では、その鶴の一声のしつ権威とは何だらう。吾々はしりちか入道の言に故実的世衆におけるその権威性を追求して見ねばなるまい。

まず「吉平が自筆の古文」である。吉平とはいうまでもなく安倍吉平である。平安朝の古。その鬼神の如き明断を記われ、後世にまでその名声を伝えている陰陽博士安倍晴明は、彼の父である。彼も亦、家伝を以て父の名聲を辱しめなかつた斯道の名人であった。古今着聞集にはその明断を次のように記す。

陰陽師吉平、医師雅忠と酒をのみけるに、雅忠盃をとりて、うけてしばしもたりけるを、吉平見て、
御酒とくまゐり給へ、只今なみのふり候はんずるぞ」といひけり。其ことばたがはず、やがてふりけ
れば、酒がぶときてこぼれにけり。ゆゑしくぞかたわていひける。

こういふ明断は父の數多い説話と共に後世に喧傳されていたに相違ない、陰陽寮の筆にはその権威が神
の如く尊崇されていたことだろう。その名を聞いただけでも口をつぐまざるを得ないほどであらう。
その吉平の自筆の本文とは殺うにとつて神託にも等しい。所が、太の字はその本文に書かれていたのでは
ない。実はその裏にさるやんことなき御方の御記として、その中に見出されたというのである。このやん
ことなき御方は誰か知る由もない。ましてその方が陰陽道についてどの程度の造詣をもたれた方であつた
かなど分る筈はないが、太衛という陰陽道の術語を吉平の本文の裏に書くからには、やはり何かその道の
記事ではあつたのだらう。

吉平の名の出、御記といへば、泡球論議は鳴りをひそめざるを得ない。それのみではない。その御記は
現に近衛関白殿に保存されているのを自今はこの眼で拜見した、というのである。これだけの條件がそろ
えば、それらの條件の相関性など改めて吟味するまでもなく、もう之の疑念のさしはさみようもなく、
陰陽寮の聲は鳴りをしずめてしまふのである。

これも亦、一種の思想的偶像崇拜といへないことはなからうが、故実の複製性に絶対服従するところ

中世的人間像の特質がある。もりちか入道はこういう中世人の言動を衝いて、偶像の點睛は兎事な出来栄
であるといわねばなるまい。

近衛関白殿については、従来の注釈書は大抵藤原家平にしている。家平ならば、第六十六段に阿本関白
殿として出てくる人であるが、必ずしもやうとばかりは云えない。兼好の当時近衛関白殿というのは家平
一人ではない。彼の意経志も関白になっているし、他に近衛基嗣も居るのであり、此の二者何れとも断定
できない。

ところで問題はもりちか入道なる人物である。従来の注書はこれを位不詳としている。けれど、この
發言から考えられる彼の人間像は既に平素からその学識を充分に認められた人物であり、関白家に入
りて 御記を拜見できるといふから、入道の身と雖も前身はその官位の決りて卑くないことを推察するのは
難くない。恐らく彼の發言は当時の宮廷に於て相当重要視され傳説された程の人物であつたに相違ないと
考ふる。

以上のことと念頭に置いて公卿補任(國史大系第九卷)をくつてみると、そこに藤原盛親なる人物を見
出すのである。

故入道從二位 兼行卿三男 母？

弘安二、正、五、敘將(東二條院當年御給)

正安二、三、六、任出羽守

延慶二、六、十二、從四位下、同十二月廿六、
任刑部卿

同三、四、七、去卿

寛長元、正、五、從四上、同五月十、
任左馬頭

正和二、三、九、四下、同五、四、八、
任内藏頭

文保二、正、廿二、任大藏卿、同五、三、廿六、
去卿

元弘三、正、五、從三位、同年五月復本位、
正四下

又

後醍醐 延元元年

從三位 藤盛親 四月六日出家(依後伏見院御事也)

私は此の記録によつて、もりちが入道を目して藤原盛親と同一人物であると断定して間違ひなからうと考ふる。彼が延元元年四月六日に後伏見院の前御にあつて出家し、それ以後、もりちが入道と號したことは北朝系の延臣であり、後伏見院を政下に閏白であつた家平との關係とも齟齬するものではない。家平が閏白の當時、彼は左馬頭に在任していた筈である、時のみかとは花園院であわしまし、その院の宸記、文保元年五月廿四日の條下に盛親朝臣の名が見えていることも傍証と回れるものと云えよう。

以上によつても判るように藤原盛親は多分に北朝を官廷に執近の強かつた人であると考えねばならぬ。この点、さきの近衛閑白殿を家平に擬することは幾分妥当性が無いわけではないが、もりちかが入道した當時は經憲、基綱が相ついで閑白の時代であり、その兵二十年も昔の家平より自然さがあるものと考へられる。經憲は南朝に志のあつた人で建武四年四月閑白を辞し、翌五月には出奔して南朝に仕えた人であることも、盛親との關係に何らかの示唆を与えらるう。けれども、対人關係の複雑怪奇な当時の官廷のことであるから、前述の如く三音何れとも決定し難い。

吉平の占文は大分時代がさか上るけれども、もりちか入道がその御記を拜読したのは家平の閑白時代とすれば、相論の時よりやくとも二十年も昔のことを記憶してしたことになり、その記憶の上では、この人の頭によさを倚靠することにもなる。いやしくも御記とあるからには、文字の真画の微に至るまで注意しなから拜讀したことであつたらうが、彼の學力もすばらしく秀でたものであつたと考へられる。

それにして、彼が代行した鶴の一聲には時代とは之いながら、今日の吾々には多サの皮肉も感じられなくはない。彼は大真面目の發言であつたにせよ、その談服の方法はあくまで中世的である所に私は興味を感じざるを得ないものである。

所が問題はそれのみではない、本文後書きの「もりちか入道」が藤原盛親に相違ないと斷定して差支えなければ、当然第六十段の眞垂院の盛親信都なる人物を組上に上せざるを得なくなるのである。

即ち、徒然草の本文は次の如くである。

夏乘院に、座觀僧都とてやんごとなき智者ありけり。いもがしらといふ物を好みておほくくひけり。慈悲の座にて、おほきなる鉢にうづだかくしりて、ひやもとにおきつつ、くひながら文をもよみけり。煖ふことあるには、七日ニ七日など、療治とて籠りて、思ふやうに、よきいもがしらを選びて、殊におほく食して、萬の病をいやしけり。人にくはすることなく、ただひとりのみぞくひける。きはめまきつしかりけるに、師匠系にやま、錢二百貫と、坊ひとつをゆづりたりけるを、坊を百貫にうりて、彼是三萬石をいもがしらのあしとさだめて煮なる人にあつけあきて、十貫づつとりよせて、いもがしらを乞ひかうすめしけるほどに、又粟塚にもちよることなく、其のあし皆になりはけり。「三百貫の物を、まづしき身にまうけて、かくははからひける、誠に有りかたき道心者なり」とぞ申しける。この僧都、ある法師を見て、しろうろりという名をつけたりけり。「とは何物を」と人のとひければ、「さるものを我も好まず、若しあらましかば、この僧の頼に似てん」とぞいひける。この僧都、みめよきま、カフよく、大食にて、能書、学匠、善説、又にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中にもおもしろく思はれたりけれども、世を軽くおもひたる由にて、よろす自由にして、大方人にしたがふといふことなし。仕立しや寝居などにつく時も、みな人の前すをたすをまたす、わが前にすまめれば、やがてひとり打食ひて、歸りたければ、ひとりついたちで行きけり。時、非時もひとにひとしく定めてくはず、わが食ひたき時、夜なかにし、曉にも食ひて、ねぶたければ、晝もくけこもりて、いかなる大事おれども、人のいふことぞといれず、目さめぬれば、いく夜もいわず、心をすましてうそおきありきなど

尋常ならぬさまなれども、人はいとはれず、よろおゆちされけり。徳のいたれりけるにや。

この盛親僧都も従来の法書では何れも傳不明の人物である。然し、もろちか入道が藤原盛親の佛門に入る者ならば、後に盛親僧都と名乗つて門跡寺たる仁和寺の院家の一である真乘院の住持に坐つても不思議ではない。花園院も御出家の後ば、仁和寺教家殿におわしましたのである。院家といふものは公卿の出家者が坐るべき寺柄をもつてゐることも看過すべきではない。それに盛親といふ名はどう見ても坊主身くない。法名の爲に選ばれるべき名ではない。そして藤原盛親といふ名はれっきとした貴族の名である。冒頭の「やん」となき有者」と云ふのも假か公卿出身であることを白わせてゐる。仏道に入つて剃髮染衣して在家の身分ならば、もろちか入道で差支ないが、寺院に入つてもろちか僧都は不具合である。と云つても更法名をつけようとする僧山を趣味も嫌わしいと云へば、俗名を音讀してじようしん僧都となるのも自然である。ト部系^{かたべ}が兼好法師になつたのと同じことである。

私にはどうもこの盛親僧都か、もろちか入道の転身せるものであるように思われるのである。といつてそれを積極的に決定すべき資料は、真乘院か仁和寺の院家であり、貴族出身者が住持すべき寺院であるといふ寺格以外にはない。

幸い、此の六十段は、兼好の人物批評としては後怨草中に於ても神彩の文字である。盛親僧都ほどの人間性と、これほどの文字に把之得て餘蘊のないのは、兼好の筆力とその極致と發揮せるものと評するも過

言ではあるまい。

然し、この僧部の前身が、何者とも解せずでは、この文段の真実の鑑賞ができてはすばない、と言わざるを得ない。それ故、従来の研究では多かれ少なかれ、この人間像描寫には間違ひや喰足りなきがあり、それを補う爲に勝手な尾鱈の主観世が附けられる傾向が避け難かつたのである。

所が彼の前身を貴族の名門とし、後伏見院の寵臣とすると、その奇矯な振舞ひ張越に浴んでいる人間性も成程と納得されるのではないか。

彼の人間的能力として、此の僧部、みめよく、力強く、大食にて、能書、学生、辯説、人に勝れて宗の法燈とある。若年にして刑部卿、左馬頭を歴任して見事にそれをやリ遂げる力量才腕、更に累進して内蔵頭、大藏卿の頭官に増々頭角を顕わして、院の嚆望をいやが上に重からしめた程の人物、その一々が筋節を合すように納得できるのではないか。但し彼は奇人である。常識の尺度で律し得ない人間である。勢のおもむく所、過激奇矯に失するような嫌いもなきにしもある人物ではなかつたらうか。けれども、その性格は徹直してお心なく、公事に忠誠をぬき人する型の人物であつたことは推察するに難くない。職権を利用して私腹を肥やす今日の官僚とは正反対の人物であり、それ故に今日の官吏政界同様、墮落のどん底にあつた当時の官廷社会には得がたい珠玉のような人格者であり徳の至れる者とも見做されたらう。彼が内蔵頭、大藏卿等官廷經理の樞要の職責を委ねられたのも、その清廉潔白の性を高く評価されてのことと推察できる。吾に清廉潔白のみでは堅自守ので、同時に經理運営の才能がなければよくその任に耐え得

るものではない。所が盛親にはその方面の才腕も遺憾なく具わっていたらしい。

私にはどうも彼の會しさと、芋頭に對する異常嗜好、そして芋頭を一かけらでも法して他人には食わせないその敬重ぶりにも、公私を峻別する心意氣が及見られたいでもない。彼の場合は決して吝嗇ではない。公明正大なのみだ。凡に火とともすような節儉生活に留まらぬ様態を示すような人間が人に嫌われながら長生きして、死んでから万金を残していたなどは世間によくある吝嗇家列位の常套だが、盛親は死後に何一つ残さなかつたろう。

師匠が死に際に彼の會用を哀れんで錢二百貫と坊一つとを呉れた。その處理法が振、ている。常識人なら、その後生大事にそれを守うのにキニウキニウとする所だらうか。彼は早速坊を賣り乘り乘りて百貫の錢にかえ、ころげこんた幸運の三万疋を芋頭代として京なる人に預けておいて、十貫づつとり寄せて食つたといふ。そのやり口はとつても大藏畑で鍛えて来た朕の所えを考えざるをえない。單なるお坊ぢやん育ちの公卿のやり口ではない。彼は宿弊の価値を最も有効に使うことを知っていたのである。こうして得た芋頭である、お坊ぢに一つでも他人に呉れてやるなどは、師の志を冒瀆するに等しいと感じていたに相違ない。『三百貫の物とまづしき身に儲けて、かくはかういける、誠に有かたき道心者なり』という評は芋頭の山に没頭した彼の心意氣を汲まねば正解を得たとおわれまい。彼が芋頭を一かけらでも他人に食わせなかつたのは師恩を自らの肉身にまで血肉化することに他ならなかつた。師の心やりの遺産に對して、これ程良識的を慮置はない筈であり、こういう盛親の心事にふれなくては誠に有かたき道心者なりの賞讃も上じ

りなしのになつてしまふ。

羊頭こそ彼にと、マウアイクリテイの給添であつた。談義の在ても大鉢に山盛りにしたのを手づかみでむしやむしややりながら奇論異説を吐き出した。この点りり豆をかじりながら古人を罵倒したという發生徂徠の風貌に似たものが感じられないではない。盛親や徂徠の聲咳に接した人々は時ならぬ芽舌に見えられて苦笑することもあつたのに相違ない。彼らの談義の在は時として「梅が香や隣は發生惣右衛門」ところではなかつたらう。

この盛親僧郁が藤原盛親なら楊梅家の出身である。彼は亦、高橋と羊頭の食餌療法で快癒して見せた。

これは今日の醫學の常識では説明出来まい。だが理由は素外簡單なのかも知れない。彼にとつて羊頭の食

餌療法は、單なる療法であつただけではなく、一種の羊頭に対する信仰心がこめられていたればこそその快

快癒であり、この點、食餌療法と云ふよりも寧ろ風變りな精神療法といつた方が當つてゐるかも知れない。

即ち、羊頭の選擇は神儀のそれと同斷である。奇跡が起らなければ起らないのが不思議であると彼は斷言

したに相違ない。遺憾ながら醫學に毒された現代人の身体にはこういう奇跡は起り得べくもないのである。

健康は勿論人間幸福の最重要條件である。だが保健の爲の信仰的療法を失つた現代人は、如何に進歩した

現代醫學の治療をうけても、必ずしもこういう信仰療法の効く中せ人よりも幸福であるとは云えない。徂

然は六十八段にも、「つくしの某押領使の大根療法」の奇跡を述べて「ふりく信をいたしぬれば、かかる徳

もありけるにこそ」と結んでゐる。奇跡は信仰による以外には生れ出すべくもない。現代に奇跡が起らな

いのは悪夢を懷疑が過利に充滿してあり、眞の精神力の根柢となり得る信仰が涸渇し切つてゐるからのことである。とまれ、私は盛親僧都の芋頭療法を珍としたい。

講堂の人々と彼の眼中にない。芋頭を食ひながらの講説で彼はすでに一座の人々を喰つてゐる。人々に好まるとき、盛親は恐ろしい食人鬼なのだ。彼は到る處で人を食う。その一例が「しろろり」である。「しろろり」というのは並ならぬ名への皮肉な嗜好とみではない。人間の食ひ方を示してゐるのである。常識人とは何時も食われる側の人となるのであり、人の食ひ方など教えられても出衆を以て徒輩を之うのである。所が盛親は非常識の徒であるから、ぢやんと人の喰ひ方を心得てゐる。彼はある方に「しろろり」といひしやうな名を冠した上で食うのである。食人鬼に之をせよと、常識人といううまくもない人間をいしく食う處には、うまそうな名前の食味を加えて食うのが賢明を食ひ方である。こういう食ひ方も芋頭の養道で修練した賜物であるに違いない。

食われてばかりいる常識家にはこれが分らない。分らないから「とは何物ぞ」といふ。けげんな顔をするのだ。こういう問にならぬ問に對しては「どう物を我も知らず、もしあらましかば、此僧の糞に似てん」といふより他に去いようがないのである。とて、こゝでも彼は現事に質問者を食つてゐるのだ。こういう盛親に對して、常識屋はかばで彼のことを悪辣だといふだろう。そんな陰口は彼にとつては辰のウンパである。彼らは常識屋である爲に、非常識家の盛親に敵しうる資格をもつてゐない。首朝のような男を敵に對決させると無かり面白、逆居が見られることだろうが、鬘を被つたり、の籠子を盗まれたり、

するような間の扱けた遊法師では到底彼の太刀打ばできない。

だから寺中は彼の独壇場であり一人舞台である。宗の法燈として、その存在は絶対である。よろず自由に振舞って常識に左衽右衽するよう醜態はさらさない。彼は生れながらの自由人であり、骨の髄まで貴族であり、彼自身が法燈である。滑稽である。面白いのは饗膳の席である。食う方は好きだから、彼も立席して、あぐらをかき、他の達者のように、いやに神妙な顔をして、かしくまっているようなことはいない。彼は膳が自分の前に据えられるや否や箸を取る。服の中の食い虫を押えて、会長の下らない長いさつなと拜駈するへまなまねはやらない。サツサと平らげて下らんと思えばサツサと引揚げる。一体日本の饗膳の席というものは奇妙な風習がある。上座だとか一廻だとかいう愚考を流石主義の座の譲り合いが行われる。食うのが目的なのは最初から分り切ったことだから、食うものをおいしく食べはそれについてあるが、最初はみな勿体ぶって苦虫をかみつぶしたような面をしてかしくまっている。会長の長いさつ、それがすんでも積極的には箸を取ろうとしない。隣近所に氣を配して、人より先に箸を取ることを恥たてに得ているかのようだ。そして後ろに始めるのが非常に身たしなみがいい。所が酒が次第にまわると今までの緊張は何処へやら、緊張はむしろ反動化して、まるで百鬼夜行の醜態が、おくめんなくさらけ出される。始めは食文の如く終りは脱兎の如しとは日本の実態である。だがその場景は既に兼好によつて餘蘊なく描破されている。兼好の時代もエケケットが口喧ましく喧嘩される今日でもおくも変っていない。向上も進歩もありはしない。要するに愚考極まるのである。盛観にはこの愚考さが堪えられないのだ。サ

ツサと引揚げる彼の態度の何と爽快ないやまよすよ。

齋・非時など彼の眼には藝戒律に過ぎない。そんなものを遵奉して、真の仏道修行が出来るものではない。自分が食いたい時に食う。食いたくない時には食わないだけである。睡眠についても同じだ。事予てはないが、睡たければ晝でもかけこもって眠る。孔子が何と言おうと、釈迦が何と云おうと、そんなことばてんでとり合わない。要するに自我意識が強烈であり、主体性が磐石不動なものである。主体の絶対性を確保しているから、どのような大事にもびくともしない。常識屋の感ぜまわる大事などタクをくくって見くびっていられるのである。

だが一度やると時にはやるのである。そのため徹夜を重ねることなど何の苦痛でもない。要するに常識の權威する世界への叛逆見であり、貴族や僧侶のエセ文化を白眼視する野人である。「世を軽く思ひたる曲者と云い、」世に常ならぬやまよ」と云うのも生活態度によって当時の腐敗社会に對して批判している抵抗感の現れてゐる。彼がよろずの人に厭われず、その奇矯な振舞を容認されているのも、生來悪意のない清潔な人柄を認めざるを得なかつたのによるのであらう。その天成の自由人的風格に人皆敬服したのはやはり徳の至れるものとするのが適評であらう。

私は以上の如く、盛親僧都の人間像に藤原盛親やもしりちか入道の人間像を想定することに何らの矛盾も撞着も考えられないものであるが、果して、どうであらうか。

次に以上の考察によつて、このテーマは徒然草の著作年代に一つの示唆を與えていることを注意したい。

藤原盛親が仏門に入つてしりちか入道となつたのは、後伏見院崩御の時、即ち延元々年四月六日のことであるから、百六十三段の執筆は、それ以後と認めざるを得ないことになる。更にそのしりちか入道が、盛親僧都となつて、真乘院に坐したのほそれ以後と云うことになり、従つて年次的に六十段より百六十三段より後の執筆といふことになるのである。この一事によつて、今日の國文学界に殆ど定説的權威を謳われている橋本一氏の年代考證論（徒然草の成立を元慶年間とするもの）は否定せざるを得なくなる。橋本説は明らかに誤説である。しりちか入道の考證など例の傳不明で片附け、自説に都合のいい數文段の官職考證によつて、猶斷を下したものであり、現に盛親が出家した延元々年の條下に該當する百三十一段の「侍従大納言公明卿」の如きも「大抵中の誤りだ」と宣言するなど勝手を猶斷を振りまわしているが、土肥經平の指摘した該考證は、必ずしも誤りと認める必要はなく、それを黙殺せざるを得ない橋本説にこそ致命傷の盲点がある、とわけてあることを強調しておきたい。

又、徒然草が文段を追つて順次書きまわされて成つたものとする説の如きも、誤説であることは、盛親僧都がしりちか入道に突行している所からも、当然考へらるべきことである。

資朝

西大寺の靜然上人、腰がぐまみり、眉白く、誠に徳だけたる有様に、内裏へ召られたりけるを、西大

寺内大臣殿「おな尊とのけしきや」とて信仰のまきくまりければ、資朝卿、是を見て、「年の寄りたるに候」と申されけり。

後日に、むく犬のあさましく老いさらばひて、老はけたるをひかせて、「此の氣息尊く見えて候」とて内府へ参らせられたりけりとぞ。 百五十二段

此の段のモラルは前段をうけて、「老人の人に愛敬せられずして衆に交わるはあはれなく見苦し」と例証せるものと解すれば中らないことと甚しい。如何に尊類無恥な醜老人でも招かれしめぬのに内裏にまで押かけたとは考えられないからである。

また此の西園寺内大臣と実衡（實兼の孫）というこゝにしてしまつてゐるが、これに對しておには異論がある。従末の研究では実衡が内大臣になつたのは後醍醐天皇の正徳元年四月二十七日、彼の三十五歳の時であり、従つてこの段の執筆は、それ以後ということになるという。史料詳讀や公卿補任をひっくりかえす以外には能のない注釋家は、俊美絶倫の後醍醐天皇がまさに天下の一大事を決意せんとするの概に、靜然の如きあいはれをわざわざ何の必要あつてお召しになるのか、というふうなことにはてんで考え及ばないらしい。

殊に天皇と資朝とは意氣投合の御間柄であつた。資朝の心事を以て天皇の御心事を拜察してもしさして不自然ではない。とすれば此處の内裏はどうやら後醍醐のそれを指すものではないらしい。この推量があつたらう。

當つていとすれば勿論西園寺内大臣は実衡ではなく他に求められねばならなくなる。静然についてし誦
注しとしくは不詳といふ。

花園院宸記を繕いてみると、西大寺長老と稱する
信が頻りに内裏に参向してゐる。その中にどうやら静然ではなかつたらうかと思われろ淨寛とか静寛とか
いつ老信が殿に戒を授け奉つたことが見えてゐるのである。

即ち、宸記元應三年（元亨元年）二月二日の條に次の如く記されてゐるのが私の眼をひくのである。

西大寺長老淨寛聖人參、面之受戒、徳賜甚高、尤可仰信、該戒誠有感、厚寔住慈慧心、酒度衆生之願
無私歎、規撼感涕。

この西大寺長老淨寛聖人は西園寺内大臣として信仰の氣を誦せしめた「西大寺の静然上人」とその
風貌が酷似してゐると出口たくなるようなイメエジの人物だ。花園院の宸記は「こしかぐまり、眉白く」と
と書かれてゐないが高徳の風貌に於ては内大臣以上の御感浄の程が容易に拜察されるのである。宸記
は翌年九月十三日の條下にも「西大寺、上人參」とあり、女保元年二月十七日にも「今日西大寺長老靜

寛上人参」という文字が見えている。これらの「上人」「静寛上人」は辻善之助博士の指摘の如く「淨覺」の誤りであるに相違なからう。感激の対象に、院御自らですら、「上人」とか「静寛上人」とか、誤記されているのである。その音聲の類似からしても淨覺が靜然と誤り伝えられるのも私には一應ありそうを銘語だと考えられるのである。

本朝高僧伝によれば此の淨覺、名け宣瑜、西六寺の律僧で、興正菩薩の流を襲け、後に興福寺に住し正和五年に西六寺に遷り、此に住すること十年、正中二年歿した、とある。

私は以上の考察から内裏の当主は後醍醐天皇ではなく、花園院であり、西園寺内大臣は実衡ではなく院御治世中の内大臣で西園寺の名に該当する人であつたらうと考える。とすれば、正和五年十月より文保元年六月まで内大臣の座に居た西園寺公顯の名が見出される。宸記によつて淨覺が始めて内裏に伺候した文保元年二月十七日は公顯が内大臣在位中であつた所から見て、私は此の段の内大臣はどうか公顯(実兼の第三子)ではなかつたらうかと推定するものである。この時實衡の年齢は二十八歳、如何にもその年少氣鋭だが、本段に描かれているような茶寮を發揮しそつと氣にするのである。これを実衡内大臣就任の正中元年とすれば彼も三十五歳であつた。特に彼の運命を注する「正中の變」の年であり、この緊迫した宮廷の雰囲気は靜然を召されることも腑に落ちない。次段の爲兼大納言の件について、西園寺に対する反感とも、時期的にいふと、より自然に結びつくとも考えられない。その年九月十九日には彼は捕われの身であり、十月四日には鎌倉へ護送されたことと対照してみれば、公顯の場合の方に、より自然性や妥當

性を多く見出すべきを得ないのである。

（一）つて花園院と資朝との關係をせし述べなければならぬ。一般的觀念としては資朝は南朝の大忠臣であらう。資朝といへばすぐ南朝を考へ、南朝を考へることから反射的に北朝を否定的に考へ易いのは大いに感してゐる。歴史をすべて割り切つて考へざるは偏見に陥れてゐるのに過ぎない。爲兼が捕えられた頃公頭が内大臣であつた頃、彼は花園院の院司をやつていて宮廷行事を奉行したこと、が續文應抄に散見される。後醍醐の御代になつて、つる花園院へはかたり出入してゐる形跡があり、北朝とも深い關係にあつた人であることを等閑視すべきではない。

花園院記によれば院の仏教に対する御定旨の深さは並々ならぬものであり、建武三年御落飾までに、仏教のあらゆる宗派、教団の全般にわたつて御研將の功を積まれた方であることが備前に理解できる。この実証は院の御信仰御修学の遍歴記の感ずるところである。淨覺が参内する前に江やけり西大寺長老如圓が願ふ頻繁に参内投戒してあり、後の律法御心融振りに江御定の人々の間にすら衆僧の批判があつた。たゞしく、院記には「此上人参内等、有願申入」とか、「世上嘲罵」とか「諸人誹謗」とかの文字が散見するのである。この批判音の中に資朝の聲があつたかどうかは知らず、院の御信仰の究竟地として禪に道に入り奉つたのは他方とあつた資朝であつたことは、特記されてゐることである。院記元應三年四月廿八の條下には

入内、有朝参、相具祥僧一人参、腹通之者也、而有得法之聞、仍召之、相談終夜及天明、其宗之爲體、

誠思量之所及、可謂猶龍若象、可仰信也。

と云り、此の禪僧が妙曉上人であることは後日の記事によつてわかるのであるが、これを嫁めとして、その後も實朝が妙曉上人同伴で参内し、「法談及比明」とか「法談如例比明退法」とかあるによつても如何に禪への御祈禱が熱心であり、その御願が、ふりが推察できるものである。實朝が禪の修行に深かつたことは太平記に、佐渡に於て斬られんとする時の辞せの偈によつても、これを證明することができる。

五、蓮假成形 四、大今歸空

將首當白及 哉斷一陸風

五、蓮假成形の下に、名字を書附て、筆を闕き給へば、切手後に廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落て、質は尚坐せうが如し。

これは必ずしも太平記の文学的潤飾ではあるまい。斬られ方の潔くも竹を割つたような彼の性格を顯して實に見事なものであるが、首が落ちても、質は尚坐せらるが如しとある、その坐禪相は、餘程の禪境に悟入してゐた證據と認めねばならぬ。

大日本史によれば、此の偈は晋の僧肇が臨刑の偈であり、實朝の作ではない。そうだが、此處では老人所考證論議は無用である。實朝が禪の教養を体した人物であつたことは妙曉との道交によつても肯定されぬ。

ばならない。

妙曉は元亨元年十二月二十七日渡元の爲、出發した。院はその後も京峰上人らによって増、禪境を深められ、御法体の後は、仁和寺教養殿に住せられ、これが今日の妙心寺建立の濫觴となしてゐるということである。

これで見ると、源朝の人間像に武骨な風貌のみを讀みとすることは許されない。彼の奇矯な振舞にはやはり早くより禪境が觸發されてゐたようである。そして彼は、彼が後醍醐の朝廷に仕えてからも何故北朝の花園院にまで妙曉を遠行したのか。その心術を解説するのには、彼の倒幕構想には、南北兩朝對立の如きは好ましくらずと考えていたに相違なく、兩朝は合體統一して事に當るべきだと觀じ、又王者の信仰態度としてほ宜しく餘他の譜系より、特に禪宗でなくてはならずと直指してゐたのではなからうかと推量するのである。兄弟隨に相せぬ醍醐幕府の自家保全政策には乘せられる所であると、彼は考へたものではなからうか。それ、彼に戒律宗の独善的小乘性など眼中になく、靜然の懐かき、眉白く誠に徳だけたる有様など、國家的大事の前には抹殺すべき些事にしか過ぎず、さういふものを有難がる西園寺内大臣の政局的無自覺さも腹立たしく、彼向ら事にはいられなかつたのだと解釋したい。こゝう考えてくると如圓や淨寛に御心酔になる花園院の信仰態度にもよき足りなさを感じたと考へるべきであり、前に記した花園院批判の中には、案外彼の聲が入つてゐたかも知れないのだ。

西園寺へは毛のはけた老犬と一れていつた彼は、花園院へは妙曉という傑物をつれていつた。それは元

應二年四月、既に後醍醐天皇御治世三年目の世であつたことを思えば、尊朝三十一歳の將老に何があつたか略見當がつくような気がするのである。かくとも、彼は南朝の忠臣を以てのみ目せられる度量の器ではなく、朝権回復の構想は政治的のみならず、思想的にも相当雄渾なものであつたと思ふのである。こゝに、尊朝の資朝への改革的風貌は、次段に於ても遺憾なく發揚されている。

爲兼大納言入道召捕られて、武士どしうち圍みて、六波羅へ率て行きければ、資朝一、一條のたりにてこれを見て、「あなうらやまし、世にあらん思出、かくこそあらまほしけれ」と言はれける。

(百五十二段)

爲兼大納言は定家卿の曾孫、玉葉集の撰者であり、持明院統の謀臣であることは既に歴史が物語る所だ。生來の血氣はその歌の流儀にも反映しているし、到存一堂上歌人の境に甘んじ得るような人物ではなかつた。永仁六年三月には事に坐して佐渡に流され、嘉元元年四月に到り關東より免除を蒙り、都へ召還され、正和二年十月には伏見上皇出家によつて殊勝らしく出家して蓮覺と号したものの、生來の血氣は翌々四年十二月二十八日西園寺実兼の讒によつて再び六波羅に拘せられ、翌年二月には土佐に流され、配所の月を眺めることになる。その生涯は京洛の小天地に踰越して、華物主義をきかむ公卿家の中にあつて、多彩な波瀾に富んだものと云えよう。こゝの段は勿論正和四年再度逮捕された時のことである。尊朝時に二十六歳西園寺公朝にむく大と賭る約一年餘前の出来事である。どうやら尊朝は白うの企圖の障害として、む

く大的幕府情勢に呵諷することによつて白らの情勢の保安支柱とする西園寺實兼の華大主義的傾向に對しては痛烈な批判というよりは憎惡反感を懐いてあり、やういう彼の性格よりして、實兼を中心とする西園寺一派を獅子身中の蠶と痛感していたに相違ない。この憎惡反感が爲兼大納言入道の立場なり態度なりへの共感同調を免らすにはいられないことも推察するに難くはない。

再度の逮捕とあれば、この度は生命の保全も感じられなかつたやうに、爲兼はもとより自分の身命などに戀々とする小器量ではない。六波羅への道中も引かれ首の惡びれた様子は毫釐も認められず、節に拘する高士の風格は、氣韻四辺を劍圧して六波羅の侍共はあたかも彼を警護する従者の親を呈していたことであらう。あなうらやまし。世にあらん思出、かくこやあまほしけれの一言によつて、当時の模様か眼前に浮現できないやうな人達に文學を鑑賞する資格のない人達である。いかぬしい武士共の行装も爲兼の氣品の前には醜劣な奴隷の成儀に過ぎない。この道行きはさぞかゝ悲愴美の極致を行く觀物であつたに相違なく、引かれてゆく爲兼と、見送る資朝と、その境涯を隔てても兩者のロマン的を改革者の情熱は共鳴のハトンを以て心傳へたのである。資朝の感性は明敏にそれを感じとつた筈であり、この秋、爲兼の屍を乗り起えて前進すべき自らつ運命を最も痛烈に自覺したにも相違ない。これは決して殺されるべき予感に對し、消極的な運命觀ではない、大義に殉ずるを生けらしむとする生氣充溢した運命觀であり、あなうらやまし。世にあらん思出、かくこやあまほしけれの一語はやういふ生命感の強烈な表白以外の何ものでもない。止むに止まれぬ大和魂とは此の時の資朝の心境であつたらう。改革者としての使命の自覺とそ

の自覚の上に立つた大らかな生命の讃歌である。

文献的研究家は、色にあらむ思出」もその語の形式的類似より保元物語卷の一に義朝の言として「合戦の場に罷出でて何ぞ餘命を存せん。只今昇殿仕つて冥途の思出にせん」とある語感と比しているが、その生命感の充実度と古い、壓縮された心理的機微と古い、同日の論とけなく難いのである。

而して資朝の直情は後年高嶺の直立する主体性を更に強烈に推進せしめ、遙かに多彩な波瀾に富んだ四十三歳の短い生涯を僻遠の孤島に閉じたことは、運命の冥合と云ふか、余りにも奇き縁の糸を感じせしめる。彼のそういう短い生涯は空舟漕い宿寺親に委まされ易かつた中世人の中にあつて、自らの運命の軌道と予見し、雄々しくその線を踏んで、倒れるべきときに倒れたのであり、武門の英雄にも劣らざる悲愴美の精華であると云わねばならない。

次はその資朝の氣象を如実に物語る逸話である。

此の人、東寺の門に雨宿りせられたりけるに、不具音共の集りあたるが、手も足もねぢがみ、うちかへりて、いづくも不具に異様なるを見て、とりとりに頼なき曲音なり、尤も愛するに足れりと思ひてまもり給ひけるほどに、やがてその雲蓋きて、見にくくいふせく覚えければ、ただすなほに珍らしからぬ物にはしかずと思ひて、歸りて後、此の間植木を好み、異様に曲折あるを求めて目を盡しめつるは彼のかたげと愛するなりけりと、異なく覚えければ、鉢に植名られける木ども、皆振り捨てら

れにけり。さしも有りぬへき事なり。

(百五十四段)

貞朝の直情徑行する主体性の強烈さを見よ。優美鬱鬱な公卿西園寺内大臣公頼が、立場をかえてこの兩宿りの主人公であつたなら、彼は善時にせよ、この片輪者共に對して「ひとりどりに類なき曲音なり」尤も發するに足れり」と興味深く彼らを見守り得たかどうか。私はそれを甚だ急ぐまざるをえない。彼のような善祐セシメインシリストは一見そのいふせよに耐え得るに面をきむけてもまたたのぞくをかうか、静か上人の世つた腰には感心しても、こういう片輪者のひん曲つた肢体を凝視することには耐うべくもなぬのが公卿といふものゝ通情であらう。それを善時ではあつたが尤も愛するに足れり」の感嘆をもつて打見守つた貞朝の善時は官廷人の繊細なものとて、まづよく、寧ろ反官廷の野人の關太さすら感ぜしめられた。こういう一事に於ては彼の皇命哭的風貌を諷めるような気がする。

だが醜態なものに所詮醜態なものに他ならない。彼も陰暗に賣つてゐるこの醜態なものを見にくくいふべくは感ぜざるを得なくつた。静然の曲り腰に反時代性のモラルと認められた彼は、どうしてこの片輪者共に最も強烈な所行の苦悶を認めさせたのか。それは別に追求せらるべき極めて現代的なテーマである。尤もそれは貞朝の氣量や感性に於て一度妹になれば、その対象が照し出すあらゆる理想、映像も嫌で耐へられぬといふやうな純一性が把まねばならぬ。それらから彼の性格は厚く、何れも妥協の余地をなげれば、清濁並せむむのどりある夜豊といつたものもなぬ。富業に反接情態を感ずると息子の公頼にまで辛辣をと

は、ちりが行くような調子である。好まぬけりや哀哀まで憐れいという心理を強烈に打出しては内づかれな
い偏屈な一國舌である。歸志してあつても庭前の植木の枝ぶりとかの片輪者のイメージとがすぐ結びつ
いて懣懣感が淋寂されなく、後味が悪くてたまらない。居ても立ってもいられないほど、いらいらして気分
が落ちかねないのだ。平素の金裁趣味が我と我が事ながら雑わしく、今更のうちに自分の性格の音兵に象喩
つていた凡俗の事する美学への妥協が唾棄せられる。たまたまほに珍しからぬ物には「かす」直理は何所
し眼前平凡の中にあると思つてそれらの樹々を皆振り捨てました。これは百三十九段に描かれてある
「大方、何れ珍らしく有難きものは、よからぬ人のして興するものなり。さやうなるものなくしてあり人」と
いう兼好自身の趣味観と同一致するわけだ、寛朝の行為に我が意を得た兼好は「さもありぬべき事を」と
と會心の評に筆を結んでいる。

だがこれは趣味論というふうな生やさしいものではない。行為の熾烈さが美学の教養を越えた性
格を打出していると考えられるからである。良覚が榎の切り株を掘り捨てたのは迷いの世界のまきごとで
あったが、これは一つの悟りの世界の出来事である。「あうかなる人の目をよろこばしむるたのしみ、また
おぢきなし、大きな車、肥えたる馬、金玉のかざりも、こころあう人は、うたておろかなりとぞ見る
べき、金ほ山に捨て、玉は淵に投ぐべし。」(三十八段)この悟境を境で行つた感銘が強烈なのである。
前に述べたように、寛朝はその人間像に興味性よりも、政治的行動性の方が強烈な線と打ち出さざる
を得ない人であり、その爲に殊に太平記の無私講の所に發揮されていく彼の本性は堂上長袖の公卿よりも

自由奔放な野人的色彩の方が遙かに濃厚である。あゝいうことが事實行われたかどうかは別として、せくとも眞朝ならやり兼ねない可能性は首肯されるのである。そして、その政治性を支えたモラル・バックボーンは祥であったことを考えると、日頃愛玩の盆栽を揺蕩てたのも、私には、彼の美学というよりも、一種祥よりの悟入と云ったものが感じられてならないのである。

美学も宗教もモラルの軌範する眞実は一つであり、それが偶々兼好のモラルと冥合しての感銘ではなかつたらうか。

趣味論者にこういう文段を解釈させると、我が意を得たりとばかり淺茲固陋な趣味論をひけらかすのが常だが、この段の趣味感など上面のことに過ぎず、遙かに深い人間像が端的に描破された見事なデッサンなのである。

私はここで、彼は花園院を以て、究竟的信仰として、祥に導入する端緒を與えたほどの人間像のデッサンを眺めるものである。

近頃風靡している前衛派とかアブストラクトとか稱する繪畫やその餘波をうけて、筆道や書道の如きものまで傳統の氣品を放棄して、その風潮に奇怪な迎合的起味性を發揮しているが、あゝいうものは藝術上の植民地化現象の一端であり、自らの民族精神の傳承する氣韻的主体性―竹のしつ性格―を忘却した妥協藝術に他ならない。藝術の名に値しない、第一はあろか第三、第四の藝事であるに過ぎないと見るべきだ。あゝいう流行現象も一面の時代的専求の必然性は認められるにせよ、所詮は敗戦的植民地化現象であり、

新時代の資朝によつて感奮せらるべきものにてあると考へたい。伝統美の地盤をふみしめて毅然として直立することは長かれ思ひかへ最も特色のある日本人の主体的姿勢である。この點、日野資朝は最も典型的な日本人であつたと評することゝできるのである。

資朝の人間像を傳えたものは、徒然草の以上の三文段を描いてはなない。續史愚抄によれば資朝記という書物もあるらしいが、私はまた見ていない。太平記に彼のことがかなり生彩をもつて描かれてはいるが、傳記的なそりば見えない。真に資朝の人間性を傳えたものとしては、この徒然草の三段にしくものはなない。そして、資朝程の人物も、後世は僅かにこの三段によつてその片鱗を伺い得るに過ぎないのである。これをもしつてても、徒然草は単に文學的觀察のみから鑑賞すべき種類の作品ではないことが分るのである。

牛

今出川のおほい殿、嵯峨へおほしけるに、有栖川のわたりに、水の流れたる所にて、さい王丸、御牛を連ひたりければ、おがきの水、前板までささとかかりけると、爲則、御車のしりに候ひけるが、希有の音かな、かかる所にて御車をば連ふものか」といひたりければ、おほい殿、御氣色おしくなりて、「おのれ車やらんこと、さい王丸にまさりてえ知らじ。希有の野なり」とて、御車に頭をうちあてられ

にけり。この高名のさい王丸は、太秦どのの男、料の御牛飼ぞかし。

この太秦殿に侍りける女房の名とし、一人はひやさち、一人はことづち、一人ははふばら、一人はおとうし、とつけられけり。

(百十四段)

この今出川大臣は、古注以来、菊亭兼季と誤られて来たが、最近の考証的研究によつて西園寺公相であることが指摘されている。私も別個を親炙から、その論を支持したい。

従来この話は例の「道の尊重談」ということになっているが、兼好の執筆意図はそんことよりも、単なる牛マニヤの奇談としての興味の方にウエイトがあつたと解したい。

今出川大臣というのは、その邸宅が今出川にあつたから名であらう。そこから嵯峨へ行つた途中の出來事なのだが、恐らく龜山殿へでも伺候したのか、嵐山へ遊覧に行つたのか知れないが、兎も角も嵯峨へ行く途中の出來事である。だからこの有栖川は、太秦を通つて、その途中にある有栖川と考へるべきだ。

有栖川は舟岡山の近くにもあるやつで、多くの注者はそちらのこととしてゐるが、そうではあるまい。現にこの有栖川は存在してゐるから間違ひないと思つ。当時この川の上流が舟岡山の東を流れてゐたとも考へられない。兎もふれ、一行の行列がその辺の川の流れてゐる所に来た。これは有栖川そのものでは勿論ない。恐らく雨後のことであつたらう。その細流を渡るとき、さい王丸が俄に牛を這つて車を急がしたので、脚で蹴立てる水が御車の前板にまでサアツとはわがかつたので、車の後におとししてゐた爲則一隨身

たろう)が、けしからん牛の扱い方だとがめて、希有の童かな。かかる所にて牛を退ふものか」と語氣
荒く叱つたと云ふが、大臣殿は、急に御立腹になつて、「おのれ車やらむこと、せい王丸にまさりてえぢら
い、希有の男なり」と云ひさま、為則の頭をゴツンと車に鉢合せをさせられた。

この辺大臣と為則との關係位置や状況が省察されてゐるので具體的のことは分らない。勿論、為則の眼
からは、決が出るより先に火が出たことであつたろう。隨身として大臣のお鳥を思つ一念かうの叱言であ
つたから、彼にはお叱りを受ける苦などさらに思ひもけなない所であつた。殿の御身を案する忠言の「も
りが逆に、思ひもけなない仕打によつて我が身に戻つて来ては戸惑うばかりであつた。象目の前にいい恥
さらしをしたと感しては身置き所しなかつたことだらう。

「希有の童かな」と叱つたその言葉をとらえて直に「希有の男なり」と反撥されてゐる所に起劇の面白さ
があつても、それだけ、云われる方はやり切れぬ。常識として、誰が考へたつて当然のことと云つて
忠義立てしたのが、何故裏いか合突しがたい所である。だが常識人の對手には権威がない。公相のよう
な非常識人には通用しない。公相が常識人なら、その言を嘉納したかも知れないが、餘事は知らず、こと
牛に關しては公相はマニヤである。マニヤといふものは勿論常識の感覺の枠外の心理である。

牛に關してはせい王丸が何をせ出かそうが咎め立てはしない絶対的信賴をかけてゐる。現に水多前技に
までかけるというように、常識の立場からは高名のわざにそむいたますい御し方と云はせざるが、
信任の専門家さい王丸をればこそ常識人の知れない心遣いからそつしたまでのことだらうと大目に見られ

る。例せば、被書を最小限度に止めるためにそうせざるを得なかつたのかも知れない。そういうことあり得るのを知らず、淺はかな常識人の分別で声を怒うして、尤も忠義立てしているような露骨な言を差しさむ為則こそ自分の気持を知らぬいお為者の根性丸出しの出しやばり者と感ぜられたらう。

隨身などというものはこういう低調な心理しか働かないものらしい。何かの機会を捉えて、君の御前に他を無みすることによって自分の立場や存在をクロース・アップして見せようとするのだ。大臣にはたに才王丸非難が気に入らなかつたばかりではなく、為則のやつした心理の動きをすう敏感に感じ、それが一層彼の嫌悪感に油を注いだために、随分手荒なこともやることになつたのもあらうと解される。

一種の下町根性といふか、為則のような低級な心理の人間は、旧軍隊とか官庁や大会社あたりには幾らでも見られる苦笑もので、ウツサリさせられる人も多からう。だがこれも一種の要領のいい俗海遊泳術の一つには相違ない。封建社会にあつては対人關係が常にこういう図式に従つて展開され勝ちなのである。以上のような觀察に立つとこの頃は為則の常識に対する寡王丸の專門道尊重のモラルとの分解するのは面白い。妙味は寧ろ人間心理の働き方の機微を観察することにある。今更忠義面を替るまでもなく、平素から主人のマニヤ性をよく觀察し、理解しておき、こういう場合は黙つてゐる方が眞の隨身といふのもであらう。

所でこの牛でニヤの絶對信頼を得ていたさい王丸であるが、駭牛絵詞（群書類從一七）にもその名が記載されている所から、当時無双の牛飼であつた、雙なき馬乗りというところと、雙なき牛飼と

いふ語に對してはそれほどピンと来ないのは當時と現代との時代のズレからである。

その高名のさい主文か何故流れの中に牛を追つたか、この道については鳥國同様常識である吾々には理解すべくもない、又去つてのことであるが、丁度時代といふ、場所柄と云い、非常に酷似する逸話があるから、書き添えておくのも一興である。

それはこの段の有栖川の近くに存在する車折神社の由來である。車さきといへば、中國古來の極刑とその名を同じくし、聞くさえ膚に粟を生ずる名刑なのだか、同じ車さきでも字が違ふ。この神社の祭神は高倉天皇のころ、天下の鴻儒として詠われた清原賴業と云われる。彼が朱註渡来以前に独自の卓見から私記中の大學、中庸二篇を抽出したのは有名な話である。その賴業の廟がこの有栖川の近くにあつたのだ。

伝説によれば、或日後醍醐天皇がこの廟の前をお通りになると、牛が顛倒して御車の轅が折れたといふ。當時のことであるから、これは何か重大な怪異に感じられたのは去うまでもあるまい。又、その解救がたまたま近くにあつた賴業の廟と結びつけられるのも至極自然な沙汰である。お蔭で賴業は正一位車折大明神の称号を賜わり、これが神社の起源になつたといふ。

今日の吾々から見れば、馬鹿々々しいような話だが、これを苦笑する者は大抵の神社の縁起や由來にも皆苦笑せねばなるまい。私はそういう現代人の苦笑よりも、当然學問の神様として祭らるべき賴業が今日では南亮繁昌の神様に化けてしまつてゐることの方にある。これには誰よりも祭神賴業自身が苦笑を禁し得まいと思ふ。恐らく歷代の社主中繁昌の才敵ある人がさういふことになつたのであらう。

所で賽王丸に及らう。慶牛絵詞によれば、この賽王丸は後嵯峨天皇が臉寝の御、西園寺実氏から院へお贈りになつた牛飼だと云うことが分る。だから後嵯峨院の御草の轅が折れた時お伴していた牛飼は賽王丸であつた。とまあ私はそこまで因縁をかつきたくはないが、單なる因縁話としては興味を感じないことでもない。それはともかく、賽王丸が牛を追つたのは当時常識であつた方忌みとか、鬼門とかいうようなことも考えられないこともないが、やはり彼が牛飼のことのみでなく、この辺の道路にも通曉していたためである。とまあ常識的臆測に逃けておきたい。

次に古来考証的注釋家の頭痛の種になつていた太秦殿についてである。

賽王丸のことから今出川大臣が西園公相であることが指摘できても、それをつこの太秦殿にあたる人が誰かわからない。史上明かに太秦殿と云われた人は坊門内大臣信清(一六一六年没)があるが、それだとどうしても時代が合わない。だから、どの注書も未詳としている。

こゝで注意したいのは、徒然草は文学作品であるということ。殊にそれが隨筆という比較的制約の少ないままなジャンルに属する作品であることを見据えてかゝうねはならないことである。

世俗では太秦といへば牛であり牛といへば太秦である。今日でも太秦宮隆寺の牛祭は有名であること考えてみればよい。賽王丸が公相の牛飼であることは自明のことであり、牛マニヤの公相が今出川殿と四角ばらうすに太秦殿の飯粒をもつて呼ばれても不思議ではない。筆のすゝびの隨筆文学としては今出川殿よりも太秦殿の方が面白いのである。すなわち、こゝの太秦殿は今出川大臣を呼ぶのに少しく柳捨を交え

た假称と、私は解救したいが、どうであろうか。

こう解すれば何も信憑がこの時代から合わないとあって題を投げる必要はないし、「太秦の男料の御牛飼」などと笑止千万な誤謬説に迷げなくてもいいわけである。「この太秦殿」というような語感も、今出川大臣の仮称だと云わぬばかりの感覚がこめられていないだろうか。雁次郎ひいきの芝居マニヤに「いよう成駒屋」と半畳飛ばすようなことは、いくらでも見られるではないか、私は兼好の執筆心理もあれと軌を一にしていると思う。第百八十六段の吉田と申す馬乗りが兼好自身であることも同様な筆のすざびである。こゝういうレトリックの一寸したひねりは隨筆文学の洒脱な一面であり、筆のすざびと云うにふさわしい執筆心理のゆとりを示すものだから、考証家のように大真面目に取組まない方がいいのではないか。

この公相の牛マニヤは前半の爲則一件によつてもかなりはつきり読みとれるが、女房の名に牛の名をつけるに至つては、マニヤも余程膏肓に入つてゐる感が深い。大勢女房がゐることだから、その特徴を端的につかんだおた名の効用ということもあるが、この段のおた名は、どうも「白うるり」の如き傑作とは云い難い。マニヤ特有のおくどいこり性が感ぜられて、呼ばれる女房も決して快くは思わなかつたらう。兼好がこういう趣味に同感してゐるのでないことは百十六段のモラルに照すまでもないことである。公相を今出川殿ではなくて太秦殿の称呼でよぶ所に彼の辛辣な諷刺は十分に効いてゐるのである。

さて、こゝでぜひ注意せねばならぬことは、この公相について増鏡ではその「北野の雪の條下、彼の死んだときのことと次のごとく描いてゐることだ。

この大臣、入道殿よりは必し情おくれ、いちはやくなどおはしければ、心の底には、さのみ歎く人もなかりけるとかや、御わがの夜、御棺に入れ給へる御頭と人の盗み取りけるぞめづらかなる。御類の下短にて、半ばほどに御目のおはしましければ、外法とかや祭るに、かかる生首のいる事にて、某の聖とかや、東山のほとりなりける人取りてけるとて、後に沙汰がましく聞えき。

徒然草の注書を書く程の人で、こういう微妙に関連する話を対照せず看過することからして大きき手落であると言わねばなるまい。これほどの事件を兼好が知らずして執筆していろと考えることは妄当であるまい。この入道殿は九十四段の常盤井相國西園寺尊氏で、公相はその二男である。教書を持参する北面の下馬したからと云って追放せしめたやかまし屋であり、公儀の爲には随分人情も無視する人らしいが、その血をうけてかどうかは知らず、公相はその父よりし「情おくれ」とあるから、随分と下々に對しては情容赦なく過酷に操舞つたらしい。それに「いちはやく」とあるのも、我儘一杯に育つたお坊ちゃんによくある、感情が先立って直ぐ行動に出る型であつたらしい。爲則の言が氣に障つた時も、手荒なことをやつていろのからでも成程とうをすける。だから側近者はいつもひくひくしていねばならなかつたことも分る。あかきの水の一件も、主人を怒らせないための下心であつたかも知れない。そういう彼の周辺には、いつしかみ殺された怨嗟の濁が重苦しく巻いていたに相違ない。彼が死んでも愛惜される所が、ホツとした連中の方が多かつたのは、心の底には、さのみ嘆く人のなかりけるとかや」といふ語によつても、事實はその

通りであつたスうことか如実に物語られてゐる。それのみではよい。とんでもないことが起つたのだ。葬式の夜、誰かの彼の死体から頭を切りとつて盗み去つたという事件である。

彼の容貌は下半分が短く、目が顔の中心についていたというから、白痴美型の瓜実顔の多い当時の公卿の中では確かに尋常一様な面ではなく、ます醜貌の部類に屬すと去うべきものである。顔面親奪の家女房を手かけてできた子である。公卿にしてはとんでもない面が生れたものだと思われていたであつたらう。そんな一癖も二癖もある生首が、外道の魔神を祭る爲、その奇怪さによつて使道があるとかで、東山の辺に住んでいろ或る坊主の仕業としてきひしく追求されたが、犯人は擧げなかつた。犯人は恐らく家中のしのであつたらう。爲則のような、衆人の前に頭をぶたれるような侮辱を加えられた男なら、せめて生首にでも腹いせせんものと案外やり兼ねないかも知れないのである。それを東山の坊主のせいにしてしまつた所も、どうやら事件を有耶無耶の中に葬り去らんとする爲のデマとしか受取れない。夜陰のうちに死んだ大臣の首を切ることは外部の者の仕業としては餘程の困難もあつたらうが、家中の者が肚を合せての上なら簡単にやつてのけられそうな氣もする。怨みを合入っている者が結託して行方段なら、事に至極簡単に運べようだ。

一般に当時の貴族などの死因には奇怪なものが多い。公相は四十五歳で病死となつてゐるけれど、その性格から去つて、どうかと思われぬ跡がないでもない。死を乞感しておひえてゐるようなところがある。だが、こゝを臆説をいくら並べてみた所ではしまらない。そんなことよりも更により重要なのは、やは

リ彼の醜貌である。

ロムプロオソの診断に従えば、公相の變質者的兆候はその容貌にこそ顕著である。と之うに違いない。私は必ずしもロムプロオソ學説を信奉するものではないけれど、この点からしとうやら彼のマニヤ氣質の謎は解けやうな氣しせめわけではないのである。恐らくよく云えば公相は天才肌の人間であつたに相違ない。そしてこの今出川大臣が口注に何れも西園寺兼享としてゐるのを公相なりとするのは、尊皇令脈による形式的被謔よりも、増鏡の該條下の文は何よりも強力を實質的記録と云わねばならぬと考へざるを得ないのである。

自分が奇怪な醜貌の持主だつたから、女房にまで変てこな名をあた名するやうな惡趣味に陥つた心理には、一種の勞辱複合も多分に作用してゐるのではないか。

こつと考へてくると、兼好は必ずしも、彼に同感も同調も示してはゐないらしい。それを例の「道念頭場」と精神的に結びつけての解釋は、必ずしも彼の意圖した執筆ではなくて公相の人間像を得意なデッサン風に描きたり、またのことであらう。私には、末文が間接的ではあるが、強烈な諷刺をこめて筆使つてあることを特に注意せずにはゐられない。

この段し百八十五段の狂える久我内大臣と同じく、事實談の筆録として客觀的に読まるべきものとした方が、とうやら正しいやうである。

御隨身近友が自讃として、七箇條書きとどめたる事あり、皆馬藝、サセることなき事ともなり。其のた
めしと思ひて、自讃の事七つあり。

一人あまたつれて花見ありきしに、最勝光院の辺にて、そのこの馬を走らしむるを見て、「今一度馬
を馳するものならば、馬倒れて、墜つべし。しばし見給へ」とて、立ちどまりたるに、又馬を馳す
とどむる所にて、馬を引き倒して、乗る人死土の中に軋ひ入る。其の詞の誤つたることを、人皆感す。

この文段は兼好が御隨身近友の自讃に習つて、同じく七箇條の自讃をやつた二百八十三段の筆頭のもの
である。近友の自讃は字なる自讃のみでなく、やはり秘傳めいたものであつたらう。書家語談によれば彼
は堀河院頃の馬術の名人であつたらしい。所て自讃の面白いのは、自讃そのものではなくて、寧ろそれを
する者の心理の動き方が面白いのである。医師篤成が故法皇の前で源有房に自讃の意柱をへし折られた話
は前に書いた。その折に側近希心理というものにもサ一觸れてゐたが、このこの近友自讃の書置きも、今
それを見る由はないのだが篤成と同じく隨身という地位がさせた他愛もない側近心理に他ならなかつたて
あらう。兼好も「サせることなき事ともなり」と評してゐるようには、彼自身は道の秘奥を後世に傳へた
めといつた意志からの執筆だ、たかし知れぬが、内容的には、秘傳など銘打つに足る仰々しいものでは
なく、何んの手すやびに過ぎなかつたらう。けれども今日吾々が徒然草を讀んでゆく上には、秘傳云々と

いふようなものよりも寧ろ如上の側近心理を閉却すべきではない。この側近心理といふものは必ずしも醜劣なものとは限りは限るまい。場合によつては正成のような崇高なモラルにまで信念化される場合もあるのだ。正成を側近者と考えることは必ずしも當らないが、善いにして悪いにして要するに君主に自分の存在を認めたい、爲の氣持が多分に含まれてゐることは明らかであり、そしてこの自謙心理は対人間係が封建制下、凡そ臣下とか下僚とかの關係で君主や上役に謙從してゐる以上、多かれ少かれ人間といふものには避けられ難い一種の自己保全の欲求の表われであり、それ故にこそ本人には意外氣付かれてゐない心理的盲点であることの多いのも認めざるを得ない。今日吾々の周邊にでも随分いろいろの形で表現されてゐる自謙心理の動きが見られることはさうして耳をそば立てればいくらかでも見出すことができてやう。

一体日本という國は世宗史上無比の封建体制の華をさせた國だから、日本人の血染の中には先祖代々孝大主義的自謙心理の熾と云う程叩き込まれてゐるといふことも當然なのかも知れない。終戦後美國に於つて昨日まで生死を共にして来た戦友を隣れて戦死に告発したりする醜劣な事件は正しく孝大主義的奴隷根性であり、陰惨極まるものなのだ。やういう極悪非道な心の動きも此處にいう自謙心理とその心理作用に於いて無縁のものではなやうだ。同朋の不幸不遇を代償として自分一人いひ顔がしたい高根性は何れ日本人にのみ多いのではなからうが一旦事のあつた場合、それが臍面もなくさらけ出されて嘔然たりしめられることは、終戦後餘りにも多く見せつけられて来た所だ。何も粗目におう櫻花のみが大和魂では

なく、大和魂にはしつと鼻もちならぬ異氣が日本人の血液にまでしみ込んでおり、つくづくと人糞肥料の米食人種であることを痛感せしめられることが多い。話が脇へそれてしまったが、この自護心理はそれらの柔辣さも陰惨さも微塵もないのが氣持がいいのである。隨身ならずとも、九将相國伊通公のような子孫を否定する一種の倍り人でも、教状をものして「異なる事なき題目をも書きのせて」自護するのはお嬢である。兼好が近友の變みにならうと自護の筆を弄しても、何ら差文はあるまいと、この「兼好」をか神経をくばって非難に對する予防線を張つてまで雅氣愛すべき告白をしている。だがこの七箇條は徒然草解釋においても貴重資料であり、一面隨筆文字の興味はこつこつといふ由のたろう。

所てその自護第一條が自分の馬術についての識見淺からざることの御披露である。何れいくら近友と真似すると云つても筆頭から馬を引出さなくとも上々さうにと思われるのだが、実は兼好、馬については餘程の自信があることの表明であり、又その自護にうたわれる程の力量が認められていいのである。

近友が御隨身の融分においてなら、彼も若き日、北面の武士としての馬術には相當の修練を積み、自信もあつたしと思われる。百四十五段に同じく御隨身の仕にある泰重郎のことが書かれていゝ。

御隨身泰重郎、北面の下野入道信賴を「落馬の相ある人なり、よくよくつゞみ給へ」といひけるを、いと真しからず思ひけるに、信賴馬より落ちて死ににけり。道に長いめる一言、神のごとくと人思へり。さて、「いかなる相ぞ」と人の問ひければ、「きはめて桃尻にして、沛文の馬を好みしかば、此の相をお

ほせ侍りき、いつかは申し誤りたる」とそとひける。

(百四十五段)

これし表は一應道念尊重だが、その裏を見れば御隨身重躬の自己取分上の自讃に他ならないのだが、兼好の自讃は何と自躬の自讃に似ていることか。道に長しぬる一言、神のごとしと人思へり」というのは人々の感嘆の聲であるが、信領が落命したからこの讃嘆は最上級にまで高められている。日本人の最上級の賛辞はいつも神ということばである。神のごとしという形容は讃辞の極限をいつときかの常套語であり、日本人は感心して何かと云えば神の如しと云う。曰軍隊には愚考な神々かゴロゴローであったものだ。敗戦後はこの曾々の神々はどうなったことだろうか。みを神の光を失って闇の國へ亡命してしまつたのだろうか。上へみても民主体制下にはもう神の称呼は流行しないものと見える。だが今日ですつ、サしても日本人が感嘆した時の聲は神のごとしであり、神々か飛ひ出す可能性は充分にある。実に日本行末の末まで神國であり、八百萬の神々がケチな籠居り争いをやらざるを得ない國柄である。

兼好は天塚屋振尊の後裔、立派な神孫の一人である。神の如いの賛辞を受けてもいい資格のありやつな人である。けれども彼が予言した馬乗りは信領のようにコロリと死んでしまわなかつたものと見えて、人々は感心し、嘆賞はしたが、神の如しとまでは過當な言ひなかつたものと見える。

所か人間というものは予言の適中した場合諷あるだけでは氣のすまないものである。奇術や手紙にでも必ず種あかしを欲しがるものなのだ。そして種を明されると、何だそんなことだつたのかと、今度は逆に

軽蔑したりするから始末におえない。人間とは元素を人々を勝手なものをであらう。だから種明しはやら
ないで、口をつぐみ、しかつめらしく秘伝としてしまつておく方が賢明なのである。中世に秘伝が流行し
たのもこのうら人間心理のからくりを洞察してからのことであつたらう。

重躬の場合も「さて如何なる相ぞ」と人の問ひければ「……」とあるように、俗人の質問は何時もこうで
ある。俗人なら下とし、天台座主明雲も自ら兵仗の難やあると云つて「よろ」と答へられると「如何な
る相ぞ」と質したくなるものだ。だがこの質問に對して重躬は中世人一般の秘伝心理がそれほどなかつたも
のと見えて、彼は意外あつさりと種明しをやつてゐる。「キはめて桃尻にして、沖又の馬を好みしかば、
この相をおほせ侍りき。いつかは申し誤りたる」

何のことはない。至極当然のことを当然だと云つたまでの話である。問ひた方も何だぞんぞんことだつた
のかとよきれ頼てあつたらう。そんなことなら俺も危いなあと思つていたのだが、というふうな連中も必
ずあるものだ。たかこにて注意したのは種明しの内容の合理的説明のみではない。勿論その合理性を大
いに強調して兼好の所謂道に科学的な精神に科学的な美衣を着せて讚する資料にして私には異存はない。やりたけ
ければ勝手におやりなさるかよかろうと思つてだ。所でさういうことよりも私に興味をもたれるのは、
やはり重躬のほんた最後の一言「……」いつかは申し誤りたる」の一言にこめられてゐる御隨身兼重躬の自
護心理である。これを見逃しては此の文段の面白さは色も香もあせ果ててしまわないうまで大したこと
もなささうだ。だから重躬の合理的な精神を強調するのも結構だが、それを強調したら必ず裏面から彼の自

護心理に隨身という中世的人種の風貌を併せて觀察してほしいまでの話である。だがそれのみでこの文段の解釋は十全なのではない。この文段から考えねばならぬことはまたあるのである。それは同じ觀念に立つて予言の相手の、北面の下野入道信願のことも考えて見ねばなるまい。彼は何故挑虎という自らの缺点を無視してまで沛艾の馬に乗ったのか。彼も亦北面の武士であり、馬に対する自分の適性位はちゃんとおぼえていねばならぬ立場の人である筈だ。重寔は信願が沛艾の馬を好んだと云っているが、好んだかどうかは俄には判断することはできない。唯彼が挑虎の癖に平素から始終、沛艾の馬にのみ乗っていたから、他人の目には好んだとしか思われなかつたとも考えられよう。城陸奥守泰盛の如き双なき馬乗りと称せられた人物でも百八十五段にある通り「いさめる馬」は用心から乗らなかつたという。双なき馬乗りとしての名前は勿論そこから来るのであるが、信願の場合は挑虎という騎手の致命的又奥の意識よりも、恐らくは北面という信賴の地位の自覚の方が遙かに強かつたのに相違ない。あの男は沛艾の馬を乗りこなすという定評を得た心理はやはり一種の自誇心理の姿態に他ならぬ。それはどりもろろと彼は名騎手であり充分にお役に立つ武士だということを意味する。だがこれは孔子の所謂血氣の勇であり、小人の虚張心がうけた奮勇でもある。こういう勇氣で真寔の忠義は盡すべくもない。眼先の見せかけが勇ましいばかりでその内実はいつも危険にさらされている。おすおすして居ねばならないのだ。世間には自誇心理の悪といハツタリからその能力をいくせに彼に重要ポストに坐りたかり、そのポストに坐りえたのはいいものの、いさ実力を要求された時には虚勢をばってふんぞり返つても、内ビクビクもので冷汗をかいてる手合

きよく兇受けるが、信賴の桃尻はさういう手合の戲画に他ならない。それは画餅以下の悲惨な戲画である。落馬して落命する醜をさうすのは少く眼のある騎士には餘りにも見えすいていたことであつた。血みどろの道化話はこのようにして生れるのだ。

常盤井相國出仕し給ひけるに、勅書を持ちたる北面より参りて、馬よりおりたりけるを、相國後に、「北面なにかしは、勅書を持ちながら下馬し侍りし者なり。かほどの者、いかでか君につかうまつり候へさ」と申されければ、北面をなたれにけり。勅書を、馬の上ながらさうげて兇せ参るべし、おるべからずとぞ。

(九十四段)

信賴が北面として上の御期待に添い得ず、ものの用にたうなかつたのは常盤井相國に下馬した北面と同断である。この北面も下馬して首を斬られたが、相國は下馬の一事によつて彼が任に耐えなことを明察したのは重躬の予言と同じである。信賴は自らの桃尻によつて馬脚の下に醜態をさらした。因果をなだせば自讃的虚勢のなせる心なわがであつたと解釋し得るのである。

秦氏と下毛野氏とはいわれも隨身とか北面とか宮廷護衛の兵仗の家であり、その技量は常にお互いを批判の立場に於て考へられていたということも事件の背後關係として一應念頭におくべき事柄である。

さて兼好の場合はどうだろう。彼の予言通り騎手は泥土の中に転び入つて、見ていた人々は皆感嘆したのである。こゝで兼好は一應祥の座に祭り上げられねばならない筈であつたらうに、彼の自讃の辞はこゝ

で切れてしまつて重躬のようには続かない。では、人々は唯口々に彼を賞讃したのみに終つたのか、或る注釈家は「何故落馬すると見たかについて、何も説明してないのもし兼好の都会人的洗練さが見られるように思ふ」と云つてゐるが、そうではあるまい。例の心理からして人々は兼好に対しては必ずや秘伝の公開を要求したことであろう。だが自讃の文は筆の上でそれには全然觸れていないといふまでである。触れていないからさういふことがなかつたとは云えないのだ。私には兼好が賞讃の声と共に何故にの質問をよびながら苦笑してゐる光景が見えるような気がする。所が彼も亦人々の要求に應じて我位の公開をやつてゐるのである。それは次の二段を讀んでみるかいい。

城陸奥守兼盛は双なき馬乗りなりけり。馬をひき出させけるに、足を揃へてしきみをゆらりと趣ゆるを見ては「是はいさめさ馬なり」とて鞍を置き横へさせけり。又、足をのべてしきみに蹴当てぬれば、是は鈍くしてあやまち有るべし」とて乗らざりけり。道を知らざらん人、かげかり恐れなんや。

(百八十五段)

吉田と申す馬乗の申し侍りしは、馬ごとにははきしのなり。人の力、争ふべからずと知るべし。乗るべき馬をばまづよく見て、強き所弱き所を知るべし。次に轡、鞍の具に危き事やあると見て、心にかかる事よらば、其の馬を夫すべからず。此の用意を忘れざるを馬乗とは申すなり。これ秘伝の事なり。

と申す

(百八十六段)

人々に我々の公聞を知られた著者は、まづ鎌倉武士切つての名騎手、城陸頭守兼盛の名をあげて、彼の馬術の秘訣を披露する。向のことはない道は近きにある。深遠高大な哲学体系など何もない。「乗るべき馬をよく送るべし」の一事につきまゝ。そしてその乗るべき馬とは、沛々の馬に乗るな。鈍馬に乗るな。ということだ。信頼はより挑発してなくとも、この禁戒を犯しているから、どうせ後なことはないに違いない。これか馬道の奥の手だと言う。人々は聞いて、そんなことなら常識じやないか、もつと深奥な秘意を話していたらいい、と、甚だ喰い足りない不足面であつたらう。そこで兼好は懇切丁寧に足りない言葉を附加して更に次の如く説明する。ここの本文を依に口語にしてみると次のようになる。

「あなた方は乗馬の経験がないから、簡単にお考えになるのも無理はありませんが、馬ほどの馬たつて手強いものですよ。人がいくら力強いといつてカブくでは馬を統御できるものにはありません。力で力を制しようとするから人と馬と対立して二音は合裂しうまく行かないのです。馬術の妙味は、表上人なし、鞍下馬なし、人と馬とが一体不離になつたところにあります。これが馬術の妙味です。」

このあたり、愛読書である老荘のモラルを模倣なく借用して、道の極意に幽玄の修飾を施すのは如何にも兼好らしい諷刺法である。だが秘意は既に泰盤によつて道破されている。実の所通する何ものもないのであるが、人々の衝動を身振っている彼はやう云つたまてのこと。彼は更に続ける。

「要するに乗るべき馬をよく送ふこと、送んたら、その馬の長所と短所をつきとめわねばならない。どんな馬にたつて人間と同様、必ず長所もあれば短所もあるものですから、これを知っていることが大切です。」

その次は馬具即ち整とか、鞍とかに不具合な身、手落のところはないかと充分に點檢し整備すること、これは馬の善悪でなくて騎手のなすべき大事です。一寸でも不工合を感じる身があれば、それに乘つて走つてはいけません。これだけの用意を怠れないのと、馬乗りの秘訣とはさうのです。極意だからわいせれ誰にでも伝えらるべきものではありませぬぞ、これであの男が何故馬馬したか分つたでしよう。もし一度あの馬と騎手とをよく見てごらんをさい。成程とお分りでしょう。

注釈書によれば「吉田と申す馬乗」は伝未詳である。如何に考えても古書にはさういう名騎手の名前も伝記し出て来ないので、書いてあるのは徒然草の百八十六段だけである。考ふる手だてになる言物・公卿補任とか尊卑分脈とか、さういった種類の古書がないといふことであれば仕事にならず伝不明と手を上げるのが考證家とさう苦なのである。豈囀らんや、吉田は兼好自身ではないか。北面の武士吉田兼好その人である。徒然草の筆と教るのは兼好法師であるが、その兼好法師は曾て若き日は吉田兼好と名乗る北面の武士であり、馬術の名手であつたことは自讃の第一條に、若き日の身成に磨かれた炯眼を記つてゐることとにらみ合せると至極自然に納得されるべきことだ。即ち百八十六段も実は兼好自贊の筆であり馬術は彼にとつて餘程自信のあつたことを認めないわけには行かないのである。「これ秘藏のことなり」といふ彼の語氣と「いつかは申し談りたる」という重躬の語氣とを比較して見るがよい。この吉田と申す馬乗りが兼好以外の誰に考えられよう。そしてこれは又、今出川大鍛が太桑殿であるのとも類する隨筆文学の巧妙

さつけたじ首のような自己批判か、儼かに断定できまい。少くとも在は、恐らく後者は重きをおいて、主観内省の意として解釈せらるべき言葉ではなかつたかと感得する。又この文段に於ける水又坊主に対しては、群衆の如く主観没却で嘲笑し得なかつた如く、百八十八段の早敷坊主への辛辣な諷意も兼好自身の主観内省への内省が成熟せるによつた自らなる筆の流露と云わざるを得ない。それを單なる辛辣な諷刺とのみ解するのは、ことを餘りに平板に解するものではないか。發茂の鼓馬場の喧騒を霧田象の中に、兼好の炯眼はよく自己内観への妙極をも把握してゐたと、その深遠な洞察の心理的根柢にまで觸れ得なくて、該文段は眞実の解釈も鑑賞もあり得ないのである。

悲懷從中起

潘岳小傳(中)

原田憲雄

五

潘岳が故郷の中年で、失意と、無為と、焦燥と……それらさまざまのものが混り合つた感情を、もておまじながら、日を送つて、いるうちに、世の中の形勢が、思ひかけない方向に、轉回しつゝあつた。

まず、太康十年(二八〇)十一月丙辰の日、尚書令で河北の成侯なる荀勗が死んだ。

出征をいとう賈充のために、その女を皇太子に結びつけることを案出し、また、吳の平定に功のあつた深華を、幽州に遣いやつた。あの荀勗である。皇帝の臣であるよりも、賈充の臣であるといつた方がいゝような男であつたが、武帝には不思議に信任された。人の氣を見るにさとい彼は、帝の、いわば泣きどころとしてもいふべきものを、ヒタリと押えていた。

中書から尚書に遷つたとき、その榮轉を祝いは来た者にもむかひ、苦り切つた鞭を見せて、吐きすてたものである。

「おれの風風地が奪われたのに、諸君は、何故かめでたがるのかね」と、中書に遷つたとき、中書は機密を扱う職。荀勗が、皇帝の感情を思ひのままに吐きすさぶためにも、外部からの思ひかけない聲の皇帝に通することをおぼせぐためにも、最も便宜な位置であつた。

「おれの風風地とは、竇の山といふほどの意味である。」

舞台上踊るよりも、裏で人形をまやつることを好んだ彼は、尚書の空名より中書の実を高くしたのである。彼にとつては、皇帝はもとより、彼を隨使した晉元すら、おのれがその絆を繰る儻儻としかうつらなかつたのかもしれぬ。

おそらく彼は、目をとむようとするまわに、長く夢に描き、せつせと準備して、暮を引き開けるところまでこきつけた、その舞台を見ずにこの世を去らねばならぬ運命を、おのれのために俤んだことであろう。人形師を喪った人形の動けなくなるように、武帝は、荀勗の死ぬ前後から、病交の入となつていた。英明俊敏を以つて人生に歩み入り、放蕩耽溺を以つてその歩みを終局する、中夏の帝王の常套を、滞りなくこの皇帝もまた、襲つていたのである。

甲申の曰、皇族たちの人事に大異動がよつた。目の上のこぶである汝南王亮を中丞の政局から遠ざけるために、皇后の父楊駿がはかした策謀である。亮は侍中・大司馬・假黃鉞大都督の職名を與えられて、許昌の地に去らねばならなくなった。

皇孫の通か、この異動で、廣陵王となつた。通は武帝が皇太子に賜うた才人謝玖の腹である。才人は女官の位で、晉代にあつては、三夫人・九嬪の下に、美人・才人・中才人があつて、爵は千石以下になせうえた。

通が五歳のとき、夜、宮中に失火があつた。武帝が、樓に登つて見てみると、通がちよこちよことして來て、帝の裾を牽いて閣中に入つて、いった。

「夜中のさわぎだから、よくないことがあるかもしれないよ。天子さまは、人の目につくところには

あまな

帝は、この幼童のこと任に、すっかり感心させられてしまった。

「遷のやつ、なかなか利発なところ、漢の名君の宣帝に似ているぞ。」

大勢の臣下は、このうらやま、帝はほめた、えたものであろう。以来、天下の人々も、適には甚だ期待する

と、あまな

帝は、太子が不才で、とうていおのれのあとを嗣いで國事をとりさばいてゆくことの難しいことを、知

っていた。けれども、太子の子の適が、こんなりに、こうなのだから、まもなく攝政として、父の不才を補

つてゆける、たうらをかえ、太子をたあさせようとはなかつた。

翌年春正月一日、太照と改元した。

司空侍中、尚書令の衛瑾の子、宣という男は、繁昌公主の婿であつた。酒のみで、過失が多かつた。衛瑾

をにくんで、いた揚駭は、これに目をつけて、侍從たちに言いそくめ、共に宣をそしつて

「あ、という男を、婿にしてあげたので、公主さまが、お可哀やうです」といふので、宣の心

を、武帝の心をうごかし、公主を、宣の手から奪いかえさせた。これには、瑾も、慙愧し、恐懼し、つ

いに居たたまれなくなり、老婦の伶に堪えずと、辭表を出し、隱居してしまつた。

三月甲子の日、右光祿大夫の石鑿が、司空となつた。

このころには、帝の病は老篤の状態に落ちた。しかし、千林萬歳の後のことについては、何ら帝の口から命で出されないう、晋の建國に力のあつた幼勳の老臣たちはほとんどすて、死し、死せざるものは、簡璿の如く、謀られて朝より去つた。帝の病牀に侍するものは、侍中車騎將軍の楊駿のみで、他の大臣は、いおれも、帝の側に在ることを得なかつた。楊駿は、この夢を更に堅固にするために、思ひのまゝに側近の人手を異動した。

潘岳が、再び中央の政局に、結びつきを持つたのは、このころである。

恢復すべくしる、帝の病勢も、時としてゆるむことがあつた。意識のしど、た帝は、側近の臣が多く、さきにあつたの命してそこにあらせた者と異なることを知つて、キツとて

「どうして、こんな勝手なまねをするのか」

と楊駿に聞き詰めたものである。

さすがに、このまゝではいけないと察した帝は、うちに中書に詔を作らせた。昨年の末、楊駿によつて中央から追われた汝南王亮が、たお仕地に出發していかつた。帝はこの亮を、そのまゝ朝廷にとつめ、これに人望のある朝臣数名を擇んで輔佐とし、審制すれば、楊駿もつゝしむてよろうと考へ、その旨を詔中にしたゝめさせたのである。

中書が詔を持って下つてくると、そこに駿がいて

「さうと見せてくれ」

ためらう中書に、進いかけ

「おれには見せるなど、おっしゃったのかね」

やみなく詔書を借すと、楊駿はしまいまで讀んで、そのまゝ、ふところに入れて去った。中書は、あわてふためいて中書監につげた。中書監の華廩は恐懼して、たたちに自ら楊駿を訪ねて、詔書を返すようにたのんたが、楊駿は、どうしても契えなかつた。

さうこうするうちに、帝の意識がまた私れてきた。それを待つていたように皇后が奏する。

「殿に、政を輔佐させましようね」

帝は、コクリとうなずいた。

夏四月、辛丑の日であつた。皇后は中書監の華廩、中書令の何劭を召し、口ずから帝旨をのべ、詔書を作らせた。楊駿を太尉・太子太傅、都督中外諸軍事、侍中、録尚書事に任命しようとするものである。詔書ができると、皇后は、稟と劭とを立ち合わせて、帝にささげた。帝は、詔書に目をやったまま、何もいわない。

い、ほう、汝南王亮に對しては、早く任地につくように、との督促が行つていた。

しほうくして、また意識がもどつたとき、帝は問うた。

「汝南王は来たか、またか」

「まだ、おいてになりません」

それが左右の者の返事であつた。

帝はそのまゝ意識を失い、再び醒めることはなかつた。乙酉の日、含章殿で崩じた。五十五歳であつた。

六

蓋岳は、楊駿が太子太傅となつたとき、太傅主簿に任ぜられた。あまたの職を兼ね持つ楊駿が、それだけの実務を自らとうことは不可能である。次官が命をうけてその處理にあたることは古今を通じて同じである。

楊駿がなせ、蓋岳を起用したのであろうか。岳の妻の楊氏と、駿と、血縁の相通うものがあつたのかもしれぬ。だが、恐らくは、曹充が太尉の時、その主簿として發揮した実務の才と、やゝして何より、おのれの仕える者に対する毛並のよさ、それが買われたのであろう。

武帝の死により、皇太子が皇帝の位に即き、大赦し、永熙と改元し、皇后を皇太后と尊称し、妃の賈氏を立てて皇后とした。

楊駿は宮中に入り前殿なる太極殿に坐りこむ。武帝の遺骸はこゝで瘞ウツケされることになつていたので、六宮の人々がこゝに出て帝のひつきにわかれをつけた。當然、殿を下るべき楊駿が、この時に及んでなお殿を下らず、かえつて虎賁近衛兵百人におのれの身を衛らせ、石壁と中護張劬とは詔によつて山陵造營を監督することになる。

汝南亮が武帝の死を聞いて駈けつけた。けれども、帝の柩の傍には武装の虎賁を控えさせて楊駿がいる。汝南王は顔色をかえたが、宮中には入ろうとほしなかつた。いや、入ることができなかつたのだ。彼には楊駿がおそろしかつたのだ。楊駿は、汝南王がたあううのを知りながら、「入れ」とけしわをかつた。汝南王はついに、大司馬門の外で哭したまゝ出て、城外にみおのれの率いる軍隊をといひ、大幕かすんでから任地に赴くことを許されるように上表した。

「汝南王は、撃兵して、あなたを討とうとしています」

汝南王の行動を、そんな風に、楊駿に告げる者がいた。楊駿は汝南王がみおのれをみせていることを知っていた。けれども、それだけに汝南王がどれほど自分を憎んでいるか、ということも知っていた。そして、汝南王を愛しない者が、楊駿を憎むかゆえに、汝南王が兵を撃ければ、その下に走る者が天下に満ちていくことを、彼は、感じと、ていた。「先手をうたねば……」みおのれ、あせつた。楊駿は、手段をえらばなかつた。太后につけて、太后から、新帝にみおのれを詔を告めさせ、石鑿、張邵に命じて、山陵を作るための兵力をひきいて汝南王を討たせうとしたのである。

張邵は楊駿の甥であるから、命をきくと、たちちに兵をひきいて、石鑿をうなかりして、汝南王を討ちにむかふとする。だが、石鑿は、「汝南王にそんな異志のあるはずがない。何かのまちがひだろう」とやういつて、かえつて、張邵をひきとめた。

楊駿側の動きを知つた汝南王は、「どうしたもののたろう」と、廷尉の何勳に相談をひける。

「今朝、野とにもあなだに期待している。あなだは、それでもまた、あいつを討とうとせず、あいつに討たればせむかと、心配しているのか」

何處に、こうまで勸まされても、亮には揚駁を討つ決心がつかない。たぬら、たぬら、たぬら、たぬら、夜に入つて、手兵のみたす、えて、駁せて任地の許昌に赴いた。まずは安全を保ちえたわけである。

汝南王と揚駁とのこうした、いささうを最も憂えたのは、揚駁の弟の揚濟と、甥の河南の平である。本城であつた。兩人は、揚駁に、汝南王と中央によひしとし、二人で力を合せて國家の、とにあたるべきだと説いたが、揚駁はきかない。揚濟は、それではせむをすてす、尚書左丞の傅咸や、侍中の石崇に、自分の意見とのへ、彼らの口から、揚駁の齟齬とうをかすことはそのへさせたか、揚駁は、そのいすれにも、耳をかそうとはしなかつた。

五月辛未の日、武帝を峻陽殿に奉つた。

揚駁はこの時機を利用して女のに乏しい人氣を集めようとして、百官の封爵を進めることを帝に進言した。左將軍の傅祗か、揚駁に書簡を送つて、「帝王が崩御せられたからといって論功行賞をなすということとは未だ嘗て聞いたことがない」ときびしい論調でのへ、思い止らせようとしたが、揚駁は従わなかつた。丙子の日、詔が布かれて、中外の群臣は位一等を、喪事にあずかる者は二等を、増し、二千石以上のものはみな関中侯に封せられた。同時に、揚駁は太傅、大都督となつた。政治、軍事の一切が、彼の掌中におかれたわけである。

楊駿には、ほとんど憚るひとがなかつた。あれば、これを殺したり、遠ざけたりしたからである。だが、たゞ一人、憚つて、しかも遠ざけないひとがあつた。賈后である。二世皇帝の惠帝は暗愚の人である。武帝の最も心痛したのはこのことであつた。その武帝在世の初、和嶠が帝の決断を促すために、こういつたことかある。「皇太子は、淳古の風があまりに存る。だが末世、偽の多い今日においては、陛下のあとを果しておつきになれらうかどうかを、わたくしはお察し申します。武帝はたまりこんでしまつた。他の日、荀勗と武帝の間に侍したとき、帝が「太子が二三日前にやつて来たが、いくらかよくなつたように思う。卿らで一度たすねて、世間のことなどについて話してみないかね。」還つて来たとき荀勗らは、「太子の明識雅度は、まことに仰せの通りでございます。だが、和嶠の答は「聖質は、以前とことなるところはござらぬ。たゞ、武帝は、むつとして立つた。太子の進歩を確信するなう。頑固な奴いやな」と笑える。武帝である。だが、父親には、へつういと分つていても荀勗と同じ答えを、和嶠の口から聞きたかつたのだ。惠帝が位に上つたとき、和嶠が太子遜に従つて帝に見えた。まきのことを根に持つていた賈后は、帝にこゝろ聞かせた。「卿は、以前、わたしを皇帝としての仕事にたえまいといつたが、今はどうかね。和嶠は答へた。「わたくしは、先帝におつかえしてゐたころ、そのようなことを申し上げたことかございます。わたくしのことのは、當りないのは、國家にとつての幸福でございます。」

和嶠なればこそ、見出した血路であつた。一歩あやまれれば皇帝非謬の罪に陥つて九族誅戮をまめかれぬ。和嶠は答へ得たな。衣冠の下、淋満たるものかあつたであろう。賈后は、かくのごとき女性であつた。

帝は、詔命を下すにも、つねに楊太后に呈示した後に行った。楊太后は、楊駿の女である。楊駿は太后を通じて帝を意のままに操縦できるはずである。それが必ずしも意のままにならないのは賈后のせいだ、と判断した。この判断はほとんど當つていた。

楊駿は甥の段熲を散騎常侍として機密をつかさどらせ、張劭を中護軍として禁兵をつかさどらせ、この二重の垣によって、賈后の権略を防ごうとした。

賈后と楊駿とのこうしたあつれきは、潘岳はすっかり當惑した。賈后の父の賈充は、潘岳が官界に出て始めて就いた上司であらうばかりでなく、潘岳が今日の地位をきつく下地をつちかつてくれた人である。その賈充が死人たばかりに官界の外に放り出される憂目も見た。賈后には親しみはあつても、うらむべきすじはない。たまたま、楊駿の主張となつたばかりに、賈后とけ敵對する立場にあるふのれを見出して、何とも名狀しなない昏迷におちいらざるを得ない。

賈后、楊駿の對立が遠からぬ將來に不祥の事を導くであろうことは、ほとんどたれの目にも明らかであつた。現に、楊駿の縁族である弘訓の女府の蒯欽が、あまりに駿にむしむし直言するので、まわりのものが案じると、「楊駿はわけのわからんやつだが、罪もな、人間を殺すほどではない、おれなども、さしあつたや、疎んせられるくらいのことさ。あいつに疎んせられたらしつげの幸。でなければ、あいつの親類だからといつて殺されるよな」ともあろうよ」といつたこと、それから、匈奴の東部の出身の王彭なる人が楊駿に見出され、司馬の職につくようにすゝめられたとき、逃げ出さず、その友に「むかしから、一姓

より二后を出して末のよくいつたためしがない。まして楊嬪はつまり人間ばかり近づけ、骨のある人間は遠ざけ、権勢をほしいままにしている。あれで長つゞきのすまはずはない。海を越えてでも、あの人を十けてあかぬと、禍がかかろにきままっている。どうしてそのまわきに應じたりできよう」といったこと、などか、人々の間で語られているのである。

潘岳もやいな話と耳にし、聞いてはなかつた。そのことはの鏡さる、たれよりも痛切に感じていた。にもかかわらず、彼には劇飲の直言を學ぶ要無しと、王彭の明察を學ぶ決断しなかつた。もうしばらく事態を見極めた上で……「そう考をテがら、うかうかと目を送りむかえするはかりであつた。

事態は……しかし、彼の思わくよりもけるかに速かに、劇飲や王彭の予言した方向に進行していった。

七

賈后がまた太子妃たつたとき、嫉妬にかられて、宮中の女性を手ずから殺したことが一耳ではなかつた。太子の妾かみごしつたとき、怒りにかられて鍼をその妻に擡げうち、その刃に当たつて腹の子が死んで出たことかあつた。このとき、さすがに竊太子武帝も激怒して、賈后を金墉城に檻禁し、太子妃たることをやめさせようとした。

荀勗や馮紇らか「賈后はまたお若うございます。嫉妬というものは、女にはつきものの、もう少し年を取られたら、おのすから、なかりましように」となためる。それでは武帝の怒りはおさまらない。

「賈公はわが國にとつては大勳ある人です。妃は、その人のむすめ。やまもち沙汰があつたからといつて、その先徳を忘れることはいかかですよう。」楊后がこうとりこしたのてやうと、武帝も思ひとまりたのであつた。賈氏が太子妃たることをやわさせられなかつたのは全く楊后のおかげであつた。楊后は、今後こつたことのないようにと、ことあることに賈妃をいまいめるのたが、妃の方では楊后がおのれを救つてくれたことには氣づかず、かえつて、楊后が武帝に自分とわたくし告げらるゝたと推して、恨んでいた。夫の太子が位に一つくと、賈后は口や太后には、よかとしてつかえようといふしなかつた。賈后は政事にも口を出したかつたが、それがつねに、太后の父楊駿に抑えられる。楊家に對する賈后の怨みは幾重にもかまゝつていたのである。

新年を迎えて永平と改元した。西暦でいへば二九一年である。

賈后は、楊駿に對して怨みをもつた。よく思わぬもの、のうまから利用できさうなもの、と数々つた。さうして、まず目についたのが殿中中郎の孟觀と李肇とであつた。ふたりは楊駿から輕んぜられていたため、楊駿とあの位置にゐてたくのは國家を危うくするものだ、と、かけて批判しあつていたのである。賈后は宦官の取締を下る、黃門の董猛にさしかわして、孟觀・李肇と共に、楊駿を誅し太后を廢する計画を立てさせた。ふたりは、たゞちにこれに應じ、李肇は汝南王亮と動かし兵を擧げさせよう、と、その任地に赴いた。汝南王はこれに來ろうとしない。李肇は躊躇せず、都尉荆州諸軍事の楚王瑋に向つて、夏后の意を報じた。楚王は、欣然として承諾した。

まもなく楚王から、陛下にお目通りをされた、との求めが中央に至った。揚駭はかねてから楚王とよびよせて懐柔しておきたいと考えていた。けれど、どうもその腹の中が十分につかぬ。上、楚王が愛鏡であるため、とつみついていたとこもあつた。向うから来たいというのだ。としか、あつてみてやる。そう考へて、楚王の入朝をゆるした。

二月し下旬に入、た葵酉の日、楚王璣と都督揚州諸軍淮南王允が未朝した。

それから十八日目の三月辛卯の日、孟轍と才學とが皇帝に言上し、夜、詔をよび、揚駭討伐が決定された。「詳及」その討伐の各目である。たたちに中外に戒嚴令がしかれた。使が四方に走る。

東安公繇は殿中の四百人をひきいて揚駭を討つ。楚王璣は司馬門をかためら。淮南の相劉頌は三公尚書として殿中に屯衛し、いつでも斷獄を行ふ態勢をととのえる。

寫したのは揚駭の鋸の段廢である。彼は揚駭が皇帝の近邊に及揚勢力が近づくことを防ぐために常に駑常侍として機密をへかざるとるよりにおかれた人物であった。その段廢が、全くほどこすもなほと、ひそかに、すはやく事を運ばれているのを、このときになつて目の前に見せつけられたからである。

彼にのこされてゐるのは、言朝以外はない。

揚駭は子ともない人でござります。そういう人が、どうして詳及し、うするわけかございませう。

陛下よ、どうか、事情と密をへして下さいますように。

段廢は答へた、た頻に油断をしたたせから帝前に疑いて訴えた。帝は答へない。

同じとき、揚駭は昔爽の故府にいた。長府は武庫の南に在る。

宮中に空があらうと聞いて同座の家官にはかつた。太傳主益の朱椽かといふ。

「今時今、宮中に空があるというからには、様子はわかりまゝである。宦官めが甕右ののぶ入たりとやりあつた謀に違ひありません。公には不利な情勢です。まず宮城正南の雲龍門を焼きましょう。火を思たらぬらばいゝくりすうでしよう。それなら、首謀者の首をむせというのでつ。そうしてあいて東の萬巻門を聞き、東宮と外宮の兵をこちらの指揮下に入れ、皇太子を擁して宮中に入らうのです。これで、多分、殿中の連家は震い懼れて、まゝと主謀者を斬つて奇越すてしよう。これ以外に手は有りません。」

実に思ひ切つた。しかしすぐれた方法である。だが、駭には、これを直ちに法行するだけの勇氣がない。雲龍門は、魏の明帝が造つたものだ。工費が莫大なものだ。それと焼くわけにはゆくまい。これを聞いた侍中の傳祇がすかさずさつた。

「尚書の武茂と共に入つて、狀勢を慰めてみまうよ。」

それから群僚に向つて、諄いかけるように

「空が起つたというのに、宮中を空にしておくわけにはゆくまい。」

「というやいなや、揚駭に一掃して、さつと階下に下りる。他の人々もさつと走り出た。武茂はほんやりと坐つたまゝである。傳祇はふりかえり、さつ

「君は天子の臣ではなからうか。陛下かどうしていらつしやるか、わからぬのに、どうしての人むり坐つ

ておれらのか」

武茂は、びくりにして、立ちよがり、目かきめたように、傅祇のあとを追った。

楊岐の黨の左軍將軍劉豫は兵をつらねて門前にいた。右軍將軍裴紳におつたので、「楊太傅はどこにゐるうら」とたずねた。裴紳は「さつき西掖門のところまで、公が車に入って、二人がをつれて西の方に出られたのを見たかね。あさむかれたことに気がつかない劉豫は、そわそわして「それいぢや、俺はどこへ行けばいいだろう」。遂射のところへ行きたまえ」裴紳はソツケなく言い捨てた。裴紳のことは、劉豫は、兵とすてて去った。

刻々に楊岐に不利となる報告が宮中に到る。じつとしておれらはいのけ皇太后であった。裴紳が劉豫の軍を兼ねて指揮し、萬春門をかためあつた、と聞くと、もう前後をかえりみらいとまはなかつた。席に「太傅を救う音は當あり」としたため、兵につけて、城外に射させた。

その兵は遂射たためうちに賣后のもとに運ばれる。

「太后も及亂にかわつた」賣后は宣言した。

殿中の兵が出て楊岐の府を焼き、閣上から弩手が楊岐の府にむかひつていしゆを射かける。楊岐の兵は逃げ場を失つてたちまち、はたはたと焼けてゆへ、楊岐は馬屋に逃げ込んだ。とらちで首をけわられた。孟觀らは楊岐の族黨をことごとくとらえ、死刑に交した。その数は、數十人に上つた。

太傅主法の朱播己もとらえられると同時に殺されていた。同じく太傅主法たる潘岳も同じ運命をたどる

はずであつた。だが、不思議に彼にまめかされた。それは楚王璵の長史公孫宏のおかけであつた。

公孫宏は幼くして両親をうしなつた孤獨な寒書生であつた。河陽縣でほろほろと暮してゐたことであつた。そのころ、潘岳が河陽縣令となつてこの地に赴任し、公孫宏が文學音楽にすぐれた才能をもつてゐることを聞いて、呼びよせ、そのの不遇をなぐさめさうと夜として厚遇し、詩を唱和したことがあつた。公孫宏はこのことを非常に徳としていたのであつた。

公孫宏は楚王長史として刑罰を主務としてゐた。揚駿事件をまつたつてゐる時、死刑者名籍の中に潘岳の名を見出すと、彼は調書と綿密に調べてみた。潘岳は事件の当夜急用があつて他出し、揚駿の府にはいゝなかつたことがわかつた。『これなら何とかなうだらう』公孫宏はそのまゝ楚王に會ひ、

「潘岳は名は主経でも、臨時奪いてす、事件の當時も揚駿に近づこうとほしていません。揚駿の堂人ではない證據です。」

こうして危い命をとりとめたのであつた。

だからといって安閑とその職に坐つてゐるわけにはゆかぬ。潘岳は辭表を出した。

ようやくありつゝいた職を、半棄したなるうちに失ひ、庶人の籍にみとされて、彼はすこすこと故郷に還つた。